

本渡市文化財調査報告第1集

# 妻の鼻 墳墓群

1982

本渡市教育委員会

市立  
本  
天  
草  
切  
支  
丹  
浦

## 発刊によせて

本渡市亀場町亀川河口の通称「妻鼻」とよばれる小さな岬の端の台地で、板石を組んだ石室墓が鶴田倉造氏によって確認されたのは昭和32年のことでした。

その後、本格的調査が行なわれないまま昭和42年ホテル建設用地として宅地造成されることになり、本渡市教育委員会は調査の急務を迫られ、同年7月に発掘作業を行ないました。限られた期間のもと、多数の方々の協力を得て作業は行なわれ、その結果地下式板石横石室墓という特殊な形式の墳墓群であることが判明いたしました。

その成果をまとめ、報告書を刊行するにあたり、この発掘調査の指導・助言にあたられた乙益重隆先生をはじめ諸先生方、発掘調査から報告書の編集にいたるまで多大なご尽力を賜わりました田辺哲夫先生、ならびに酷暑の中にあって調査にご協力下さった方々に対し深く感謝致します。

これを契機として、より充実した文化財行政を行うよう努力してまいりたいと思います。この報告書が学術的に活用されることはもとより、市民の文化財保護（郷土の歴史）によせる意識の高揚の一助となれば幸いります。

昭和57年3月

本渡市教育委員会

教育長 浦上恒雄

## 例　　言

1. 本書は熊本県本渡市龜場町大字龜川字下  
洞 1884・1877 番に所在する妻界墳墓  
群の発掘調査報告書である。
2. 調査は昭和 42 年 7 月に行ない、県費補  
助・国庫補助をうけた。
3. 本書の執筆は田辺哲夫・乙益重隆・北条  
暉幸・西田道世が行なった。
4. 本書に掲載した実測図は調査員が作成し  
遺構整図田辺・遺物整図乙益が行なった。  
図版写真は調査員が撮影した。
5. 本書の編集は田辺の指導で本渡市教育委  
員会が行ない、平田豊弘 の協力を得た。

## 目 次

発刊によせて	教育長	浦上恒雄
I はしがき	田辺哲夫	5
II 地理的環境	田辺哲夫	8
III 遺 跡		10
1. 墳墓の様式	田辺哲夫	10
2. 祀 制	田辺哲夫・西田道世	14
IV 遺 物	乙益重隆	43
1. 鉄器・鉄製品		43
2. 装身具		48
3. 七 器		51
4. その他の遺物		52
V 入 骨	北條輝幸	53
VI 結 論	乙益重隆	61
付 編 地下式板石積石室墓について	乙益重隆	63
図 版 1~39		
あとがき		



## I はしがき

つまんばな

妻ノ鼻から人骨が出ることは古くから知られていたけれども、島原の乱の戦死者（注1）のものと信じられていた。昭和32年11月当時の本渡中学校教諭鶴田倉造氏は1基の石室を発掘し、鉄錠など副葬品を発見して、これらが古墳であることを確認した。（注2）

昭和41年天草五島が完成すると、本渡市にも観光ブームが到来する形勢となり、ホテルが次々と建設されることになった。本渡市歓訪町で歓訪花ホテルを経営する渡辺万吉氏は、その別館として本格的なホテルを建設するため、景勝の地である妻ノ鼻を選んだ。建設用地はブルドーザーで整地するので、遺跡の消滅を憂えた渡辺氏は工事着手前の調査を希望した。

本渡市文化財保護委員会員井勇氏（市立切支丹館館長）の通報を得た本渡市教育委員会は昭和42年7月13日から本渡市出身の別府大学生山崎純男君に嘱託して予備調査に着手した。その結果、大規模な古墳群であることが判明したので、7月18日本格的な調査団を編成した。しかし、なにぶん急な調査であったため、スケジュールや予算の上でも困難が多かったので、7月22日をもって一応調査を休止した。

文化庁はこの調査について本渡市教育委員会に対し、調査費65万円の半額を昭和43年度国庫をもって補助することになった。また、渡辺氏はこの古墳群の価値と意義を認識して、ホテルの建設着手を繰り延べるとともに建物の位置や構造を一層変更して古墳群を全面的に残すことができるよう配慮し、ホテル内の古墳庭園として保護するという構想をたてた。しかし、多くの人骨が埋葬されたままであるので、改葬してほしいとのことであり、発掘は避けられなかった。

昭和43年7月17日から26日にわたり、第二次の本格的調査を実施した。今回はとくに人類学的調査を頭から併行して行なうとともに、35基のすべてに亘り調査を完了することを目標としたものである。

なお、この報告書の執筆は、I、はしがき II、地理的環境 III、遺跡を田辺哲夫・西田道世。IV、遺物 V、結論を乙益重蔵。VI、人骨を北条暉幸がそれぞれ分担した。

（注1）妻ノ鼻の東南壁下に「千人塚発掘の跡」の石碑が建立されている。これは昭和31年、本渡城趾に千人塚を建立した際、妻ノ鼻から発掘したものと、千人塚に移したのを記念して建設したものである。

（注2）このとき発掘したものは第22号であって、発掘者は箱式石棺と考えていた。鉄錠2個を発掘、遺物は本渡城趾の博物館「本渡市立天草切支丹館」に収められている。その成果によって、昭和41年文化財保護委員会発行の「全国遺跡地図（熊本県）」には「2108妻ノ鼻古墳群」として登録されている。

（注3）II、2 葬制の記述は実測図・調査日誌・実測図註記をもとに西田道世がまとめたものである。

## 調査団の構成

主催者	本渡市	本渡市長	横山 寛人
調査員	肥後考古学会会員		坂本 繁堯
	熊本女子大学教授、熊本県文化財専門委員		乙益 重隆
	熊本県教育庁指導室指導主事、熊本県文化財専門委員	田辺 哲夫	(代表者)
	熊本県立鹿本高等学校教諭	隈沼 志	

(以上、日本考古学協会会員)

熊本大学医学部助手	北条 順幸
同	石井 礼二郎
肥後考古学会会員	緒方 勉
熊本大学法文学部助手	佐藤 伸二
本渡市立本渡中学校教諭	前田 敏
阿蘇郡小国町立宮原小学校教諭	平岡 勝昭
熊本県立天草農業高等学校教諭	中島 徹

### 調査補助員

熊本大学法文学部学生	本田雄司、廣田寛男、小林義照、板橋和子
熊本医科大学学生	敷島安人、田中泰良
熊本短期大学学生	平山修一、佐藤哲三
別府大学文学部学生	山崎純男、平山吉久、安東勝人
鹿本高等学校生徒	野中周一、西山一洋、月足巧尊、井上時男、福島精七、松本誠剛
九州学院高校生徒	山下敏文、西浦博秀、山田 武
宇土高等学校生徒	高木恭二
本渡中学校教諭	鶴田文太郎
同 生徒	飯田達也、赤松清司、井上泰典、阿向孝志、熊谷直晃、松浦 徹、岡部英子、白石邦子、西山美紀、海 公子、山崎久美子、金子早苗

### 調査事務局

本渡市社会教育課長	倉田 栄	社会教育課職員	山崎末雄
本渡市中央公民館主事	平方嘉寛(主査)	"	山本忠雄
本渡市本渡町公民館主事	馬場一男	"	山下洋右
社会教育課公民教育係長	浦上惟昭	"	岡部逸子
地 主	謙芳荘ホテル社長	渡辺万吉	

島  
原  
湾



第1図 妻の鼻墳墓群付近の地図 (2.5万分の1)

## II 地理的環境

妻鼻は本庶市の南の郊外、亀場町にある。(本庶市亀場町大字亀川小字下島 1884, 1877番地)

天草上島と下島の間に架かる開明橋瀬戸橋を渡って天草下島に入る。道を新国道にとって北上し、右手、天草工業高校を過ぎ、亀川橋を渡ってすぐ左手に見える小さい丘が妻鼻である。

(第1図、図版1)

岬という名が示すとおり、もと海中に突出した岬であったが、昭和36年から始まった都市計画による造成で500ドルの沖合まで干拓されたので、今では丘のように見えるのである。

妻鼻は面積約4,000平方メートル、海拔12メートル強。南は亀川の侵蝕を、東は海蝕を受けて、ともに急崖をなしている。北と西は一応緩傾斜となっているが、西は轟手の小高い連山に連なり、北は150メートルほど屬てやや高くて大きな岬(ホテルニュ一天草や栗島神社がある)につながっている。この二つの岬の間は以前、満潮時には入り江になっていたという。したがって、妻鼻はもと三方を海や川にかこまれた岬であった。

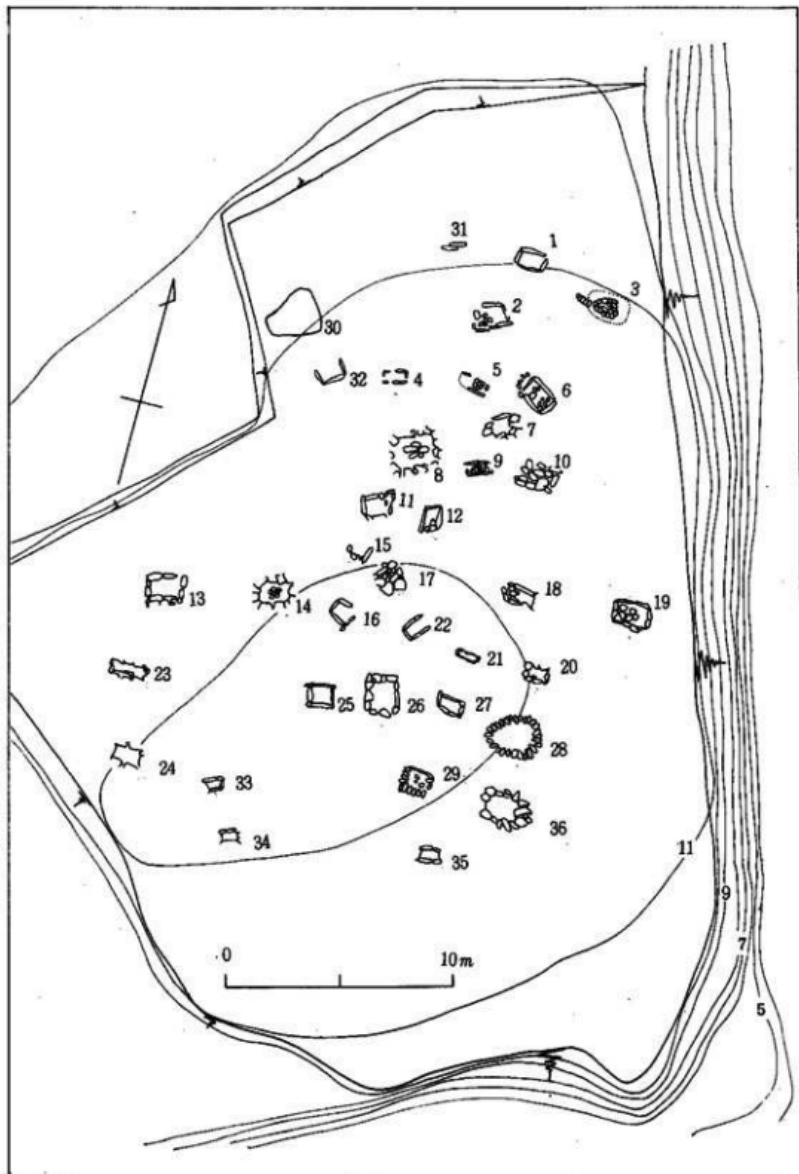
妻鼻のうちで一番高くなっている東南隅(海側)に1,000平方メートルほどの平坦面があり、そこに35基の石室が現存するのである。高い部分の西側一部は削りとられて低くなっているが、そこからも数基の石室が発見されたという。今回の調査にあたってステッキボーリングでくまなく石室の所在を探査した。あるいは南側で一、二の発見洩れのものもあるかも知れないが、築造当初を推定しても、石室群は40基内外であったと思われる。(第2図、図版2-5)

この地は天草上、下両島の間に横たわる瀬戸(幅150メートル、長さ3,000メートル)の北の出入口を扼する交通の要衝で軍事的にも重要な地点である。

これらの墳墓を含んだ人々の集落は、地形上からも、亀川左岸の微崩状地で、湧泉もある亀川中学校付近が適地と観察される。昭和32年亀川中学校創設の頃、運動場から堅穴住居跡と弥生式後期の黒髮式土器破片、粘板岩磨製石斧、黒曜石石礫などが発見され。坂本鉄砲、鶴田倉造両氏が踏査したことがある。

さらに、この一帯は中世の天草氏の本拠地と言われており、室町期の宝鏡印塔や五輪塔の破片も数多く発見される。

(田辺哲夫)



第2図 妻の鼻墳群地形図

### III 遺 跡

#### 1 墓の様式

妻鼻墳墓群の石室は、数枚の広い板石をもって長方形に立て並べて側壁を構成し、その上に小さい板石で持送り式に飾書きをしている。

この飾書きの形態は薩摩地方で既に注目されている「地下式板石積石室墓」のそれと同じ手法であるが、奥座の地下式板石積石室墓と異なる諸点は、①奥座のそれが円形プランの石室であるのに、妻鼻は長方形であること。②側壁が小口板石積であるのに対し、こちらは箱式石棺のように板石を立て並べて側壁を構成していること。③石室内を土砂で満たしているのに対し、これは空洞であったと考えられること。④地表面に若干盛土が存在したと推定されることなど、などを挙げることができる。

(1) 面積と基數 地形については地理的環境の項で触れたので省略する。東西 28 メートル、南北 23 メートルほどの範囲に 35 基の石室が稠密に群生している。

(2) 用材 天草島は天草砥石で知られるように砂岩が非常に多い。妻鼻墳墓群の用材はすべて砂岩である。側壁の用石は比較的に大きく、厚さ 10 数センチ、最も大きいもので長さ 150 センチ、幅（高さ）100 メートル程度のものである。構造によってできた板石で、断面の軟かい部分が海蝕を受けて彫理を見せており、穿孔によるおびただしい穿孔を残しているものも相当にあって、海から運ばれたものであることを示している。遺跡のすぐ下、亀川の川口に砂岩の傾斜している堆積堆頭が広く存在しているから、用石の入手は簡単であったと考えられる。また、穿孔による穿孔のある砂岩は、地元の人の話によれば、東南方 5 キロメートルの対岸（上島）にある本渡市下浦の須森附近にもあるという。

被覆用の用石も砂岩の板石が多い。厚さ数センチ、一辺 50 センチ程度の多角形のが手頭であつたらしく、その大きさに割って作ったのがかなり見受けられる。また、海岸又は河原の転石も相当数使用されている。

(3) 平面プラン 長方形であるが、長い辺で伸展葬が可能な 160 センチを越えるものは 20% にも満たず、大部分が 100 ~ 160 センチの範囲内である。短い辺は長辺の  $\frac{3}{4} \sim \frac{1}{2}$  程度が最も多く、箱式石棺よりも寸づまりで伸展葬には向きであり、幅が広く合葬墓にふさわしい形態をとっている。

(4) 側壁の構成 側壁は 4 枚から 8 枚までのうちで構成されている。① 4 枚のもの（22, 24, 25, 29）は規模としては中型で平面プランが正方形に近い。② 5 枚からなるもののうち、西南の隅を小さな石で塞いた例（11, 16, 27）や、③ 南側に 2 枚を使う例（10, 12, 36）と北側に 2 枚を使う例（14, 17）がある。④ 6 枚からなるものは、長い壁を両方とも 2 枚づつで構成していく（1, 3, 8, 9, 13, 20, 23, 26）最も多い。⑤ 7 枚からなるものでは両側を 3 枚としている（18, 19）が、⑥ 6 号では三方が 2 枚づつ都合

7枚になっている例もある。(7, 33号もこの例に入るか)

以上を通してみると、(6)の場合を除き、短辺は1枚の板石で構築されている。また側壁用石の多くは石窓の大きさと直接関係がないことが判る。

ただ注目されることは、破損のひどくない石室のうちで、側壁の1枚が失われている例(6, 10)  
27があることで、それは何れも西南側の側壁である。

(5) 構造上の例外2種 28号だけは竪穴石室のように小口積みに側壁を積み上げているが、天井部の被覆は、石室内に陥没している用石からみると、他と同様な構造であると考えられる。

21号は9個の大きな長手の礫を以て長方形に構築しているが、最も小さい例であり、第一次的な埋葬ならば小児でなければ収容できないと考えられる。被覆用石が全く見当らないが、当初からなったものかどうかは不明である。

(6) 被覆 側壁の上端から上方には小さい板石が鱗葺きに葺かれている。その技法は、四角な板石を菱形に使い、山形になるよう連続させて並べ(巨歴連続)，反対側の陵角を上で押えて固めている。ストレート葺きに見られるこのような手法をもって、寄棟の屋根のような形に傾斜をつけて葺き上げている。頭蓋に残っている墳基は18基である。(1, 3, 7, 8, 9, 11, 13, 14, 17, 18)  
20, 23, 24, 26, 27, 29, 32, 36

(7) 床 粘土をつき固めたものや、末に粘板岩の径5ミリ程度の小砂利を敷きつめたものがあった。床面は極めて浅い中空みになっているものが大部分であるが、頭蓋を置いている方と反対の側がやや高いものがあった。

(8) 封土の有無について 小さな板石で鱗葺き状に被覆している状態の完存するものがないが、現存の状態から推定すると、側壁の上端から60~80センチ程度で天井に達するものが大部分であると考えられる。そうだとすれば、地表上10~20センチ程度天井が突出することとなり、その上に僅かではあっても、上の被覆がなければ崩れやすいであろうから、表上50センチ内外の土錆頭のような一積の封土が存在した可能性が強い。

(9) 石室内の空洞について 石室内が空洞であったか、土が充満していたかも問題となるところである。しかし天井石の崩落したものが床面にまで達するものが多いことからも空洞であったことを知ることができる。

(10) 類似する遺構 天草郡大矢野町稚和島の千崎古墳群では長さ500メートルの丘に21基の古墳群在が見られる。うち11基は箱式石棺であり、他の10基は積石塚で両者が混在している。積石塚といつても、多角形の小さな砂岩の板石を数十個以上に積みあげている程度のもので、妻飾とよく似ている。この積石塚は発掘調査をしていないので、その内部がどうなっているかは不明であるが、第18号の箱式石棺の例では、その周囲に積石だったと思われる板石が散乱していたから、やはり、こ

これらの積石塚の内部主体は箱式石棺である可能性が強い。第18号は蓋石があったかどうか不明だが、幅の狭い普通の箱式石棺である点が妻鼻と相違する。

千崎から300メートルほど距てた桐の木尾ばねには妻鼻28号と類似する幅の広い竪穴石室があり、上部に積石がみられる。しかし石室には大きな板石で蓋がしもあるし、また、地下に營まれているわけでもない。丁字頭の美麗な曲玉など遺物も豊かであった。

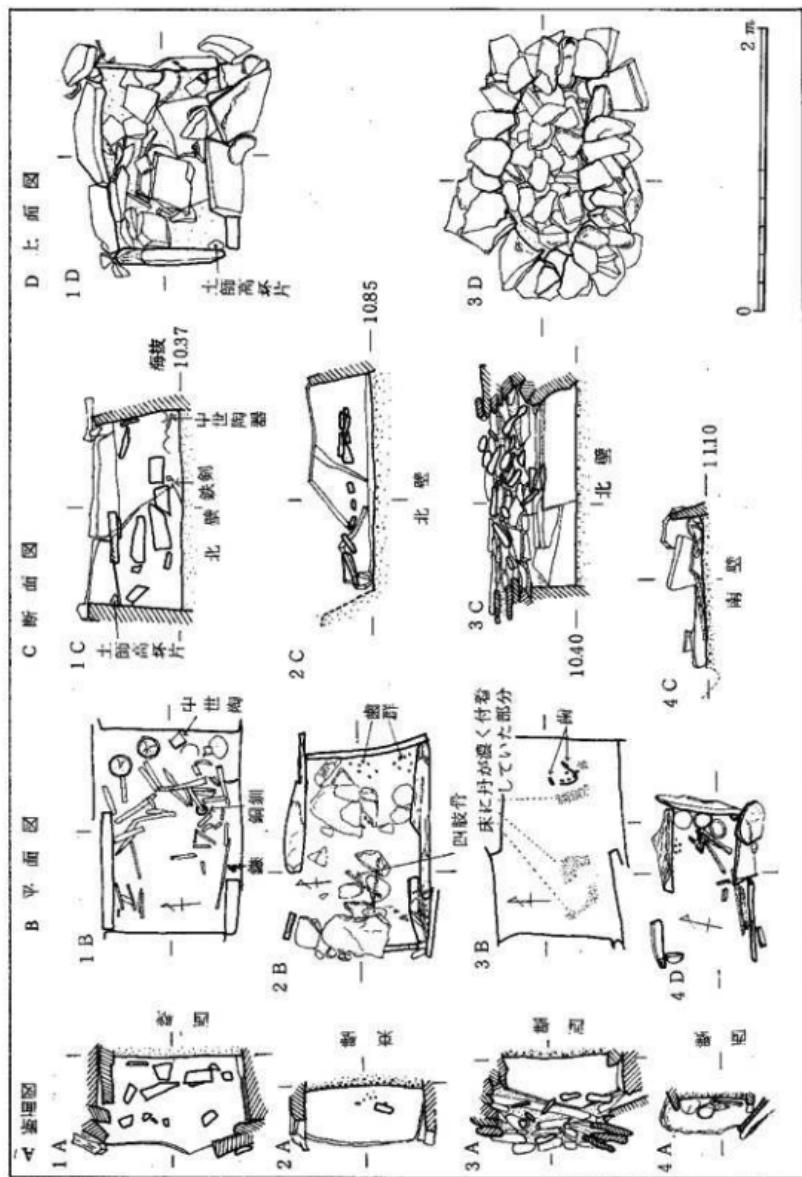
さらに、対岸、宇土郡三角町波多の平松の箱式石棺群の中には大きな積石塚が1基あった。

これらの諸例からすると、天草北部のものは、①積石塚は地上に露出し、その内部主体は箱式石棺と考えられ、②縦に竪穴石室をも併せ持ち、③箱式石棺群と共存するという特徴をとらえることができる。

次に、熊本市の東南郊、上益城郡益城町秋永遺跡では方型周溝墓を中心とする箱式石棺群の中に1基の幅の狭い竪穴石室を併せ持っている。しかし積石は存在しない。

以上述べた各遺跡の墳墓群の様式を通観すると、秋永から周溝墓を取り去り、積石塚を交えたのが維和であり、維和の箱式棺を方形に切替え、積石の代りに板石積にしたのが妻鼻であり、妻鼻の方形を円形に切替えたのが薩摩の板石積石室墓であると考えられる。また、平松、維和、妻鼻、薩摩と積石などの上部被覆が次第に地下に没していく経過もたどることができる。 (田辺哲夫)

- 注1. 「維和島」 昭和30年玉名高校考古学部が調査したもの
2. 「平松 箱式石棺群」 坂本經亮著「肥後上代文化の研究」所収 昭和54年刊
3. 秋永遺跡 昭和42年 田辺哲夫、緒方勉らが調査。



第3図 妻の鼻塚墓群 1. 2. 3. 4号石室墓実測図

## 2. 葬 制

### 第1号石室墓（第3図、図版6）

4個の頭蓋が東壁に並べられている反面、おびただしい数の長骨が雖然かつ累々と堆積し、埋葬されたのは4体をはるかに超えるものであったと考えられる。湿気が多く骨はベトベトした感じで保存が悪かった。

銅鏡は長骨の間から発見されたが、装着された状態ではなかった。鉄鏃2本は頸位置か。

土師壺等の坏部の破片は、崩落後に、石室外から落ち込んだものか。（田辺）

天井は陥落し、原形は保っていない。床面七10cmの位置で中世陶器が検出されたが、盗掘時の中ものは不明である。

平面形は長方形を呈し、長辺150cm、短辺90cmを測る。長軸の方位はN-94°-S（時計廻り、以下同じ）である。

側壁は6枚の板石を腰石として、箱形の一室を構築する。東・西の短壁は5°～10°内傾しているが、南・北壁はほぼ直立か、むしろ外傾している。天井は、この腰石の上から持送りで形成されていたものと思われるが、陥落しているため、詳細は不明である。

側壁の構築角度から推定すると、石室の築造順は両短壁を最初にし、長壁がその後に設置されたらしい。根固め石や板石の「もたれこみ」状態もこれを証する様である。

調査口は昭和42年7月19日、調査者は池辺良男、佐藤伸二、本田雄二、田辺哲夫であった。

（西田）

### 第2号石室墓（第3図、図版6）

北西隅の側壁と、葬石の大部分が失われて、石室の保存はよくない。床は小砂利をしきつめている。（田辺）

南北が東壁近くに広く点在し、大體骨が西寄りに若干残っていたが、採取できないほどであった。

天井・西壁・北壁西側の腰石は失われ、盗掘の跡が著しい。このため、正確なプランや數値は捉えられないが、以下のとおりに推定できよう。

平面形は長方形、長辺160cm、短辺80cm。長軸の方位はN-95°-Sである。

側壁は短壁が14°近くも内傾しているのに対し、長壁は外傾気味の直立である。床面は、やや中凹みである。全体的な形状は1号に近似していたものと推定されよう。

遺物は人骨に混じって床面近くから土師器が一片、出土しているが、時期を明示しているものかは断定できない。

昭和42年7月19日に乙益・田辺が調査・実測し、佐藤が図の補正をした。（西田）

### 第3号石室墓 (第3図、図版7)

天井中央部が崩落しただけで板石が途中まで残っている。床は小砂利をしきつめている。

東壁中央に近く頭骨があるほか、骨粉が残っていて1体と考えられる。頭骨や、骨粉のある床面に濃く丹が残り、石室の用石にも丹が着いている。

滑石製勾玉や玻璃小毛を発見したので床面の小砂利を水洗した結果、勾玉13個、小毛94個、碧玉製管玉3個と鉄鏃柄部片2個を採取した。(田辺)

石室の平面形は長方形を呈し、長辺143cm、短辺86cmを測る。長軸の方位はN-92°-Sであった。

6枚の板石で30~40cmの構築する。短壁の内、西壁は直立しているが、東壁は25°弱内傾している。保存状態からみて、原形に近い角度であろう。長壁は外傾気味の直立である。構築より上部の構造は、小板石の持ち送り式で天井に至っている。

調査・実測者は本田雄二・海公子・山崎久美子であった。(西田)

### 第3号追記

この調査は42年度であったが、調査後、山崎純男によって、板石間の間から小型の銅鏡一面が採取された。(第14図、図版38)

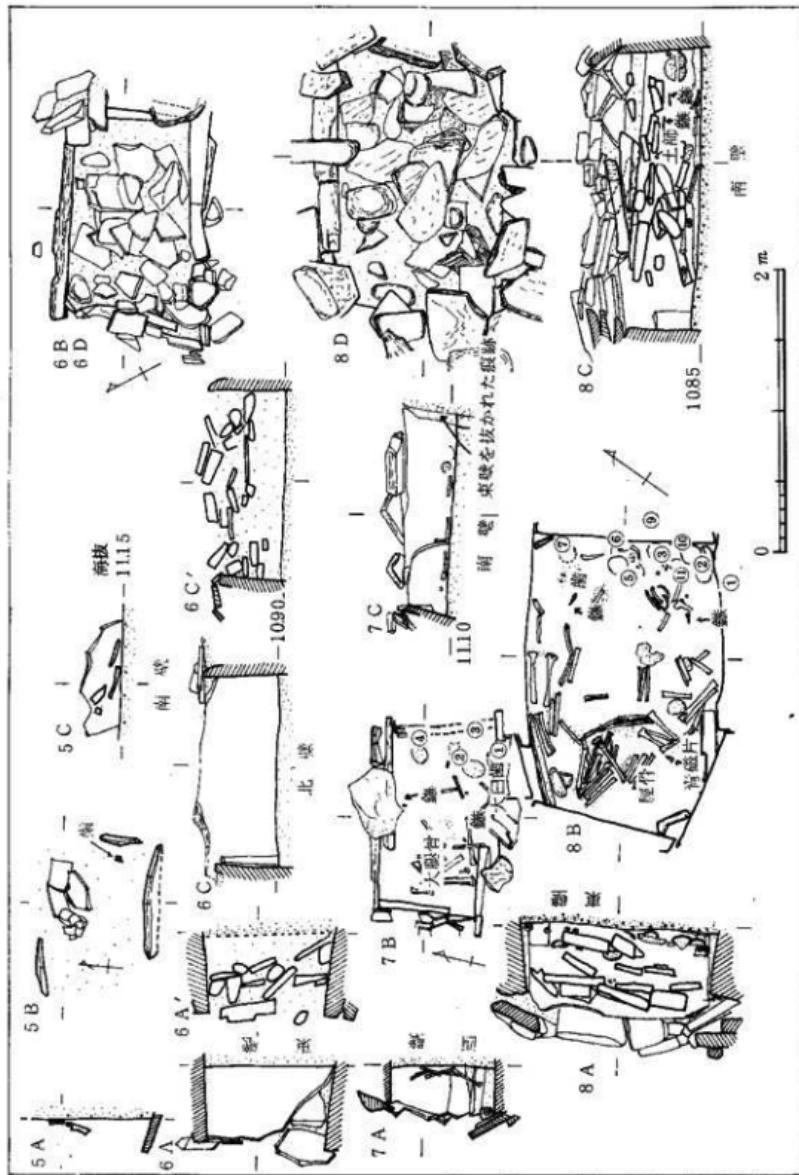
### 第4号石室墓 (第3図、図版8・27)

西北の側壁とすべての人井石が失われていたが、東壁直下に3個の頭蓋と比較的保存のよい下顎骨2のほか若干の長骨が残っていた。また、北壁寄りにかなりの歯が散在していた。床は小砂利を敷いている。(田辺)

石室の平面構は長方形を呈し、長軸110cm余、短軸49cm、長軸方位はN-77°-Sであった。構築は高さ30cm内外である。長壁は直立、短壁は内傾している。

遺物は検出していない。

調査・実測者は乙益・山崎純男である。(西田)



第4図 妻の墓墳墓群5.6.7.8.行右室墓実測図

### 第5号石室墓（第4図、図版8）

側壁の一部が残っているだけだが、床の川砂利がまばらながら残っていて、石室の大きさは推定できる。東壁寄りに塗が残っていた。（田辺）

残存していた川砂利・土塗の縁から推定し得た床面の大きさは東西（長軸）120cm、南北（短軸）80cm程度の長方形である。しかし、石材の厚さを勘定すれば、これより若干狭くなろう。塗の位置からみて、埋葬は東枕を採用したものと思われる。したがって、石室の主軸は長軸に一致する。主軸方位はN-85°-Sである。側壁は前述の様に後世の抜取によって僅か3枚の板石が遺存しているに過ぎない。北壁・南壁・東壁にそれぞれ1枚ずつである。側壁の高さは床面から25cm弱であるが、石材そのものの高さは記録していない。横断面図からも明らかなように、本石室の側壁はやや内傾している。これは通例に反するが、おそらく、後世の擾乱時に倒れたものであろう。

遺物は出土していない。

調査者は本田・海・山崎（久）であった。（西田）

### 第6号石室墓（第4図、図版9）

西南隅の側壁の一部を板石小口積にし、それが崩れ石室内に落ち込んだ状態が注目を惹いた。

（田辺）

西南隅の石材の乱れはある時期に振り返されたためと思われるが（田辺所見）、その時期は不明である。

平面形は長方形を呈しているが、西南隅はやや鋭角に張り出している。根石の状態からみて、上述の「ある時期」に破壊された結果ではなく、構築時からの形状と思われる。人骨が出土しておらず、枕と主軸の方向は不明であるが、長軸140cm、短軸84cmを測る。他例にならえば長軸の方向は、N-119°-Sである。

根石（一番石）は広口を石室内に向け、側壁を構成する。側壁高は40～55cmである。北側壁は一枚、南側壁は二枚、東壁は一枚、西壁は二枚の板石を使用している。二番石から大端石までは30cm長の不定形板石を持送り式で構築したものと思われるが、大半が室内に陥落しており詳細は不明である。

掘り方の縁は確認していない。

人骨・遺物の検出はない。

調査・実測者は、7月20日、田辺である。（西田）

### 第7号石室墓（第4図、図版9・28）

東壁が抜き取られているが、その痕跡は残っている。落ち込み石も殆どない。床は頭蓋の方が7cm低くなっている。

頭蓋や骨など4体分が東壁近くに並んでいるが、四肢骨や骨が散乱している。

鉄鎌柄の破片2個や土器の小片が落ち込みの土中から発見された。(田辺)

平面形は長方形を呈している。西半の側壁が東半の側壁の北側に設置されているため、幾分いびつである。東・西の短壁はいずれも側壁の内側に据えられている。長軸138cm、短軸73cm。頭骨が東壁に寄っていることから東枕であろう。主軸方位はN-77°-Sである。

板石(一番石)は広口を室内に向け、高さ25~35cmの側壁を構成する。板石は各壁とも二枚である。側壁の角度は床面に対し、ほぼ垂直であるが、短壁はやや内傾気味である。

天井は二番石から小口を室内に向けた持送り式で構築されていた形跡がある。ただ、残存石材が少なく、詳細は不明。一見、箱式石棺風であった。床面には朱の附着はみられなかった。

掘り方は記録していない。

人骨は4体分。

遺物は光満上中より土師器片と鐵片2を検出した。本墳墓は昭和42年と43年の間に亘った継続調査であった。調査者は本田雄司・乙益・敷島であった。(西田)

#### 第8号石室墓 (第4図・図版10)

石室も大型で、この墳墓群中最多の12体までの埋葬が確認できる。石室の隅には補強のため石を立てている。菱形や三角形の板石が鱗葺き状に積まれている状態がよく残っている。

石室中央部には天井石が床面まで落しておらず、その量も多い。崩落する時まで石室が空洞であったことを示している。

床面は小砂利と粘土で詰められているが、丹で染まっており、東壁の頭蓋には丹の付着が認められる。

8号・12号を除き、頭骨は東壁に集まっている。5号の頭蓋だけが他よりもやや高いところにある。西側中央部の長骨には集めて崩えられるように見受けられるものがある。

鉄鎌が2本、先を東に向かっていったが、やや高いところにあった。(田辺)

原形を保っているとみられる石材は、二番石かせいぜい三番石までで、天井は完全に室内に略段していた。しかし、これが自然崩落かどうかの判断には慎重を要する。自然の崩落であったならば、通常、後世の遺物はその上に堆積する。しかし、本石室は、腰石と持送り二番石の間に、あたかも腰石に設かれたような状態で青磁片が1片、また、床面近くに1片の青磁片が検出されている。人骨の出土位置にもやや不可思議な所がある。これらのことから、本石室には人為的な破壊と石材の投込みに考慮を巡らす必要がありそうである。

平面形はほぼ長方形を呈しているが、南壁がやや狭まっている。短壁は長壁の石材の内側に据えられている。長軸202cm、短軸140cm。頭骨は東壁に集中しており東枕と言えよう。主軸方位N-

55° - S。

根石（一番石）は腰石様であって、高さ45～65cm、各壁とも内傾気味の直立設置で、側壁を構成する。長壁は2枚石、短壁は一枚石である。

調査は昭和43年7月、乙益・広田真男が行った。（西田）

#### 第9号石室墓（第5図、図版10）

側壁が内傾し、その上に積み重ねて書かれる板石も水平でなく傾斜している状態がうかがわれる。

6体の頭骨が東壁にそって並べられるが1体は中央寄りに頭蓋があった。四肢骨が西側にかたまっている。（田辺）

天井石は凹み気味であるが、床面にまで陥没したものはない。保存状態の良い石室である。

平面形は略々長方形を呈しているが、西壁寄りで10cm程度くなっている。これは西側側壁の南北壁とともに東側側壁の内側に石材を設置したためである。東南隅も第5図のとおりにややいびつである。長軸115cm、短軸70cm。東壁寄りに頭骨が集中していることより、東壁が奥壁の役割を担う。

主軸方位N-68°-S。

根石（一番石）は床面から25～40cmの高さがあり、側壁を構成する。長壁が板石2枚、短壁が1枚で、いずれも広口を室内に向いている。根石の傾きは、短壁が強い内傾、長壁が直立をなして、他例と変化はない。

二番石からの積み方は、しころ葺きに即していたと思われるが、板石そのものは不定形である。また、角度も垂直に近く、石室内に向かっている面は小口・横口というよりもむしろ広口の一部が面を向けているような状況である。掘り方や埋込みの状態を調査する余裕はなかったようであるが、石室の正確な積み方を知る上には、是非、検討したかった所である。

床面は赤土を均めたものであった。丹（朱）はなかった。頭骨のある東壁側が西壁側よりも5cm程高かった。

遺物は人骨以外に検出していない。

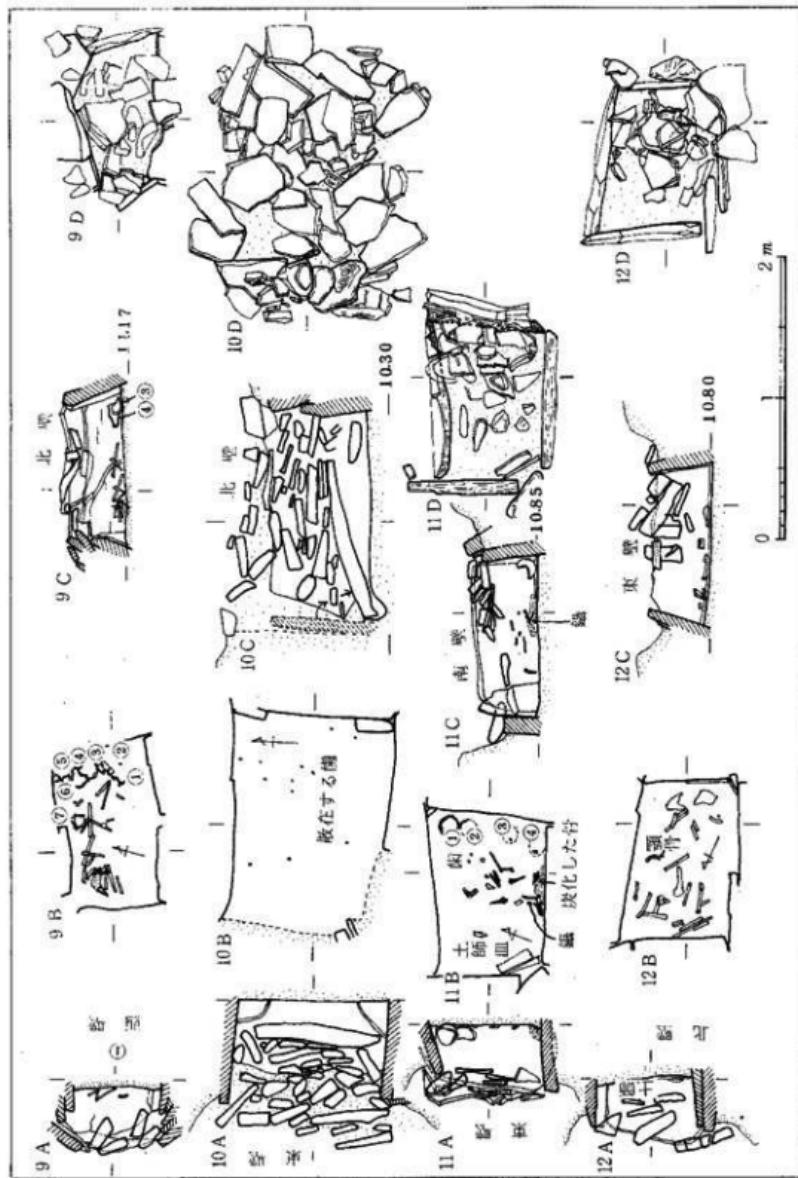
昭和43年7月に調査し、田辺・佐藤・山田武が発掘・実測を行い、隈昭志が床面の最終点検を行った。（西田）

#### 第10号石室墓（第5図、図版11）

西側の側壁が床に倒れ、その上に、天井の板石が、しころ葺のまま一挙に陥没した状態が認められる。西南隅の側壁は失われている。

床には歯が広く散布するだけである。（田辺）

石室の平面形は長方形に近いが西壁寄りでやや狭くなっている。西壁が倒壊しているために、正確な数値は捉えられないが、長軸130cm強、短軸105cmを測る。歯が東壁寄りに集中していること



第5図 妻の墓陪羣9.1 0.1 1.1 2号石室墓実測図

から、東枕とみられる。したがって主軸は長軸に一致し、方位はN-90°-Sである。

根石（一番石）は板石の広口を石室内に向け、50cm～70cmの高さで側壁を構成する。なお、東壁にはバリを組みその倒壊を防いでいる。東壁・北壁・西壁は一枚の板石で構成され、南壁は二枚の板石で構成される。短壁は倒壊している西壁も含めて、もともと内傾していたと看取る。長壁の内、北壁は外傾しているが、南壁はかなり内傾している。この南壁の内傾は西側の南壁が失われた結果、土圧・石圧・重力の不均等化等の影響で内傾したものであろう。本来は直立に近かったものと思う。

二番石以高の天井石は不定形とも言えようが、矢形ないし亀甲形とみることも可能であろう。長軸長40cm前後のものが最も多い。

土盛ないし掘り方は確認していない。根石の床面下の深さも確認していないが、倒伏した西壁の状態から10～15cm程あったと思われる。

遺物は側壁寄りの床面に密着して炭化物が、石室中央部に床面から3cm程、浮き上がった状態で検出されている。なお、染付の近世磁器が、陥没した天井石に混じって、それらの中程（L-1075m）から検出されており、破壊ないし崩壊の時期を暗示している。

調査は昭和43年7月19日から21日まで、緒方勉と佐藤が行った。（西田）

#### 第11号石室墓（第5図、図版12）

しころ葬、東側で残存。（田辺）

表土下15cmで残存部天井石の一部が検出された。このため、耕作時に大量の石材が運び出されたと考え、根石と若干の天井石を残すのみである。

石室の平面形は略々長方形を呈するが、北東隅が嘴状に突き出ている。北西隅はこれに反し、かなり石室内に入り込んでいる。これは西側壁とその北端にある胴側の位置が略々原位置を保つと観察されるところから、内側に土圧によって押し込まれたものと考えられる。同様の理由で逆にこの側壁の東端（嘴状に突出している箇所）は略々原位置を保っているものとみられる。このように観察すればこの石室は現状より更に歪みの少ない長方形であったと言い得よう。したがって、ここではその復原状況を記せば長軸110cm、短軸80cm強となる。歯や脛骨片の位置が東半に散乱していることから、この石室は東枕をとっていたものと言えよう。したがって、長軸は主軸に一致し、方位はN-70°-Sである。

根石（一番石）は広口を石室内に向けており、床面からの高さ40～50cmで側壁を構成している。四周ともに一枚の板石である。南壁と西壁の交点には、両壁を支えるバリを組んでいる。推定される側壁と床面のなす角は、短壁が内傾気味、長壁が直立もしくは外傾気味である。（北壁を含む）

天井石は殆んど残存しておらず、構造は不明であるが、残存石材が三角形・菱形等の矢形を呈して

いるものと亀甲形であり、他と同様の持送り式構造のしころ葺であろう。残存石材の長軸長は15～20cm前後のものが最も多い。

掘り方の形状・根石の床面下の深さは確認していない。

人骨は4体分は確実である。

遺物の検出は多かった。土師器の壺が西半中央に位置して検出された。床面から2cm浮き上った程でしかなかったが、倒立しており、二次的な移動が考えられる。他にも、土師器破片は6片出土している。南壁寄りには鉄鏃を4本検出した。但し、床面からは10cm近く浮いている。他に破片を2本分検出した。鏃は床面上20cm、石室の略々中央から検出された。石室内溝土を水洗した際に滑石製小玉3個を検出した。

なお、石室内から棒状炭化物が出土している。調査時の所見は「焚火の跡か」である。

調査は昭和43年7月17日から7月24日まで、前半は田辺・平山（吉）、後半は福島精士が行った。実測は田辺・平山である。（西田）

追記：中央部南側壁直下付近では炭化した骨の塊が発見された。さらに棒状の炭化物もあり、壁面にはいぶしたように炭化物が広く付着していて、石室内で燃やされたことが推定される。（田辺）

#### 第12号石室墓（第5回、岡版11）

現地表下5cmで天井石の一部が露出した。このような状況のため天井石の大半は失われていた。

石室の平面形は略々長方形を呈している。ただ、北東隅がやや突出し、西壁の南側の石材が板石一枚分外に出でており、やや歪んでいる。このような状況は原形に近いものと看做される。長軸の長さ113cm、短軸の長さ73cmである。頭骨・歯が南壁（南南東）に集中しており、東寄りの薄枕と言えよう。主軸方位はN-161°-Sである。

一番石は西壁が2枚である他は1枚石である。いずれも広口を石室内に向けている。高さは床面から40～45cmで側壁を構成する。短壁は20°近く内傾し、長壁は外傾気味に直立している。南西隅には脚鉤を施こし、他隅も空隙少なく密着度は高い。

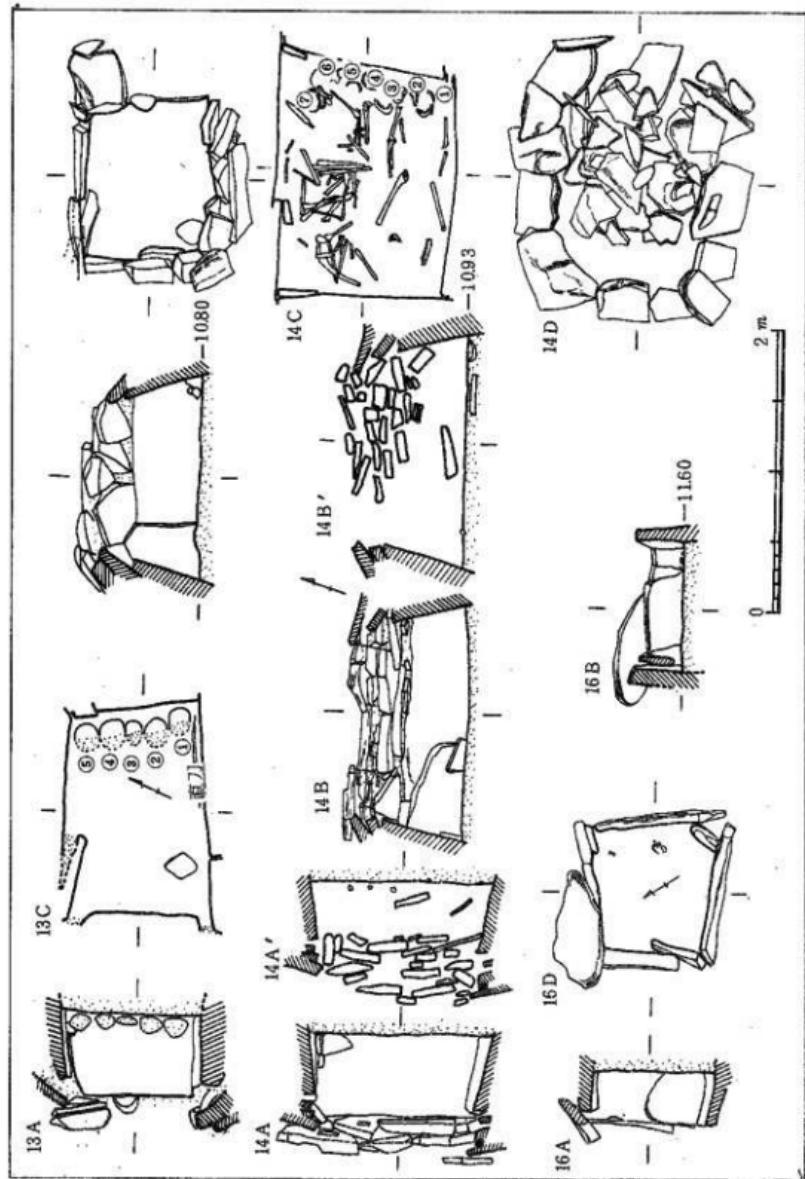
二番石以降の構造は不明だが、石材の形を観察してみると矢形が多く、他例同様しころ葺であったと思われる。

床面には朱の付着はなかった。地山即床面であった。

掘り方の状態・根石（一番石）の床面下の深さ等は確認していない。

人骨は2体で内1体は男性である。床面に略々密着しているが位置的には動きが激しい。土師器の破片の点数も多い。なお、北東隅から青磁片が出土しているが、調査者本田は「不注意により出土の地点をはっきりすることはできなかったが青磁と人骨と大体同じ深さで出土」と日誌に記している。

調査は昭和48年7月17日から7月24日まで本田・平山（修）が行った。（西田）



第6図 妻の鼻塚墓群13・14・16号石室墓実測図

### 第13号石室墓（第6図、図版13）

地表からの深さは記録していないが、一番石以外は南壁に僅かの石材の残存しか認められず、耕作等により、持ちきられたものと思われる。

石室の平面形は略々長方形を呈しているが、南東隅がやや突出している。また、北壁の西側石材が石室内に残り出している。二次的に移動したものと考え得る。北東隅は原形に即していよう。これらを勘証した上でも、北壁側は当初から、南壁側よりも狭かったと思われる。長軸の長さ147cm、短軸の長さ100cmを測る。頭骨が東壁に5体分、並べられており、東枕であることは確実である。したがって主軸方位はN-65°-Sとなる。

一番石は広口積である。高さは床面から45~55cmであり、梯壁を構成する。天井石は西・南壁に僅かに残存するがしころ葺の形状を示している。

掘り方・根石の床面からの深さ、根固め石の有無は確認していない。

人骨は頭骨が5体分、東壁にそって並べられている。南側から1号~5号である。性別は後述の北条の項に詳しい。

遺物は大刀1口鉄鎌1具鉄劍1口を検出した。大刀は出土地点が不明であったが、昭和43年7月20日の日誌によると「山崎君の弟、直刀の位置を教えた。キツ先は方向不明」とあり、図解して挿図の位置を明示してある。但し、証言は7月20日である。鉄鎌と鉄劍は出土地点未詳。

調査は昭和43年7月17日~7月20日、北条・敷島・緒方が行った。（西田）

### 第14号石室墓（第6図、図版13・29）

実測図に調査者山崎の註記がある。レベルの数値を絶対高に書き改める以外にそのまま転記する。（西田）

「石室に用いられている石材は全て砂岩であり、なかには海蝕あるものが数個みられた。」

石室内面にはベンガラが塗られている。

床面にはベンガラが散きつめられているらしい。

南側の人骨一体は完全にあり伸腹葬であるが、北側の人骨は集めた状態で何体分かは不明である。頭蓋骨は全部で8個で下がク骨は4個であり、頭骨付近にはかなりの量の歯が存在する。

副葬品は北側に長さ約30cmの鉄劍一振と中央の箇の骨に鉄環（銅）がはまつた状態で出土。また鉄環（銅）のすぐそばに鉄鎌破片（？）1つがあった。

鉄劍は床面より數cmうかんでいると思われる。また標高11.29mのところに粘土をかためた床面があり、その面と床面までの間には数個の板石が落下しているにすぎず、落石は標高11.29mより上にはほとんどが集中する。

また 11.29 m の床面に糸切り底の土鍋器が存在し、この墳墓が発見されたのは中間であり、その後耕作等により天井が落下したものと思われる。

石積みの仕方は地下式板石積石室墓と少し変わっていると思われる。】 S 42・7・24 山崎記

なお、ここに言う床面とは山崎も記しているように石室墓の床面ではなく、石室墓内に堆積した土砂がある程度固定化した時期の床面であって、石室墓の床面は標高 1.100 m である。

石室の平面形は略々長方形であるが、北東隅がやや突出している。南東隅の目地には銅鈕を、北東隅・北西隅にはそれぞれバリを銅っている。長軸 165 cm, 短軸 128 cm。頭骨は東壁沿に集中しており東枕である。主軸方位は N - 83° - S である。

廊壁は 4.5 ~ 6.0 cm で、北壁のみ 2 枚の板石を使用し、他壁は 1 枚石である。短壁・長壁ともに内傾し、他例と若干異なる。

天井石は伏形の石も多いが、石材を横口に積む（二番石）傾向がある。また二番石で伏形をなす石材はない。

掘り方・一番石の形状確認は記録していない。

調査は昭和 42 年 7 月 24 日、山崎・岡部英子が行った。また翌 43 年 7 月 17 日 ~ 7 月 19 日を経方・辰・平山（修）が清掃・実測（断面図）を行った。（西田）

#### 第 15 号石室墓（図版 14）

既に破壊しつくされ、床面らしきものが僅かに観察される程度であった。田辺の日誌によると「15 号 実測不可能、120×50 位と推定、主軸の方向が E 30 S」とある。他に記録はない。（西田）

#### 第 16 号石室墓（第 6 図、図版 14）

一番石と 1 枚の二番石、若干のバリ銅しか残存しない。

石室の平面図は略々正方形に近い。南壁がやや不正である。各辺の中点を結んだ時は長軸 90 cm, 短軸 79 cm である。頭骨・骨の位置は東壁沿に集中し、東枕であったことが推定できる。これに従うと、主軸方位は N - 109° - S となる。

廊壁は各壁 1 枚ずつの 4 枚の板石で構成される。壁高は 30 ~ 40 cm である。各壁とも直立ないしやや内傾気味である。各隅の目地は広く 7 ~ 20 cm もある。ここに總てバリ銅を設置している。

二番石は横口（横手積）に積んでいる。

人骨は歯が最も頗るに残存（4 体分）している他は、取上げ不能な頭骨が僅かに残存していたに過ぎない。その他の遺物は検出していない。

調査は昭和 43 年 7 月 21 日、佐藤哲三が行った。人骨の収上げは北条である。（西田）

#### 第 17 号石室墓（第 7 図、図版 15）

陥没しているとは言え、かなりの石材が残存しており保存状態は良い。しかし、その崩壊の時期は

不明である。これに関連して調査者小林義照は実測原図に「○木質カーボン片人骨直上に散在するも  
-80（床面より約30cm上 西田註記）に近世陶器が出土したので木質のカーボン片が埋葬当時の  
ものかどうか不明。○落込み石の面が互いに陥着しているのかかなりあったので埋葬後のある時期に  
一気に落込んだ可能性が強い。」と註記している。

石室の平面形は略々長方形である。長軸121cm、短軸80cm、東枕である。主軸の方位はN-47°  
-Sを測る。

構造は4枚の板石を広口横にして構成する。壁高50cm前後である。四隅の目地は非常に狭く崩壊  
はみえない。ただ、南西側は西壁の板石が短かかったためか、背面に更に板石を広口横にして調整を  
計っている。構造の類似は四壁とも略々直立である。

二番石以降の天井石の内短壁にかぶさる板石は特送りになっているのに対し、長壁にかぶさる板石は  
逆に背面に後退している所がある。その原因は不明。石材は二番石も、三番石以降天端石まで矢形を  
呈している。積み方も小口ないし矢先を内面に向けており、一応、しころ蓋の火井をしている。大き  
きは二番石が40cm～65cmの長軸を有しているに対し三番石以降は15～30cmの長軸が最も多  
い。

床面・掘り方・一番石の根の深さは記録がない。人骨は東半に集中し、西半は少ない。

遺物の出土は「人骨のかたわらにあり」（西山一洋日誌 西田註記）の状態であったらしい。人骨  
に混在して勾玉7個、小玉47個、鉄剣片が検出された。

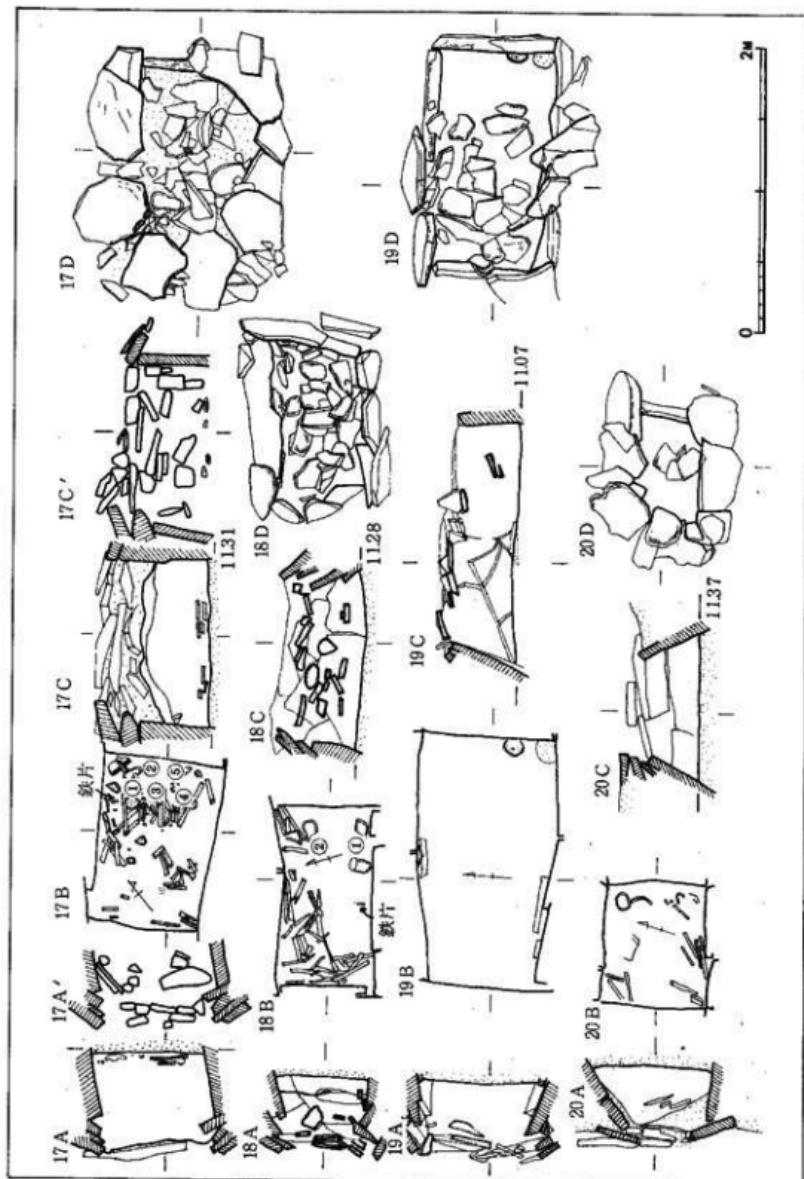
調査は昭和42年7月20日～25日、小林、西山、乙益が担当した。（西田）

#### 第18号石室墓（第7図、図版16）

調査者板橋和子の実測原図に記した註記があり、これを採録する。（原文のまま）

「石室内の落込石は比較的小さく、数は多くはなかった。排土中には近世土器片、炭等の遺物も無  
く、深さ47cmで土器片が出土し、2・3片土器片が見つかったがいずれも古いものと思われる（豪  
管理が不充分で粉灰）。深66cmで鉄の破片が出土。接合可能であるが鉄剣か鉄錐か原型は不明。石  
室内の壁石には朱を塗った跡は認められない。深さ80cmで人骨が出土し始める。現在迄の床面で、  
頭蓋骨4、手足の骨無数、あごの骨1。出土状態は北・西側の壁に沿って手足の骨が折り重なって、  
小人數〇とは思われない事間違つており東側の壁に沿って頭蓋骨が出土した。遺体を埋葬したままの状  
態と言うより、頭蓋骨と手足とを片側にかき寄せたと言う感が強い。床面は水分を含んだ粘土の為か  
骨はかなり保存がよかつたが、もうすぐボロボロにこわれやすい。（42・7・25 板橋）」（〇は  
統めず、「骨」か？（西田）

石室の平面形は略々長方形である。ただ前記の各石室に比較して非常に細長い。長軸157cm、短  
軸65cmである。東壁寄に頭骨が集中しており東枕である。主軸方位はN-100°-Sである。



第7図 妻の鼻墳墓群17・18・19・20号石室墓実測図

一番石 7枚は広口横で構成する。壁高 30cm 前後である。隙石間の目地は 5~10cm と空隙が広いが頗るな剥離の進行はなされていない。また、バリも施されていない。

二番石以高は横口・小口・矢先等、種々の積み方をなしているが、持送りの形状は一貫している。短壁・長壁ともに内傾気味である。

出土遺物は前述の板塙註記によられたい。

調査は昭和 42 年 7 月 20~23 日を板塙和子が行い、翌 43 年 7 月 17 日~20 日を本田雄司が行った。(西山)

#### 第 19 号石室墓 (第 7 図、図版 16)

構築の残存はほぼ完全であったが、二番石から天端石までの大半の石材は失われ、若干の石材が室内に落石していた。しかし、その陥落は構の上部に留まり、床面には達していない。筆者不明であるが、実測図註記にはこの間の事情を「棺内の土は、黒色土が水糸より西側 25cm 東側 55cm 位までつまり、その下は赤土であった。落ちこんだ石は、黒色土内だけであった。」と記している。

石室の平面形は西壁側が狭まってはいるが、略々長方形である。長軸長 180cm、短軸長 99cm であり、やや細長い。頭骨は南東隅に近い東壁沿にあり、東枕であった。主軸方位は N-88°-S であった。

構壁は 7 枚の板石で構成されている。両長壁の中央には板石が側壁に沿って立っているが、バリ剣であろう。目地は南西隅が 6cm ある以外は 1cm 未満の間隔しかない。四隅の壁石はいずれも内傾気味である。

天井石は残存石材が少ないが、一心、持送り形状を留めている。

床面は「床は小ジャリが敷いてあり、棺の中央部が高くなっていた(実測図註記)」状態で、別に朱の塗布はなかった様である。

石材は船て砂岩であった。

人骨は 2 体分が確認されていた。他の遺物の検出はない。

調査は昭和 48 年 7 月、敷島・平山(修)・西浦が行った。(西山)

#### 第 20 号石室墓 (第 7 図、図版 17)

石室の平面形は略々正方形に近く、東西 90cm、南北 71cm の軸長を測る。頭骨は東壁側に集中し東枕と看做し得る。したがって主軸方位は N-78°-E となる。

構壁は一番石でみると、北壁 2 枚、西壁 1 枚、南壁 2 枚、東壁 1 枚の板石で構成されるが、板石が不定形のため、北壁と西壁は高さ 20cm 余の二番石を広口横にして、構の形状を整えている。構壁高はこのため、床面から 40cm 前後に納まる。天井石は二番石以高になるが、一部に 4 番石がある程度で殆んど残存石ではなく、天端石の確定はできない。また天井石は横口相当面を室内に向けた持送りの

構築法を採用している。一番石の根の深さは記録していない。

人骨は5体分出土している。前記のように東壁に頭骨が集中しており、北側からNo.1~5とした。遺物は出土していない。

調査は昭和42年7月、前田歯が行った。(西田)

#### 第21号石室墓 (第8図、図版17)

一番石の他に残存している石材はなかった。

石室の平面形は橢円形を呈している。長軸84cm、短軸37cmの小さい墳墓である。人骨は遺存しておらず、枕の位置を確定することはできない。ただ、他例に照して東枕と懐剣するのみである。これによって推定される主軸方位はN-90°-Sである。

構壁は10枚の不定形な扁平煉瓦を組み合わせて構築している。床面からの高さは25cm前後である。橢円形の平面形が四隅の洞開によって生じたと見ることは、石材の組合せ方からみて不可能である。即ち、洞開は本来、石積後にその縫間に積め込んで石を固定するものであるが、本墳墓の四隅に位置する石材は、当初から構築の一過程に位置していたと見しく、構築の最終過程とは看做しがたい。したがって、本墳墓は当初より長方形に近い橢円形を指向して構築されたものと看做し得る。

長壁は内傾し、短壁は直立気味である。床面には川砂利を敷き積めている。遺物は未検出。

なお、本石室墓は単なる石臼墓とみる見解が調査中はもとより、その後も調査者間で続いたが、僅かに残る1枚の二番石の形状からみて、地下式板石積石室とみても可能ではなかろうか。すなわち、二番石の形状はおおむね菱形を呈し、積み方も本墳墓群他例と同様に持送り的である。魚鱗葺と推測しても不可能ではないのではなかろうか。

調査は昭和42年7月21日と翌年の7月22日に前田歯が行った。(西田)

#### 第22号石室墓 (第8図、図版18)

昭和35年に調査が行われた墳墓である。鉄鏡2個が発見されている。(5頁註2)

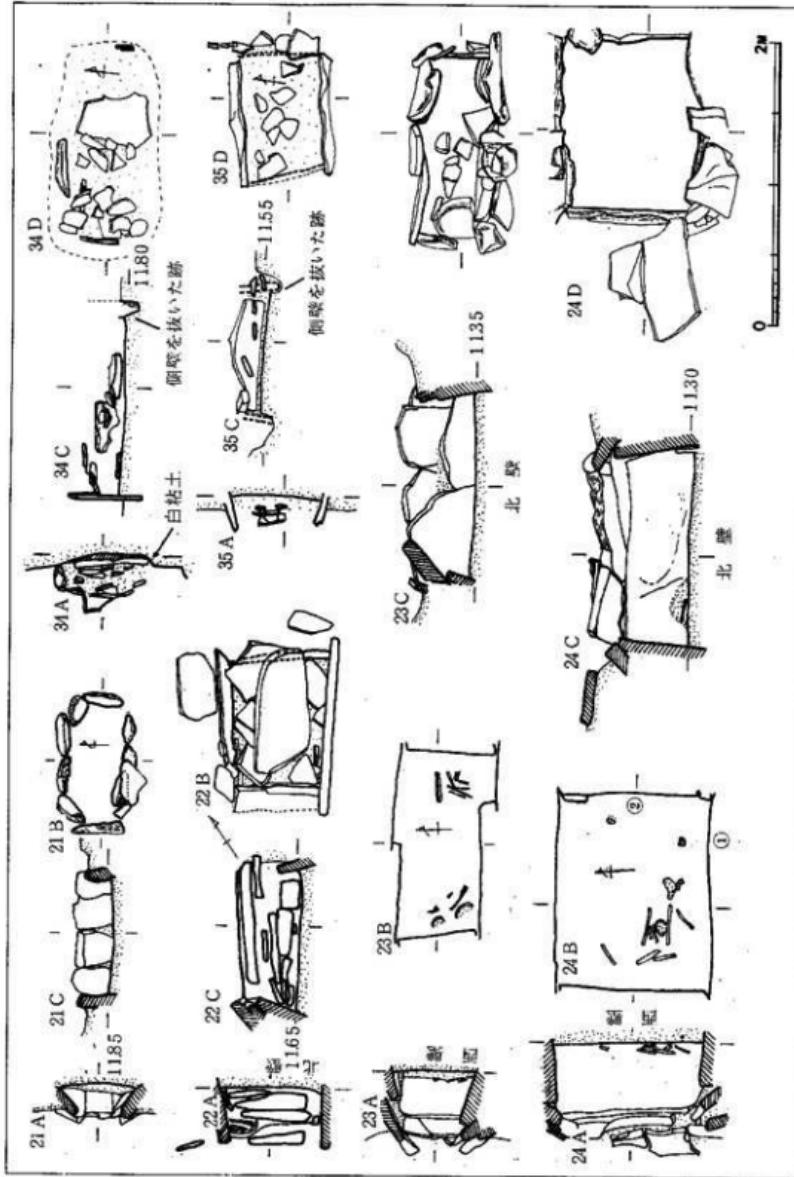
石室の平面形は南壁がやや狭いが略々長方形である。長軸90cm、短軸65cmを測る。人骨は構壁寄りに確かに残存していたが、人骨のどの部位かは不明である。他例に照して主軸方位を推測するとN-34°-Sとなる。

構壁は箱式石棺状に4枚の板石を井桁に組んで構成される。長壁は直立気味で、短壁は内傾している。(西田)

#### 第23号石室墓 (第8図、図版18)

現地表面に一部露出していたため、石材の大半は失われていた。

石室の平面形は略々長方形を呈する。但し、西壁は東壁に比較し、約20cm広い。長軸長133cm、短軸長59cmである。頭骨は西壁に集中し(3体)、西枕である。(これは、本墳墓群中の特徴な一例である。)したがって、主軸方位はN-(180°+92°)-Sとなる。



第8図 妻の鼻墳墓群21・22・23・24・34・35号石室墓実測図

櫛壁が何枚の石材で構成されているか不明である。緒方・井上のS 43・7・21の図によると、6枚の石で構成されているように表現されている。しかし、実測年月日は不明だが、振り方の線を明瞭に表現している山崎の図によると、一番石は9枚となっている。それぞれに欠点があり、判断は中断せざるを得ないが、ただ一つ、緒方・井上図は掘削の最後段階に実測されているようであり、山崎図は初期段階に多くの時間を割いているようである。このことから、緒方・井上図に幾分、分があるようである。

櫛壁高は30～50cmである。北壁は二番石を東側の一一番石の背面に一番石と略々同角度で立てかけ、北壁高の高さ50cmに調整している。その他の壁の二番石はすでに天井石の一部に組み込まれており持送りの状態をよく留めている。完全な状態であれば魚鱗葺であったろうことが略々確実である。

人骨は西壁寄りに頭骨3体分が、東壁に大腿骨、脛骨が検出された。いずれも、一次埋葬の状態を示しているものとは思われない。

人骨番号は南壁側の方を北壁側に向けて、No.1～No.3とした。No.3はNo.2よりも東側である。

遺物は検出されていない。

なお、山崎図に従うと、土塁が存在している。東及南側は東・南側壁に略々接しているが、西・北壁は20～25cm程、櫛壁よりも外側に振りこみ縁があった。

調査は昭和42年7月、山崎が、昭和43年7月21日、緒方・井上が行った。(西田)

#### 第24号石室墓（第8図、図版19）

二番石と三番石のそれぞれの一部が残存しているのみで、他は消失していた。

石室の平面形は略々長方形であるが、長辺と短辺の差は著しくない。長軸長141cm、短軸長110cmを測る。頭骨は南東隅に位置している。しかし、齒が東壁寄りと西半部の長骨間に散在していた。断定はできないが、一応、東枕と推測されよう。したがって主軸方位はN-95°-Sとなろう。

石室は4枚の板石の広口を石室内に向けて立てた、高さ40～50cmの壁によって構成される。これらの石材は略々長方形の広口面を有し、整った形状を示している。短壁は内傾し、長壁は直立気味である。南東隅には胴飼が存し、北東隅にはバリ飼がある。これらの構成物は北西隅と南西隅には存せず、3cm程の目地空間がある。天井石は不定形の板石の小口を石室内に向けて持送り式にしたらしいが、残存石材が少なく、詳細は不明である。

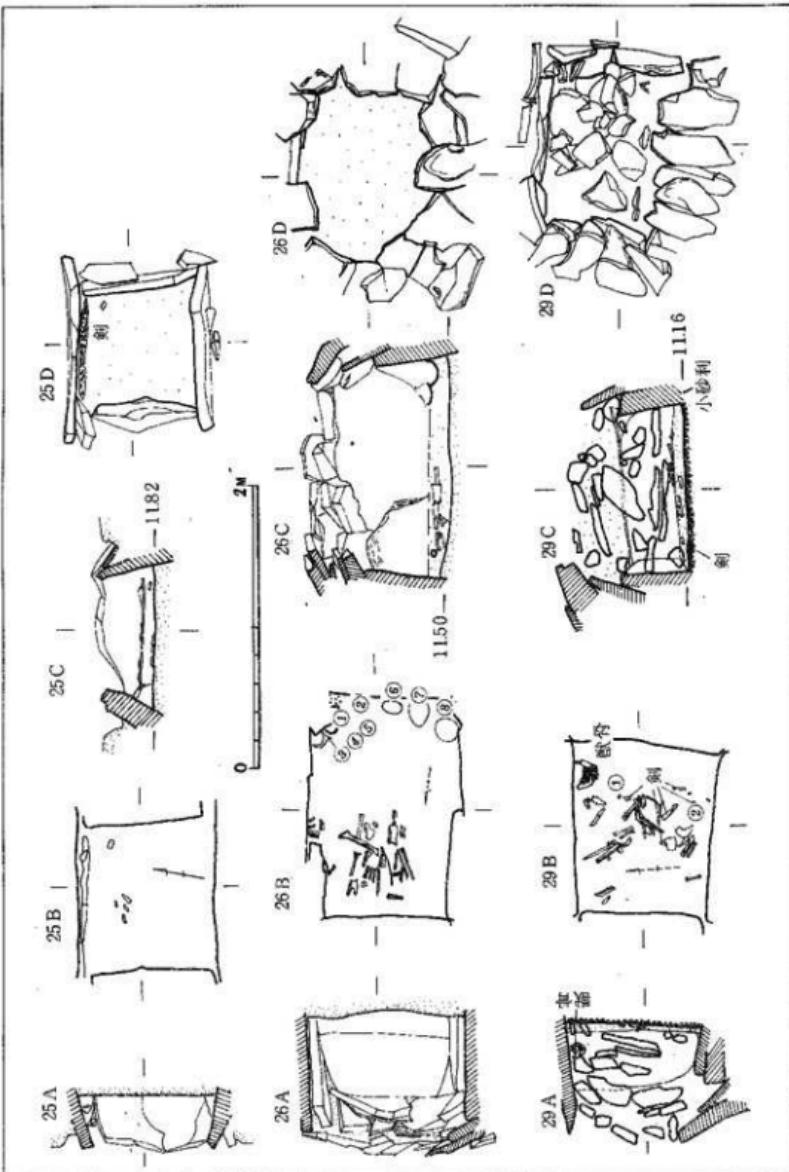
床面には砂粒が敷きつめられていた。

調査は昭和43年7月20～22日を山下・山田が行い、翌7月23日、限が図を修正した。(西田)

#### 第25号石室墓（第9図、図版19）

一番石を除き、殆ど消失していた。

不定形ではあるが、床面から40cm前後の高さで統一された4枚の板石で櫛壁を構成している。平



第9図 妻の墓塚群25・26・29号石室墓実測図

面形は正方形に近い。長軸長 102 cm, 短軸長 90 cm である。頭骨が出土しておらず、枕の位置は確定できない。しかし、北壁に沿って検出した鉄剣の向きからみて、東枕とみて可能のようである。このため主軸方位は N-83°-S となる。

櫛室は砂岩の石材を広々積みした一番石で構成される。天井石は持溝りの板石積であったと思われるが室内に落下（山崎註釈による）したり、消失したりして、二番石がなく、詳細は不明である。当時の三隅には羽桐はないが、北西隅に羽桐とバリケードを兼ねたような板石が組み込まれている。四隅の壁石はいずれも内傾している。床面には黒色（径 5 mm 前後）の川砂を敷いている。

検出し得た遺物は鉄剣一口である。前記したように北壁に沿っているが、床面から 6 cm 程浮き上っていた。このことは擾乱を意味せず、当石室墓にも追葬が行われたことを暗示しているものと考えたい。

床面には人骨があるか何体であるか断定できない（山崎註釈）。

調査は昭和 42 年 7 月 15 日、山崎・安東が行った。（西田）

## 第 26 号石室墓（第 9 図、図版 20）

均下や天端石に近い部分が消失している他は、略々完全に残り、構築状態がよくわかる。

石室の平面形は長方形に近い。ただ、南半が北半に比べ約 20 cm 程広くなっている。これは根石の組み方が原因である。北半の東西の壁石はそれぞれ高さも厚さも同じ二枚の板石で壁を構成しているのであるが内壁はある面ではバリケードの役を果たし、ある面では不定形な一番石を修形して整った櫛室を構築する役を担ったものとみなしえる。この種の構築法は当時の葬儀習俗では珍しい例ではないが、形のよくわかる木石室墓で記しておいた。長軸長 15.8 cm, 短軸長 11.0 cm を測る。頭骨は南壁寄りに集中しており、南枕である。したがって、主軸方位は N-167°-S である。

隔壁高は 60 ~ 70 cm である。4 個にバリケードを置き、構築法は丁寧である。板石は菱形を呈するものが多く、尖端を室内方向に向いている。重なり具合は純粋に待送式である。厚さは 5 cm 前後のものが最も多い。

床面は 3 枚が確認されている。第 1 の床面は黒褐色土で、その床面の南東隅に №1, №2 の頭骨が検出された。この黒褐色土の土層は 2 ~ 5 cm の厚さがあり、非常に堅い赤褐色粘土層に変り、この赤褐色粘土層の上面が第 2 の床面である。この床面上（黒褐色粘土層中）には南東隅に №3 ~ №5 の頭骨が、南壁中央附近に №6 の頭骨が検出された。北壁寄りには大腿骨他の長骨が集まっていた。第 3 の床は礫岩の砂粒を一面に敷きつめてあり、その上（赤褐色粘土層中）には西隅に №7, №8 の頭骨が検出された。この層中、北壁寄りには長骨に成人して骨が一本検出されている。本墳群には追葬と看做し得る多数の人骨が検出されているが、追葬と明瞭に指摘できる貴重な資料が、本項の 26 号

石室墓である。なお、岡面と日誌には以上のようにおおむね 8 体分の出土を記しているが、7 体出土とする記述もあり、詳細は未詳である。

遺物は検出していない。

調査は昭和 42 年 7 月、田中と佐藤が、昭和 43 年 7 月には月足・石井と北条が当り、北条の実測図には № 8 人骨など記してある。(西田)

#### 第 27 号 石室墓 (第 10 図、岡版 20)

石室の平面形は長方形を呈する。長軸長 128 cm、短軸長 89 cm を測る。頭骨が出土しておらず、枕の位置は確定できない。ただ、大臼歯が東南隅から 4 本検出され、東北隅辺から臼歯が 1 本検出されている。また、長骨が西半部に集積していた。これら長骨は一次的な位置を示すではないが、他例も大半がそうであり大臼歯の集中度と併せ考えると、枕は東壁寄りにあったと推測できる。そうした場合、長軸は主軸に一致し、N - 92° - S とみることができる。

構造は 4 枚の砂岩の板石で構成される。高さは 40 ~ 45 cm である。南西隅の目地は上部では密着しているが、床面に近くなるに従い隙間を生じている。他の三隅の目地は殆んど隙間がない。(実測図佐藤註記) 北東隅には 2 枚の板石によるバリ縫がある。南西隅にも註記によれば、この北東隅と同じようなバリ縫と思われる板石が検出されたが、人骨の一部に覆いかぶさっていたため撤去したとのことである。また北壁はかなり内傾しているが、この内傾を進化させないためか、一番石の根元から幅 20 cm、高さ 25 cm 程のバリ的赤土がつめてあった。(実測図註記)

天井は長軸 45 cm、短軸 20 cm、厚さ 5 cm 程の、5 角形や 6 角形の板石を持送りの積み方で構築している。ただ、二番石と三番石以降の石材の置き方は異っていたらしい。二番石は横口相当面の長辺側を石室内に向いているが、三番石以降は各の多角形の尖端を石室内に向いている。

床面は地山を掘り固めたもので、褐色を呈している。石室の中央は四周よりも 3 cm 程凹んでいる。裏込めの状態は記録していないが、天井石の構築の隙間部には赤土がつめこんでいる(実測図註記)、裏込めも同所の土が使用されていたものと推定する。

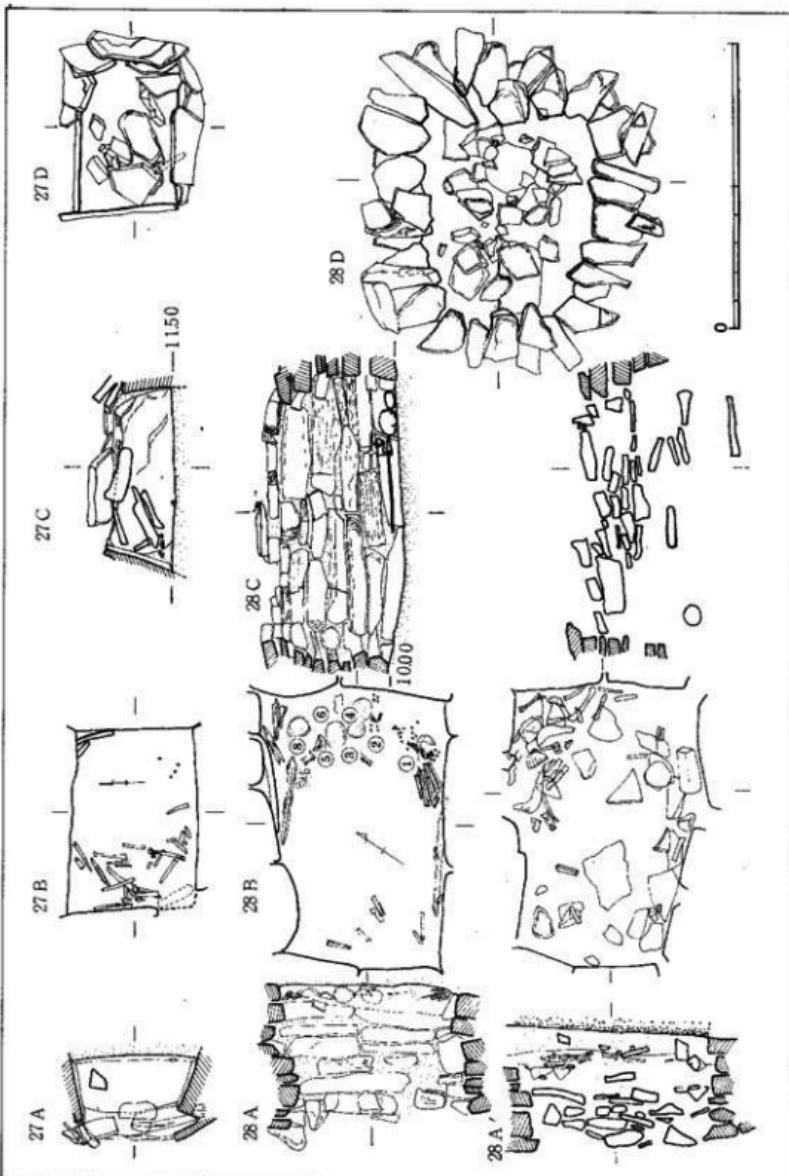
人骨は前記したとおりだが、大転骨・脛骨等は無秩序に集積しており、人為的に集められた可能性が強い。

調査は昭和 43 年 7 月 佐藤が行い、一部、誤が実測図を補正した。(西田)

#### 第 28 号 石室墓 (第 10 図、岡版 21)

天井石の中央は崩落しているが、殆どの石材が残存しているものと思われる。

石室の平面形は西壁から東壁に宋広がりを呈しつつも、おおむね長方形を成している。北壁は 190 cm、南壁 193 cm、東壁 134 cm、西壁 106 cm を測る。長軸長は 204 cm、短軸長 125 cm である。主軸方位は床面上の実測図(上記数値を計測した岡面)中に方位の記載がなく、正確な数値は出せな



第10図 妻の鼻塚墓群27・28号石室墓実測図

い。ただ、前年度調査中の実測図も方位が記入してあり（「逆になっている」との註記あり）、その図と石材の形とを照合しなおかつ、歯骨の位置を斟酌して試みに計測してみると、N - 69° - Sとなる。

木石室は当墳墓群の構築上、他の墳墓とは全く異なる形状を示す。他例の場合一番石（根石）は例外なく広口積であったが、本例に限り根石は横口積である。この横口積は床面から約1m弱の所さまで採用され、しかも布積的な外観を呈し、あたかも堅穴式石室状の構造を呈している。場所によって異なるが、ドーム状の天井石は7番石より9番石の間から始まっている。この天井石の構築は不定形石材を小面にしつつ片送り式に行うことによって形成されているようである。2年に亘った調査であり、上・下の図面の位置関係も不明確であるために、明確な記述ができないことが残念である。

床面は複数の疑がある。昭和43年度の調査で木面と表記してある面より10cm程上位に昭和42年度の調査では「砂利のベース」と註記しつつ明瞭な線が引いてある。43年調査の図面と照合すれば、明らかに北壁に沿って検出された鉄劍・鉄鋸の下面に一致する。（以下「鉄劍床面」とする）また、その面よりも更に20cm程上位に歯骨が大量に乗っている面があった。ただこの場合の面は「歯骨のベース（昭43・7・20本田口誌による）」ではあっても、人骨は見出せないとから、堆積當時の面と考える。勿論、これらの歯骨に混じって鉄片が検出されているが、この面の副葬品と考える必要はなく、擾乱によるものであろう。

鉄劍床面と同一レベルで検出されたのは「下頸No.3」と註記ある女性人骨（北東隅附近）と、南東隅に散在する歯の一組である。この鉄劍床面の下層も2枚の床面に分離できそうである。鉄劍床面より3~5cm下部にNo.3~No.5頭蓋が水平に並んでいる。43年図面の東壁図では床面から2~4cm浮いているが、北壁にはこれら頭骨がはっきりと床面に密着した状態を表現している。この面の出土遺物には南東部中央出土の鉄鋸がある。（以下「鉄鋸木面」とする。）この鉄鋸木面より2~4cm下位に真性の床面がある。この床面に密着しているのは昭43東壁図によればNo.8の女性頭蓋である。その他No.1の男性頭蓋もこのレベルであるらしい。同一レベルには南壁に沿って検出された鉄刀がある。（以下「鉄刀床面」とする。）この鉄刀床面は地中か砂利層かは判然としない。日誌には「歯骨のベースより砂利層のベースまで昨日まででは大体、20cm程度であった。そのつもりで今日も掘上した。—— 中略 —— 掘土は未だ終らず（昭43・7・21、本誌）。」と記されているのみで後続記録はなく、完了した実測図にも何の註記もない。

人骨は8体を検出している。南壁から北壁方向にNo.1~No.8とした。束ねたように長骨11本が重なりあって南壁の鉄刀柄近くから出土した。明らかに人为的に集積したものである。

遺物は豊富である。前記したように鉄製長刀が南壁に沿い切先を西壁に向けて出土した。北壁の鉄製長刀も切先を西壁に向けている。鉄製短剣も北東隅から出土した。同じように切先は西側である。

それに接し、その下粒に鉄器 2 件が出土し、先は車側である。短剣と長剣にはさまれた位置から鉄製の鉤が出土している。鉤先は東側である。劍は前記の他に、東ねた骨の北東 10 cm, № 1 頭蓋の辺 2 cm にある上腕骨に装着状態で検出された。銅鏡も出土しているが、正確な位置は不明である。ただ先述の本田日誌には「この地点でザルの中に入れた鏡の紐を免見」として、略図の中に位置を示してある。実測図中の記述には「鏡（砂利層より少し上）」とあり、矢印で位置を示してある。その位置は実測図の基準線の交点附近である。床面との関係は、それぞれ不明なものもあるが、前述の床面の分別の記述で推測を乞いたい。

調査は昭和 42 年 7 月 24 日、山下・板橋が行い、翌 43 年 7 月 19 日～7 月 25 日を山下・本田・乙益・野中・北条が行った。（西田）

#### 第 29 号石室墓（第 9 図、図版 22）

天井石の中央が陥没しているが、残りは良い方である。

石室の平面形は略々正方形に近い。長軸長 122 cm, 短軸長 100 cm である。頭骨の検出がなく枕の位置は確認できない。したがって 2 土軸方位は他例の大勢に従わざるを得ない。その場合、主軸は長軸に一致し、N - 91° - S となる。

隔壁は 4 枚の板石で四隅が構成されている。崩倒、バリ飼等の施設はない。天井石は二番石から始まる。二番石は不定多角形の横口相当面を室内に、三番石以高は小口相当面を室内に向か、持送り式に構築される。なお「石材は砂岩」を使用し、「床面には小石（川砂利の 1 ~ 3 cm）が敷きつめてあった」と、記録されている。

人骨は細片となって、床面上に散乱していたが、「頭骨は発見出来ず人骨の上約 30 cm ぐらいに動物の下ガク骨があり、だいたいその面に同一の物と思われる骨が石の間にあった。」この記述や実測図から獸骨は天井石の陥没前後に投込まれたと思われる。

遺物は鐵劍らしい鉄片が 4 点検出されている。実測図註記に從うれば「鐵劍二本分と思われる」。いずれも、人骨と混在しており、副葬品と看做される。ただ、後の攪乱ははなはだしいものがあったようである。

調査は昭和 42 年 7 月 23 日、田中（泰）と本渡中の松田・金子が行った。（西田）

#### 第 30 号石室墓（図版 22）

単なる石材の集積によるもので、墳墓ではなかった。おそらく、耕作に関わるものであろう。

#### 第 31 号石室墓（第 11 図、図版 23）

石室墓の大部分はブルドーザーにて破壊されてしまい台室の一部（南壁）を残すのみである。

想定される復原形は東西に細長い長方形の石室墓であろう。主軸方位は N - 70° - S である。南壁は 2 枚の板石によって構成され、壁高 55 cm である。南東隅に当る位置には崩倒とバリ飼を兼ねた細

長い板石が残存している。壁石は内傾している。

調査は昭和43年7月24日、緒方が行った。(西田)

### 第32号石室墓（第11図、図版23）

破壊・崩壊し、残存しているのは東壁と南壁のみである。

南壁は1枚石である。その東端、石室の南東隅の月地には副鏡がある。東壁は2枚の板石があるがその北側の小板石は梯壁というよりもむしろ、南側東壁石のバリ鏡と考えた方が適切であるような感がある。

なお、推定ではあるが、原形は長軸140cm弱、短軸90cm強の長方形である。推定主軸方位はN-55°-Sである。

調査は昭和43年7月24日、辰と井上晴男が行った。(西田)

### 第33号石室墓（第11図、図版24）

破壊が著しく、梯壁のみ残存しているにすぎない。

石室の平面形は細長い長方形を呈し、長軸100cm、短軸42cmを測る。主軸方位は人骨の出土がなく推定しか出来ないがN-82°-Sである。

梯壁は不定形な6枚の板石で構成されている。壁高25~30cmである。四隅はいずれも内傾気味であるが、原形そのものかどうかはわからない。

床面は直径3~10mmの頁岩砂粒を敷きつめている。朱の散布はない。

遺物は検出していない。

調査は昭和43年7月22日・23日に前田敦が行った。(西田)

### 第34号石室墓（第8図、図版24）

残存石材は殆どなく、石室の形状は推測にまかせざるを得ない。日誌には「34号、土塚墓（緒方・辰）床面けずられる。残り少なし。東側の側面は抜かれていて、そのスタンプ残る。---中略蓋石らしきものは不透す。」と言う石井・辰足の記録がある。また、緒方の日誌には「34号 PMよりも辰先生と実例。石門をもつ土塚であることを確認。一部石門。殊に東側の端石を抜いたあとが土塚断面にて認められた。調査完了。」とある。実測図註記には「他の墳墓と異なり土塚墓（石門）と思われる。石門の石は西側端石を抜かれたと思われる。断面図の上に掘り込みのあとが見える。」と記されている。これらに共通することは「石調の土塚墓であり、その石材の残りは少ない。」ということになる。

今ここに第34号石室墓を土塚として、その規模を数値化すると、長軸130cm、短軸60cmを測ることができる。頭骨が出土していないため枕の位置は確定できないが、他例に照して東枕とすれば主軸は長軸に一致し、N-84°-Sを測る。

石頭の形状は不明。蓋石他の形状も不明。

床面には一部白粘土を混入しているところがある。遺物は土師器片が1点検出されているが、「細片にして器形その他不明」である。

調査は昭和43年7月20日～7月21日、緒方と腰が行った。

なお、調査団全体の意見は上述の様に土塙墓であるとの見解に統一されている。しかし、除外者ではあるが筆者の見解は若干異なる。

実測図には掘り方の中央に「墓室」として、掘り方床面から8cm弱掘り下げた前記規模の墓地が記されている。しかし、断面図で見るとおり、その墓室の最下間に50×40cmの石材が水平に検出されている。このことは、石塊の石が倒れたのを意味するものではなく、高所から落ちたか、当初より埋められていた石かのいずれかを示す。また、他の小板石は床面から離れた位置に水平に堆積しているところを見ると、高所より落したことを意味している。土塙墓であれば高所から落する石材はないはずであるし、蓋石があったのであれば、それは土塙墓であるというよりも箱式石棺に近くなる。ところが、箱式石棺としては高所より落したであろう石材はあまりにも小さい。むしろ、本墳墓群の他例と同様の用途に使われたような石材である。以上のこととは、本墳墓を積極的に土塙墓と推すよりもむしろ、否定材料にしかならない。ただ、南北の壁石の抜取痕がないことをどう説明するかは難問である。しかし、筆者は次のように実測図を読んでみたい。つまり、東壁の抜取痕に実測図註記として、調査完了後4日目の7月25日に腰は「復原の途中に新たに(石片)を検出——抜き取った板石の下端部がわずかに残っていた。」と記している。このことは、調査が未完了であったことを示している。また西壁の立石は実測図で見る限り、地山の中に打込んで立てた石としかみられない。しかし、どの記録を読み返してもこの西壁が打込んで立てられたとの記述も見出せない。このように打込んで立石するという珍事をみのがすことは先ずあり得ない。それならば、この立石は他の壁石同様構を掘って、その中に埋め込んだものであろう。とするならば、その構が記録していないということは地山と溝中の充填土が酷似していたと考えざるを得ない。東壁の記録はそれを証するであろう。これらのこととは、北壁・南壁にも抜取痕があったのに、土色が酷似していたため見逃したのではないかという疑問を生じさせる。それに何よりも本墳墓群では本例以外は地下式板石積石室とみなされ、本例ほど徹底的に破壊されているものは少ない。この少ない例が更に異例とも言うべき土塙墓であったと言ふには奇跡を感じる以外にない。筆者はこの確率的に非常に小さい値をとるであろう「土塙墓」の主張には賛意を表し兼ねる。本例も他例と同様、地下式板石積石室であったと考えたい。最終的判断は読者の裁量におまかせしたい。(西田)

### 第35号石室墓（第8図、図版25）

調査当初、土塙墓と考えられていた程、徹底的に破壊されていた。

石室の平面形は長方形を呈し、長軸長 80 cm 短軸長 62 cm である。頭骨の検出はなく、枕の位置は確定できない。大勢に従い、東枕と推定すれば、主軸は長軸に一致し、N - 85° - S となる。

根石は北壁と南壁に残存している。床面からの高さは約 20 cm である。東壁と西壁には石材の残存がみられず、抜取痕とみられる溝があった。東壁にあたるその溝から中世陶器が出土しており、抜取は中世とされる。なお、抜取痕は床面から約 10 cm の深さがあり、根石の根の深さも各自同軸をとるものと考えられる。石畳墓の可能性もあるが、破壊の度合と、石畳墓の出現頻度とを考え併せれば、他例と同様、地下式板石積石室と考えた方が理にあう。

人骨・遺物は検出していない。

調査は、昭和 43 年 7 月 23 日、精方が行った。(西田)

### 第 36 号石室墓 (第 11 図、図版 25・26)

天井石は埋没しているが、床面から 20 cm 以上にその石材が集中しており、陥没以前にかなりの堆積があったことがうかがわれる。本墳墓からも多数の土器片が検出されているが、すべて、この天井石が埋没している土層中から検出されているもので、本来的な副葬品ではない。其数も多数がこの土層中から検出されたものである。

石室の平面形は長方形を呈しているが、東壁側が広がり気味である。更に、南西隅は南壁一番右の不足分を補うようにその後方に別の石材を壁石としている。そのため、約 10 cm 外側に突出している。東壁 107 cm、北壁 155 cm、西壁 95 cm、南壁 167 cm を測る。長軸長 163 cm、短軸長 98 cm である。頭骨は東壁側に集積しており、東枕と言える。したがって、主軸は長軸に一致し、N - 87° - S となる。

構築は床面からの高さ 30 ~ 40 cm の板石を広口積にして構成される。南壁以外はいずれも一枚石である。それ以高の天井石はおむね菱形・三角形を呈し、それぞれの短軸を部壁に平行にして棟を強く押しつけ、石の下面(広口)をむきださせている。このことは他例と同様だが、それらが法透積的な持込みの形状を示しているのに対し、本例は四~五番石まで直立気味に構築されている。したがって、一番石は 4 壁とも内傾をしているがこの高さまでが傾斜と考えることもできよう。また他例の大半は石の剣先を上にして、波状形に石を積み、それ以後、順次、それによって生じた谷を埋めこんでいくような形で石を積んでいる。所謂谷落積的な構築法である。しかし、本例は、いくつその傾向を示しつつも、第 28 号石室墓の構築法によく、各々の石材の両側とは平行に近く並べて壁面構成を行っている。つまり、石積の構築法からみれば第 36 号墓は第 28 号墓と他の大半の石積との中间形をとっていることになる。

なお、二番石は他例と同様、長軸を部壁に平行に(廣口相当面を内面に向けて)構築されているような傾向が、前面に垣間見える。バリ頭は北西隅と南西隅に施してある。

掘り方は東壁内面から40cm、北壁内面から65cm、東壁内面から55cm離れた位置に切り込み面を有する長軸280cm、短軸200cmの長方形を呈している。掘り方の最下面の形状は記録されていない。

人骨は他の本墳墓群中の例と同様、埋葬状態をそのまま留めているものはなかった。ただ、北西隅に複数の入体下肢骨が集積状態で検出され、南西側に「石（陥落した天井石 筆者註）」がなくなつてから15cm位して西北側（ママ、南西側の誤りと考える 筆者註）に大龍骨を発見し、続いて四肢骨が検出されていることから、北壁側に後時の人の埋葬したものと思われる。頭骨は東壁寄りに集中していた。

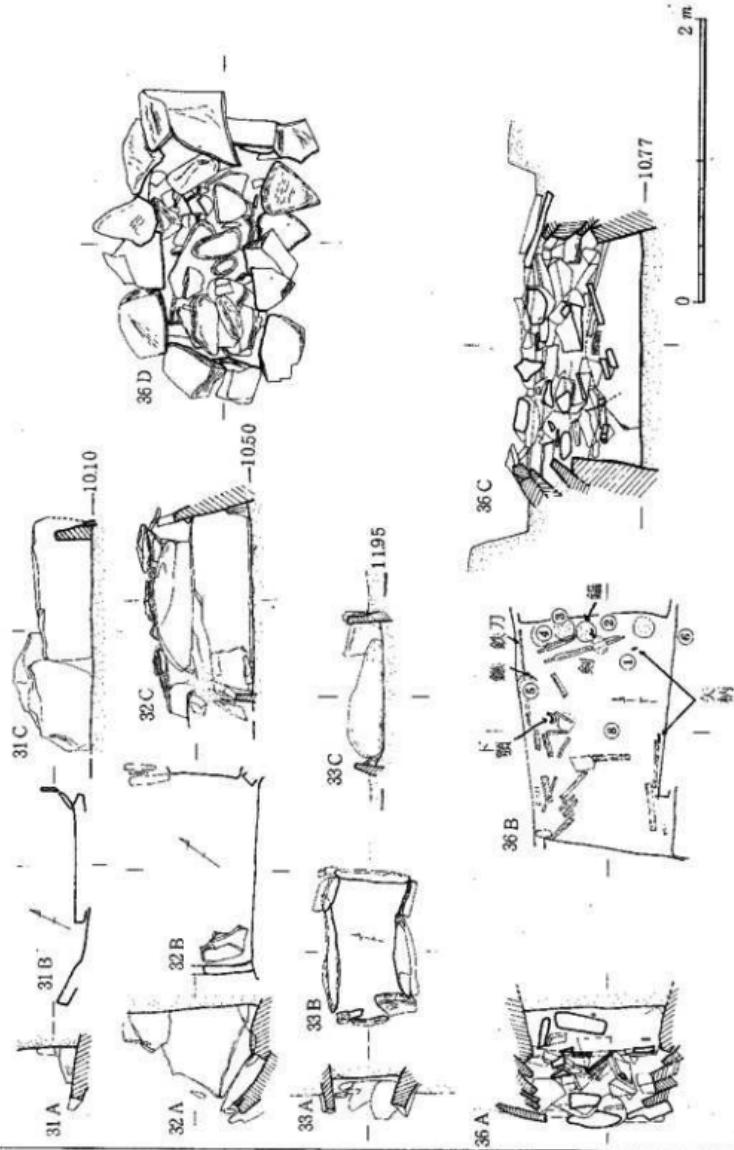
この東壁寄に頭骨が集中していることは本墳墓群的一大特徴である。今、試みに本墳墓群の主軸方位を図化してみると主軸方位はN-(75°~95°)-Sに最も集中しており、第36号墓はほぼその中心になっている。副葬品が検出されている墳墓も、この角度の範囲内に主軸を有するものが大半である。因みに、複数副葬品の検出をみる墳墓はN-(75°~100°)-Sに納まってしまう。このことは、副葬品を多く埋葬し得る家族（または、墳墓共有集団）は方位計測も正確であったと言え換えることはできないだろうか。つまり、第36号石室墓共有集団は妻岸墳墓群の代表的墳墓を構築し集落の代表の一員に算せられる集団の一であったと言うことである。

副葬品と思われる遺物には長剣1、短剣2、大刀1、鐵1、鐵1がある。この内、大刀1口、短剣1口、鐵1具が埋葬時原位置を保っていたもののように、北壁と床面に殆んど密着した状態で検出されている。大刀と鐵は先端を枕側（東側）に向けていた。短剣には記録がない。

また、本墳では鐵と剣が共に検出されているが、両者の一方でも出土している墳墓13例中、両者共に出土している墳墓は僅かに4例である。しかも、鐵は複数出土が通例であるのにその4例中3例が1具しか鐵を出土していないのである。このことは、妻岸墳墓群においては鐵と剣とが各々に対して互いに排他的副葬品であった（近かった）ことを意味しはしないだろうか。ついでに付け加えるならば、剣は各墳墓1口が通例である。他の遺跡を検索してみても、剣は墳墓に1口という何等かの規制があったようと思う。ただ、長剣・短剣が共に副葬される場合は明らかに長剣が1口で、短剣が複数の場合がある。いずれにしろ、主要な剣は墳墓に1口であって、各人に1口ではなかったようである。鐵は東壁中央近くに出土している。略々床面に接していた。なお、鐵は山崎純男が採集したという1例が別にある。既に三島格が報告しているが、出土墳墓は不明という。この例を加えると、妻岸墳墓群での鐵の出土は3点ということになる。

本墳調査は昭和43年7月22日から7月25日まで乙基・山田が行った。（西田）

⑩ 三島格：「鍼及びタカラガイ副葬の藏骨器について」 薩摩大口市・甲佐郡における藏骨器  
「人類学研究」7巻1,2合併号1960及び「海岸をめぐる考古学」三島格 1977 学生  
社に所収



第11図 妻の墓陪群31・32・33・36号石室墓実測図

## IV 遺物

### 1 鉄器・鉄製品

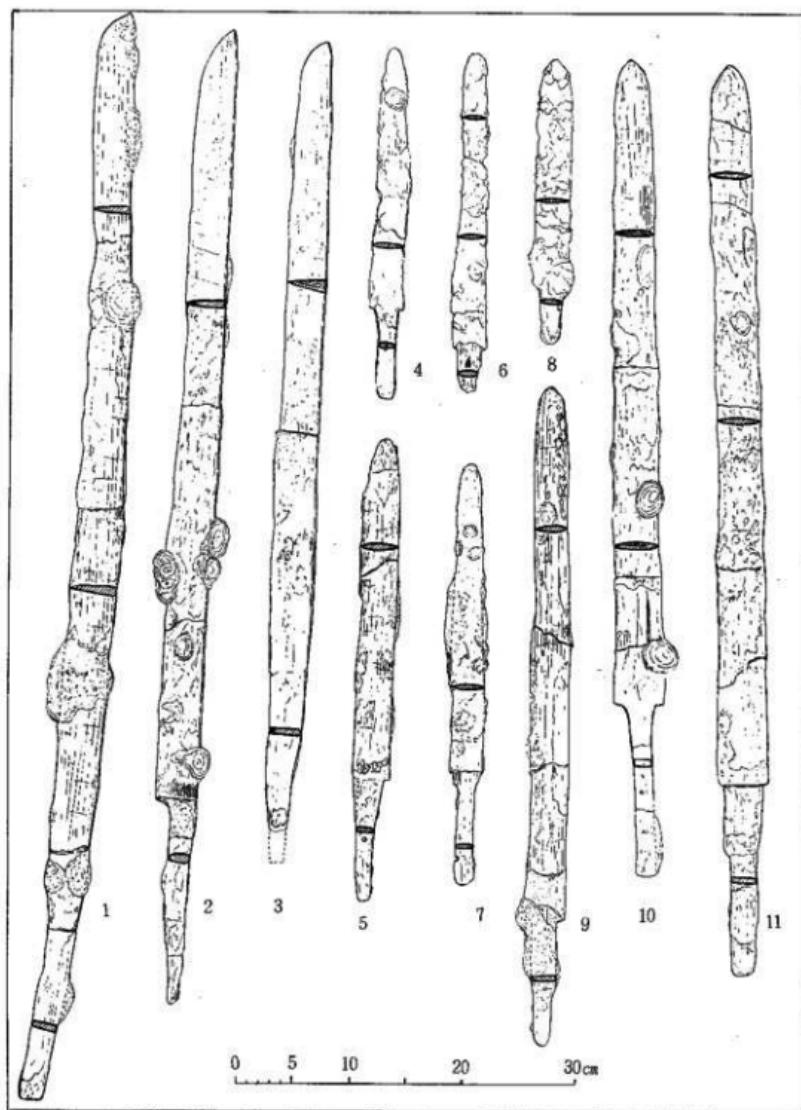
本年度市堀ノ内では墓数35基にのぼる地下式板石積石室墓の遺構を発掘したが、遺跡規模の大きさ割合に種類少なく、質的にも単調であった。それは一にこの種墳墓群の有する地方色であろう。各墳墓と副葬品の件出関係は別表第1に示した通りである。全体を通じて最も多いのは刀・剣・鎌・矛などの攻撃用武器であった。そして鏡や玉その他の装身具とともに、石室内に土器を副葬しなかった点にもこの種墓制の共通した特色がみとめられる。土器は原則として小封土上に供獻され、それがしばしば破片となって石室内に転落している。

**刀** 刀には大刀と小刀の別があるが、本遺跡では大刀だけしか出土しなかった。第12図1(図版30)に示した大刀は全長97cm、身幅4.1cm、厚8mmを有する豪壮なもので第13号墓の側壁にそつて置かれている。刃は全体に1cm弱内彎し、刃闊から茎にかけて段落状に幅せまくつくる。刀身に水輪の痕跡が残るが外装は明らかでない。このような大刀は一般に古式占領に伴なうことが知られ、おそらくこのような大刀の源流は中国の漢時代における内鬱刀にもとめられよう。

2(図版31)は全長86cm、身幅3.4cm、厚8mmを有し第28号墓から出土した。刀身に刃口がなく鋒は鋭どく尖り、あたかも中世の大切先に似る。刃闊から茎にかけて段落状に幅せまくつくる点では1に似る。3(図版31)は茎尻を欠く現存長70cm、身幅3.1cm、厚9mmを有する。鋒が鋭どく大切先状を呈し、無反りの点では2に似るが、闊と茎の境があいまいである。これらの大刀はたとえ姿のちがいこそあれ、たがいに共通した特色がみとめられ、おそらく時間的に隔差のない墳の所産であろう。

**剣** 剣には短剣と長剣の別がある。その区別は特別な基準にもとづくものではなく、あくまでも概念的なものにすぎない。したがってここでは、一応全長50cm以上を長剣とよび、それ以下を短剣とよぶことにした。4(14号墓・図版32)5(36号墓・図版32)6(28号墓・図版33)7(13号墓・図版33)8(36号墓・図版32)はいずれも全長25~40cm前後の短剣に属するものであるが、一般に類品多く特記すべき点もない。すなわち鋒が丸味をおび、闊がなく細身で、闊がほぼ直角に切れ込む角彫形を呈する。4・5・7は身の長さに比べて茎を長くつくり、多くのばあい目釘穴一孔を設けるが6・8は茎が短かい。このような短剣の中にはしばしば輪身を含むことがあるが、柄の残るものがないので概に判定できない。とくに6は木柄の一部を存するが外装は明らかでない。

9は全長54cm、身幅3cm、厚5mmを有する長剣で36号墓より出土した。(図版31)。全長の割合に身幅せまく锐利な感があり、身には輪の木質が残る。10は身幅の広い豪壮な長剣で全長72cm、身幅3.5cm、厚9mmを有する(図版31)。36号墓では同じ石室内からの長剣と大刀1口(3)短剣2口(5・8)および丸根逆刺付鉄鎌1本(第13図15)鎌1(同図16)を出土し、これらの時間的併行関係を知るうえに有力な手がかりを示している。



第12图 刀·劍尖剖面

- 1 (13号填) 2 (28号填) 3 (36号填) 4 (14号填)
- 5 (36号填) 6 (28号填) 7 (13号填) 8 (36号填)
- 9 (同 填) 10 (28号填) 11 (25号填)

11は本遺跡群出土品中最大の長剣で全長81cm、身幅3.6cm、厚6mmを有し、25号墓より単独に出土した(図版30)。形式上10に似るが長大なだけでの特色もない。一体剣には短・長の如何をとりようそぎまちわざる刃部から茎に移る部分が撫角形を呈した両削開と、直角に切れ込む角開の別がある。両者のちがいは鞘の口が呑口式になるものと、合口式になるものちがいもあるが、一般に両削開が古く角開は新しい傾向を有する。その点妻鼻墳墓群出土の長剣・短剣はいずれも角開に属し、両削開は1点も出土しなかった。このことは石室内に転落していた土師器や、後れてくる鉄矛の年代的位置づけともほぼ一致するものである。

**鉄矛** 攻撃用武器のうち鉄矛は第28号墓より1点出土した。(第13図・図版36)全長24.6cm、身幅1.6cm、厚1.2cm、袋口直径3.3cmを有し、鋒が銳利にとがる。身の中央に明瞭な縞があり断面は菱形を呈する。袋部の下端は表裏を三角形に切り込む。このような切り込みは単なる装飾ではなく、柄を装着したさいに左右に回転するのを防ぐとともに、両側から切り込みにむかってたたき曲げることにより、柄木を締めつける役割をもたらしたことがうかがわれる。

このような矛は全国的に類例多く、遠くは群馬県佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳<sup>(1)</sup>や同高崎市劍崎町長西古墳<sup>(2)</sup>および広島県加茂郡西条町三ツ城古墳など、いずれも最盛期の前方後円墳に伴なった例があり近隣地域では鹿児島県出水市溝下の地下式板石積石室墓群発掘時に、近くから採取されている。<sup>(3)</sup>とくに同県山川町成川遺跡では、弥生文化以来踏襲された立石土塁墓に伴なって出土した。<sup>(4)</sup>それらの時期は5世紀後半から6世紀初期に比定され、同石室(第28号墳)<sup>(5)</sup>内に転落していた土師器の和泉式土器系高环の年代的位置づけとほぼ一致する。

**鉄鎌** 妻鼻墳墓群から出土した鉄鎌は、合計14点以上にのぼる。これを大別すると、逆刺のないものとあるものの2種類からなり、さらに細別すると4種類になる。第1類は第13図(2~11)にわたるもので、全長の割合に鎌の身幅が広く三角形を呈するが、身の両側には刃がない(図版34・35)。茎は扁平な平根につくり、全体の形からみて平根定角式と平根矢式の中間形式に属する。このような鉄鎌は九州南部の古墳に出土例多く、とくに鹿児島県人口盆地や、出水市溝下、熊本県人吉盆地における地下式板石積石室の副葬品に顕著な発達がみられる。それらの用いられた時期は長期にわたり少なくともこの種の鎌制が成立した頃から、消滅段階に近い頃まで継続したものようである。

第2類(12・13)は身が長三角形を呈し、深く切れ込んだ逆刺をつけ、茎は断面が方形に近い。あえて名づけるなら角根長三角形逆刺付とでもよぶにふさわしい(図版35)。第3類逆刺は鋒が鈍く柳葉形を呈し、逆刺の切れ込みが浅く、身の下際に剣の角開に似た切れ込みをつくり、鎌被の役目をなす(図版36)。このような鉄鎌は類品こそ少ないが、あえて奇とするものではない。

図表 第1 刀・剣

図版番号	出土石室	品目	全長	身幅	厚	茎幅	備考
1	13号	大刀	97cm	4.1cm	8mm	2.1cm	内反り1cm
2	28号	"	86cm	3.4cm	8mm	1.8cm	
3	36号	"	現存70cm	3.1cm	9mm	1.5cm	北壁にそって出土
4	14号	短剣	31cm	3cm	5mm	1.6cm	
5	36号	"	41.2cm	3.2cm	6mm	1.6cm	
6	28号	"	現存30cm	2.6cm	4mm	1.8cm	
7	13号	"	37.8cm	2.8cm	5mm	1.6cm	
8	36号	"	25cm	3cm	5mm	2cm	北壁の上から出土
9	36号	長剣	54cm	3cm	9mm	1.9cm	
10	28号	"	72cm	3.5cm	9mm	1.4cm	目釘2孔
11	25号	"	81cm	3.6cm	6mm	2.2cm	

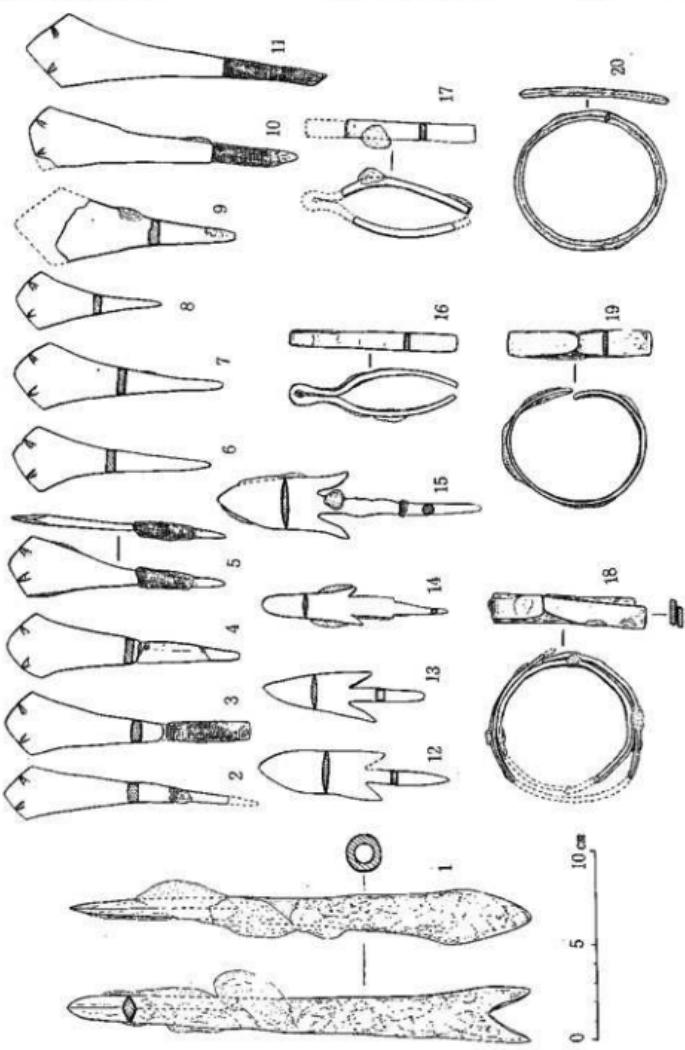
第4類（15）は9幅の広い長三角形を呈し、逆刺が深く反り気味につけられている。丸根で範被があり、鑑としては最も正常な形を呈する。

これらの銅鏡の伴出関係についてのべると、第2類の12・13と第3類の14は、第1類の6・7・8とともに第11号墓石室内から出土しており、おのおの使用された年代に隔差がなかったことがわかる。

**その他の鉄器** 本遺跡では第36号墓と第11号墓から異様な鉄器が各1点ずつ出土している。扁平な角棒を折り曲げビンセット形にこしらえ、いずれも全長約9cmを行し、脚部は幅約3cm内側する。

（第13図16・17、図版37）

このような鉄器はしばしば5世紀後半以後の古墳に副葬される鏡そのもので、毛抜に用ひられた。鏡は「和名抄」に鏡子（波奈介波岐）と記され、金製、銀製、銅製の別があった。神奈慶州金冠塚出土の腰鏡には金製の鏡があり、「枕草子・四」にも「ものよくぬくる志ろがねのけぬき」の名がみえる。また「島格・寺部見国氏によると鹿児島県薩摩郡本城荒瀬出土の火葬骨器には、銅製鏡子1とタカラガイ1個を副葬していた。このように鏡子は容飾具として必需品であるばかりでなく、古墳内部や藏骨器の内部にまで副葬されていることは、ただ偶然に死者が身に着けていただけはいいきれない。おそらく鏡や鏡や玉類などと同様に装身具に準ずるものとして呪術的意義があったのではないかろうか。尚、鏡子は一般に古墳文化の中心地域よりも、むしろ東国や南九州の古墳や墳墓に数多く発見されることは注目される。



第13図 矛・鎌・錐・鉄劍・銅劍実測図

- 1 (28号墳) 2 (1号墳) 3 (8号墳) 4 (同) 5 (同) 6 (11号墳) 7 (同)  
 8 (同) 9 (13号墳) 10 (28号墳) 11 (同) 12 (11号墳) 13 (同) 14 (同)  
 15 (36号墳) 16 (同) 17 (11号墳) 18 (22号墳) 19 (14号墳) 20 (1号墳)

## 2 装身具

くしろ

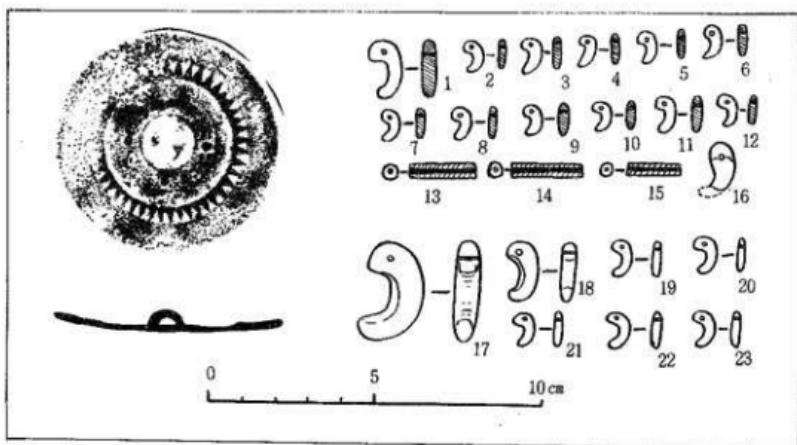
**鉗** 妻鼻墳墓群出土遺物の中で異色ある発見は、鉄製鉗3点と残欠1片、青銅製鉗1点であった。中でも第13図18は2個の鉄鉗が锈着したもので、昭和35年ごろ第22号墓から出土したという。外側の鉗は直径8.1cm・内側の鉗は直径7.5cm・幅はいずれも1.2cm・厚2.5mmを有する。両者とも内外面に部分的な平織の布が锈着している。おそらくそれは意識的に布巻にしたりであろう。19の鉄鉗も同形式で長径7.4cm・短径6.1cm・幅1.4cm・厚2mmを有し第14号墓から短鉗1(第12図4)とともに出土した。この鉄鉗にも平織の布が锈着しており、それらの锈着痕は偶然的なものではない。おそらく鉄の輪を布ぐるみにして用いたのであろう。同じ鉄鉗の破片が第28号墓からも出土しているが、現存長4cm・厚3mmを有し、これだけでは全体の形を知ることができない。このような形式の鉗は材質こそ異なるが、銅製品が静岡市登呂の弥生後期遺跡から2個出土しており<sup>(7)</sup>、また長野県南佐久郡田口村大奈良離山において「赤色素焼土器」に伴った4個の銅鉗も同形式である。<sup>(8)</sup>その他佐賀県神埼郡三津永田の弥生中期遺跡から出土した5個の銅鉗も<sup>(9)</sup>類品の一つにかぞえられる。したがってこのような鉄鉗の相形は弥生文化時代にもとめられる可能性が強い。とくに福岡県宗像郡大島村沖ノ島第16号祭祀遺跡から出土した鉄鉗は、まったく同形式に留し内外面に布の锈着がみとめられる。ちなみに沖ノ島第16号遺跡は、他の伴出遺物との関係から5世紀中葉の成立とみられている。

第13図20に示した青銅製鉗は本遺跡中唯一の例で、第1号墓より平根定角式鉗様2とともに出土した(図版38)。外径8cm、軸4mm、厚3.5mmを有し、輪の断面が扁平な菱形を呈する。輪の内側が磨滅し長い使用痕を物語っている。このような銅鉗の類品は各地の古墳出土品に散見するところで、「日本考古学辞典」386頁にみえる茨城県人神塚古墳出土や、奈良県磯城郡大三輪町著中出土の銅鉗(国学院大学考古学資料室蔵)などはその一例で、おそらく5世紀代の所産であろう。

**鏡** 妻鼻墳墓群から出土した鏡はわずか2面分であった。うち1面は完形品で第3号墓の床にためぐらした凹鏡の上面におかれていた。直径6.7cm・厚1.4mm・鏡の直徑1.2cm・紐の高さ1.2cm・反り1.8mmを有し、鏡上りのわるい仿製四乳鏡である。外区はわずかに内縁した平縁を呈し、その内側に約50個からなる鏡歯文帯をめぐらし、鏡のまわりに四乳を配す。紐は紐ずれがいちじるしく、文様の一部は鋸くずれている(図版38)。仿製鏡の中では一般に頗る多いものである。他の一面は紐だけの残欠品で、第28号墓の揚げ土から検出された。紐径1.4cm、紐高1cm、内区の厚さ1mmを有する(図版38)。金質よく復原すると直径約10cm余の仿製鏡が想定される。他の部分については極力さがしたが見当らなかった。

図表 第2 矛・鎌・鋸・鉄劍・銅劍

図版番号	出土石室	品目	全長	身幅	厚	茎(幅)	備考
1	28号	矛	24.6cm	1.6cm	1.2cm	茎口径 3.3cm	
2	1号	鎌	現存 11.7cm	2.9cm	3.5mm	5mm	平根
3	8号	#	現存13cm	3.1cm	4mm	1.1cm	矢柄径1.1cm平根
4	8号	#	12.4cm	3.2cm	4mm	8mm	平根
5	8号	#	11.5cm	6cm	6mm	7mm	矢柄径1.1cm平根
6	11号	#	10.5cm	3.4cm	4mm	1.2cm	平根
7	11号	#	10.8cm	3.7cm	4mm	1.4cm	#
8	11号	#	7.7cm	2.9cm	3mm	9mm	#
9	13号	#	現存 約10cm	復原 4cm	不明	5mm	#
10	28号	#	14cm	3.6cm	4mm	1.1cm	矢柄径1cm平根
11	28号	#	13.6cm	2.9cm	4mm	1.2cm	平根
12	11号	#	10.2cm	2.4cm	4mm	幅8mm	#
13	11号	#	8.5cm	2.7cm	4mm	8mm	角根
14	11号	#	10cm	2cm	3.5mm	8mm	丸根
15	36号	#	14cm	3.1cm	4mm	7mm	丸根籠被あり
16	36号		8.9cm	最大幅24cm	幅9mm 厚2mm	7mm	
17	11号	#	現存6.9cm 復原9.1cm	復原幅3.1cm	幅1cm 厚3mm		
18	22号	鉄劍 2個	大径8.1cm 小径7.5cm	幅1.2cm	厚2.5mm		
19	14号	鉄劍	長径7.4cm 包径6.1cm	幅1.4cm	2mm		
20	1号	銅劍	径8cm	幅4mm	3.5mm		



第14図 翡(第3号墳出土)玉類、上の三列(第3号墳出土)  
下の二列(第17号墳出土)

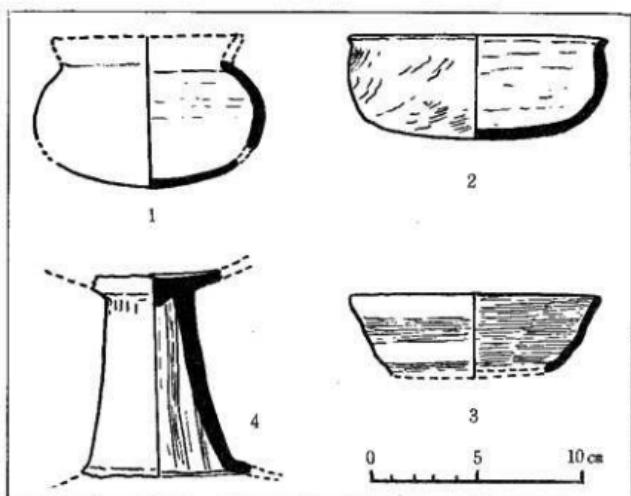
**玉類** 玉類を副葬していた石室は第3号墓・第11号墓・第17号墓の三基だけであった。うち第3号墓では滑石製の全長1cm~9mmの小形勾玉12個をはじめ、滑石製小玉8個・ガラス勾玉1個・水色ガラス小玉6個・コバルト色ガラス小玉1個・透玉製管玉1個・透灰岩製管玉2個を出土した(第14図)。これらの玉類は床にめぐらした周壁の上面、および床面に散乱した状態で発見された。第11号墓では床面から滑石製小玉3個を検出したにすぎない。第17号墓では滑石製の全長2.4cmを有する勾玉1個と、同石質の全長約1cmの小玉勾玉5個・半透明のガラス勾玉1個・滑石製小玉3~4個・水色ガラス小玉3個・透明ガラス小玉1個・滑石製の丹塗小玉9個がいずれも床面に散乱状態で発見された。

これらの玉類は古墳時代の所産として何らの特色もないが、注目すべきは滑石製の勾玉や小玉を日常の装身具として佩用していた点にある。小形の勾玉をどは頭部が磨滅し扁平になっており、孔も磨滅拡大している。また滑石製小玉の中には、故意に赤色顔料をもって染色したものがある。本来滑石製玉類は硬玉や碧玉その他の実用に供した玉類の模造品として、祭祀や副葬に供せられるのが通例であるが、斐農ではいかに装身具にとぼしいとはいえ、これらを実用に供したことが明らかである。おそらく本遺跡群の有する地方色であろう。

### 3 土 器

各石室内には武器や装身具を伴なうことはあっても、上器を廟葬した形跡は認められなかつた。しかし第7号墓に土師器壺片、第11号墓に土師器細片、第12号墓に土師器壺片（2個分）と青磁壇片（高麗青磁か？）第18号墓に同壺片・第28号墓に土師器高杯片・第36号墓に同杯片（2個分）がそれぞれ検出された。これらはいずれも石室外から転落混入したもので、殆んど形をなさず床面から浮いて発見された。寺師見国氏も指摘しておられるように鹿児島県大口地方の地下式板石横石室では、ひくい剝土上に上器を供献したものがあるという。おそらく本遺跡群でも同様なことが考えられる。

第15図（図版39）に示した土器実測図はすべて破片から復原したものである。1は復原口径約9cm・同高さ約7cmの小形丸底壺形土器で、外面を研磨している。（第11号墓出土）形式上和泉式系の壺に属するであろう。2の杯は口径約12cm、高さ約4.8cmが復原され、口縁部がわずかに外反し丸底を呈する。



第15図 土器、1（第11号墳）2.3（第36号墳）4（第28号墳）

3の杯は口縁が外にひらき平底をなすらしく、復原口径約12cm・同高さ約3.5cm・内外面に軽く横走する刷毛目があり、2とともに第36号墓から出土した。4は高杯の脚部破片で現存高さ9.5cmを有する。脚部の裾が屈曲して外反し、和泉式の特色を有する。おそらく1の壺とともに和泉式後半段階の所産であろう。

#### 4 その他の遺物

その他第36号墓からハマグリ・イボウミニナ・ウラウズガヒ・ウバガヒが検出されたが、いずれも床面から浮上しており、後世の混入であろう。  
(乙益重隆)

##### 註

- 1 後藤守一『上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳』帝室博物館(昭和8年)
- 2 同書
- 3 『三ツ城古墳』広島県文化財調査報告第1編(昭和29年)
- 4 寺師見国『鹿児島県下地下式板石積石室』鹿児島県文化財調査報告第5編(昭和33年)
- 5 鹿児島県・文化庁共催調査。報告書近刊。
- 6 寺師見国・三島格『縄及びタカラガイ副葬の藏骨器について』人類学研究7巻1・2号(昭35年)
- 7 『豊昌——』木編——『日本考古学協会(昭和29年)
- 8 八幡一郎『南佐久郡の考古学的調査』(昭和3年)
- 9 金関丈夫・坪井清足・金関慈『佐賀県三津永田遺跡』日本農耕文化の生成(昭和36年)
- 10 『続沖ノ島』宗像神社復興期成会(昭和36年)
- 11 註4同書

## V 人 骨

熊本県内西部に位置する天草諸島には、縄文文化以来の各種文化の多数の遺跡があり、地下式板石積石室墓に属する本墳墓群は、本棲港の南約1キロ、天草下島鬼川に沿って海に突き出た岬の尖端部にある。

昭和43年7月、筆者は発掘調査の一員として本遺跡発掘に従事した。また同じく発掘調査にたずさわった乙益重隆氏（現国学院大学教授）によって、すでに本遺跡の墓制の様式や、系統と年代についての研究がなされており、本石室群のつくられた年代は、副葬品や石室構造などから、古墳時代5世紀末から6世紀前半に亘るものと推定されている。<sup>1～3)</sup>

従来、熊本県内の古墳時代の石棺ならびにその出土人骨については多数の研究がなされているが、天草地方の古墳時代の遺跡からの出土人骨についての報告はなされていない。本石室群から得られた101体以上の多くの人骨は、いずれも保存不良ではあったが、埋葬状態の調査、性別および年齢の判定、さらに形態的特徴の観察および可能な限り計測を行なうことができた。これをもって、天草地方の古墳時代人の特徴やその生活状態の一端を知り得る貴重なデータが得られた。今回は石室ごとに一括して末尾に表示して略述し、あわせて本遺跡と異なる様式に属する遺跡からの出土人骨とも次のような簡単な比較を行なった結果を記すことにどめたい。

なお、出土人骨ならびに齒の性別・年齢の推定および観察と計測にあたっては Martin and Saller (1957)<sup>15)</sup> および藤田 (1960)<sup>16)</sup>などを参照した。

1. いずれも合葬で、最高12体を埋葬した石室があった。また人骨の乱れた状態から、埋葬後歿部組織が腐蝕したのち、移動されたものと推定できるものがあった。
2. 石室の底面は方形で、身長より甚だしく短かいものが多い。從って仰臥伸展葬のほか、下肢骨があたかも井桁状に組んだものや、上下肢骨を明らかに束ねたものがあった。
3. 頭部の位置は、東向きのものが多いが、このほか、南向きのものは12および26号石室内のすべての個体、西枕は23号石棺内などで認められた。なお29号石棺の場合などは不明である。また、頭蓋骨が整然と一列に石棺の側壁にそって並べてある石室がかなりあった。
4. 小児人骨が合葬されており、家族墓の特徴を示している。
5. 頭部に赤色塗料が付着した個体があった。
6. 猪（仔および成獣）も副葬された石室があった。これまでに、筆者は古墳時代に属する石室内からのかような出土例に接していない。<sup>17, 18)</sup>
7. 性別については、可能性の強いものを含めて、男31・女13が推定でき、他については不明である。

また、年齢の推定結果は、小児2・成人64・老年10である。このうち性別が推定できたものは成人では男27・女6・老年では男2・女5であった。すなわち、本人骨群の死亡年齢は全体として若い方に傾き、男より女が高年齢に傾く。かような年齢推定の結果は、他地方の日本人<sup>19)</sup>の寿命の時代的変化の研究結果に追加され検討されるべきものと考える。

8. 頭骨長幅指数は1例（女性の可能性が強い）で確められ、短頭型（81.6）であった。  
20)
9. 従来報告された鹿児島県成川遺跡出土人骨および熊本県の内外の古墳時代人のみならず、早期  
21)  
晩文時代人の値を使値する若るしい柱状大顎骨および扁平脛骨例が多数認められたので、本  
遺跡人もかなりの原始的生活を営んだものと見ることができる。
10. 若るしい歯の咬耗を示すものや、シャベル形切歯も多数認められた。また輕度の麟歯をもつ個  
24)  
体が多い。これは従来報告された他地方の古墳時代人の結果より多いと思われるが、さらに詳し  
い検討を行いたい。
11. 身長はPearsonの式により1例で、145～148cmと推定できた。

#### 謝 辞

本研究を行なうにあたり、筆者が当時在職していた熊本大学医学部第2解剖学教室忽那将愛教授（現熊本大学名誉教授）の終始御恩篤の御指導に感謝致します。また木発掘調査団の故坂本經庵（當時肥後考古学会会長）、田辺哲夫・乙益重隆・三島格・隈昭志・上野辰男・絡方勉・佐藤伸二の各氏  
およびそのほかの方々ならびに熊本大学医学部第2解剖学教室の諸先生の御協力に厚く御礼を申し上げます。なお、本論文をまとめるにあたり、種々御指導を賜った札幌医科大学第2解剖学教室三橋公平教授に感謝致します。（北条翠章）

#### 引用文献

- (1) 乙益重隆：肥後上代文化史、日本談義社・熊本（1954）
- (2) 熊本県史：総説編、熊本県・熊本（1965）
- (3) 坂本經庵・坂本経昌：天草の古代、城野印刷所・熊本（1971）
- (4) 乙益重隆：熊襲・隼人のクニ、古代の日本、3.九州（鏡山猛・田村円澄編）、90-111、角川書店・東京（1970）
- (5) 乙益重隆：地下式板石積石室墓の研究、国史学83、1-29（1971）
- (6) 清野謙次、宮本博人：東部垂細毛に於ける諸人種の人類学的研究、第1輯、第3肥後國熊本市春日町北岡神社境内古墳より発見せし人骨に就きて、熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告書2、1-22（1925）

- (7) 三島 格, 金関丈夫, 永井昌文: 熊本県荒尾市下井手狐塚第2号墳調査報告書, 1-12  
 (1954)
- (8) 乙益正隆: 八代市大鼠藏山古墳—肥後に於ける箱式石棺内合葬について—, 考古学雑誌 41  
 283-293 (1956)
- (9) 富樫卯三郎, 松本雅明: 小川町年ノ神古墳—20体近くの入骨の出土—, 熊本史学 15, 16.  
 28-33 (1959)
- (10) 小林久雄: 九州縄文土器の研究, 第2部弥生・古墳の研究, 熊本大学東洋史学研究室発行, 熊本  
 (1967)
- (11) 熊本県玉名市教育委員会: 熊本県玉名市山下古墳調査報告書, 熊本県玉名市文化財調査報告  
 2. 1-26 (1968).
- (12) 北条暉幸: 熊本県菊池郡七城村小野崎豪型石棺(古墳時代)入骨について, 熊本医会誌 43. 37  
 -46 (1969)
- (13) 北条暉幸, 松田忠寿, 肴木紀保: 熊本県上益城郡嘉島村劍原出土箱式石棺入骨について, 熊本医  
 会誌 43. 892-894 (1969).
- (14) 北条暉幸, 松田愛人: 熊本県菊池郡西合志町迫原「ハヤマ塚石棺」出土の入骨について, 熊本医  
 会誌 44. 653-658 (1970).
- (15) Martin, R., and Saller, K.: Lehrbuch der Anthropologie. I. 430-431 519-595  
 Gustav-Fischer, Stuttgart. (1957).
- (16) 鹿田恒太郎: 齧の解剖学. 70-86, 金原出版, 東京-京都 (1960)
- (17) 鎌方貞亮: 日本古代家畜史, 451-526, 河出書房, 東京 (1945).
- (18) 芝田善吾: 日本古代家畜史の研究, 71-99, 学術書出版社, 東京 (1969).
- (19) Kobayashi, K.: Trend in the length of life based on human skeletons from prehistoric  
 to modern times in Japan. J. Facult. Sci. Univ. Tokyo. V3, 107-162 (1967).
- (20) 金関丈夫: 成川遺跡(鹿児島県揖宿郡山川町所在), 第5章入骨 109-116 吉川弘文館.  
 (1974)
- (21) 城 一郎: 古墳時代日本人入骨の人類学的研究, 人類学報 1. 1-324 (1938)
- (22) 近藤四郎: 上代日本人脛骨の横断形に就いて 人類誌 59. 90-100 (1944)
- (23) 鈴木 尚: 相模平坂貝塚(早期縄文式遺跡)の入骨について, 人類誌 61. 117-128 (1950).
- (24) 佐倉 利: 日本人における歯齒列度の時代的推移, 人類誌 71. 153-177 (1964).

妻ノ塚墳墓群出土人骨調査観表

計測値単位 mm

石室番号	個体数	個体番号	推定性	推定年齢	人骨および歯の特徴 (性および年令の推定理由)	特記事項 (計測値単位mm)
1	4	1	♂	成人	外後頭隆起著明・重厚な下頸骨。大脛骨粗線著明・大脛骨中央周径 8.2.0・矢状径 2.6.5・横径 2.3.0・断面指数 1.15.2.2。	
	2	♂ (?)		"	大脛骨々体中央周径 8.5.0 で大きい。	
	3	♂ (?)		"	柱状大脛骨 (中央断面形イチジク状)・中央周径 8.5.5・矢状径 3.0.0・横径 2.3.2・断面指数 1.28.7.6。	
	4	?		?	骨片のみ。	
2	?	?	?	?	骨片のみ (数体とみられる)。	
3	1	1	♂	成年	上顎中切歯極めて大きく、咬耗著明 Broca の 3 度・シャベル形強度。下顎大臼歯咬耗少なく、齶歯による小孔。頭骨に赤色塗料付着。	
	4	3	1	♂	" 下顎骨外側隆起著明・体高 31.0・体厚 14.0。柱状大脛骨。	
		2	♀	熟年	頭蓋骨々壁かなり薄い。下顎側切歯咬耗強く Broca の 3 ~ 4 度。	
		3	?	"	"	
7	4	1	?	成年 (若v)	下顎第一大臼歯咬耗少なく Broca の 1 度で、小さい。上顎大小臼歯はともに小さく、咬耗少なく Broca の 1 度。	
	2	?	"	"	下顎第一臼歯大きく、咬耗中等度で Broca の 2 度。	
	3	2	成年 (若v)		頭骨々壁極めて薄い。下顎大臼歯咬耗認められず Broca の 0 度。上顎大臼歯は小さく、軽度の齶歯。赤色塗料付着。	
	4	?	"	"	下顎犬齒、第一大臼歯はともに小さく、咬耗は認められず Broca の 0 度。	
8	12	1	♂	成年	頭骨々壁極めて厚い。外後頭隆起著明。四肢骨および脛幹骨などの状態から成人と推定。	
	2	♂	成年 (壮年)		外後頭隆起著明。矢状縫合のうち Pars Postica は癒合・人字縫合は全長に亘り開離。	
	3	♂	成年 (若v)		頭骨々壁厚い。縫合開離。	
	4	?	成年		上顎中切歯極めて大きく、シャベル形強度。咬耗著明 Broca の 3 度。下顎小臼歯 Broca の 1 度・下顎第一大臼歯大きく、咬耗 Broca の 2 度。	
	5	♂	?		外後頭隆起大きい。	
	6	♂	成年 (若v)		外後頭隆起大きく、頭蓋骨々壁厚い。上顎大臼歯咬耗少なく Broca の 0 ~ 1 度。	
	7	?	"		右側下顎第一大臼歯 小さく、咬耗少ない、 Broca の 1 度。	
	8	♂ (?)	"		頭骨々壁厚い。オトガイ高 28.0。下顎右側第三大臼歯まで萌出咬耗全般に少なく、 Broca の 1 ~ 2 度。	

石室番号	個体数	個体番号	推定性	推定年齢	人骨および歯の特徴 (性および年令の推定理由)	特記事項 (計測値単位mm)
9	?	成入	上顎中切歯は大きく、強度のシャベル形。上顎小白歯に咬耗認められない。	(若い)		
10	5		?		乳様突起強大。下顎骨体極めて重厚。歯の咬耗少なく Broca の0~1度。但し下顎右側第2大臼歯頬側咬頭は歯根まで解離。	
11	5	熟年			外後頸隆起著明。下顎骨体かなり重厚。体高27.5、体厚13.0、大小臼歯咬耗著明 Brocaの4度、大歯 Brocaの3度。	
12	5	成入	外後頸隆起著明、頭蓋骨々壁厚い。縫合残存部全て開離。	(若い)		
					特記事項: №8 および 12 を除く他の頭骨の付近、すなわち本石棺の東隔壁に沿って、赤色塗料が分布していた。	
9	7	1	?	成入	上顎大臼歯小さく、咬耗は認められない。下顎小白歯咬耗少なく Broca の0~1度。	(若い)
	2	?	?		骨片のみ。	
3	?	成入	?	(若い)	縫合内外板開離。	
4	?	小児		(?)	頭蓋骨々壁極めて薄い。	
5	?	成入	上顎大小臼歯ともに大きく、咬耗 Brocaの1~2度。			
6	?		?		上顎大臼歯1本だけ残存、咬耗 Brocaの2度。麟歯による小孔を認む。	
7	?		?		上顎小白歯咬耗は認められない。	(若い)
10	4	3	?	(若い)	下顎右側第一大臼歯大きく、咬耗は認められない。	
その他	?	?			骨片のみ。(3体を含む)。	
11	4	1	?	成入	下顎第一大臼歯に咬耗は認められない。	(若い)
	2	?	?		矢状縫合開離。	(若い)
	3	?(?)	?		下顎第二小臼歯小さく、咬耗は少ない。	
	4	?	?		頭蓋骨の痕跡のみ。	
12	2	1	?	成入	大顎骨各筋粗織(筋筋、耳筋筋、内側広筋等)著明。下顎右側第1大臼歯咬耗少なく Brocaの1度。	(若い)
	2	?	?		骨片のみ。	
13	5	5	成入		乳様突起極めて大きい。頭蓋骨々壁厚い。矢状・人字両縫合内外板とも開離。オトガイ隆起著明。下顎第一大臼歯咬耗少なく、麟歯あり。	(若い)
	2	?	?		矢状・人字両縫合内外板とも開離。	(?)

石室番号	個体数	個体番号	推定性	推定年齢	人骨および歯の特徴 (性および年令の推定理由)	特記事項 (計測値単位mm)
					3 成人	頭蓋骨々壁薄く、下頬大臼歯かなり小さい。歯の咬耗が少なくBrocaの0~1度。
					4 ♂	乳様突起強大。頭蓋骨々壁厚く、外後頭茎起著明。矢状・八字両縫合内外板とも開離。上頬大臼歯Brocaの2~3度。鱗歯を認む。
					5 ♀(?)	頭蓋骨々壁かなり厚い。結合開離。下頬第一大臼歯大きく、咬耗著明Broca 2~3度。舌側突頭に歯による小孔。
14	7	1	♂	成人	八字縫合 (Para asterica) 内外板とも開離。下頬骨重厚、下頬体高 27.0、オトガイ高 30.0。上下頬大臼歯咬耗著明。	
		2	?	?		上腕骨最大長約 270.0。他は骨片のみ。
		3	♀	成人	外後頭隆起弱く、頭蓋骨々壁は薄い。矢状縫合開離。下頬第3大臼歯、咬耗認められない。Brocaの0度。他の下頬大臼歯咬耗中等度。	
		4	?	( " )	冠状縫合開離	
		5	?	( " )	歯は全体に小形。ほとんど咬耗を認めない。	
		6	♂	( " )	乳様突起大きく、下頬骨重厚で大きい。オトガイ隆起著明。咬耗は前歯でBrocaの2度、後歯で1度。前腕部に鉄剣をもつ。	
		7	♂	?	外後頭隆起極めて著明。頭蓋骨々壁厚し。	
16	4	1	?	成人	小白歯咬耗少なくBrocaの0~1度、鱗歯による小孔を認む。 (若い)	
		2	?	成人	第2小白歯咬耗 Brocaの2度。	
		3	?	?	骨片のみ。	
		4	?	成人	上頬右側第1大臼歯大きく、咬耗は認められない。Brocaの0度。 (若い)	
17	5	1	?	成人	下頬第1大臼歯は大きく、咬耗中等度、Brocaの2度。	
		2	?	"	縫合開離。上頬大歯咬耗かなり甚しい、Brocaの3度。上頬大臼歯大きく、咬耗 Brocaの1~2度。鱗歯多し。	
		3	?	?	骨片のみ。	
		4	?	成人	上頬中切歯極めて大きく、シャベル形強度、咬耗は少なくBrocaの1度。後歯はBrocaの2~3度。歯は全体に大きい。	
		5	♂	成人	下頬骨は重厚。オトガイ高 29.5 で高い。上下頬大臼歯に咬耗は認められない。Brocaの0度。	
18	3	1	♀(?)	熟年(?)	脛骨、距骨は、ともに小さい。脛骨：中央周径 75.0、矢状径 28.0、横径 16.8、断面指数 60.0、平脛 Platycnemic (Khuff)。後脛の咬耗甚しく Brocaの3~4度。	
		2	?	成人	頭蓋骨々壁薄い。矢状縫合内外板とも開離。	
		3	?	成人	頭蓋骨々壁薄い。歯の咬耗少なくBrocaの1~2度。	

石室番号	個体数	個体番号	推定性	推定年齢	入骨および歯の特徴 (性および年令の推定理由)	特記事項 (計測値単位:mm)
19	2	1	?	?	骨片のみ。	
		2	?	成人	大臼歯咬耗少なく Brocaの2度。	
20	5	1	♂	成人	下頬骨重厚 外側隆起は極めて著明。咬耗前歯 Brocaの0~1度。後歯2~3度。	
		2	♂	成人 (若い)	頭蓋骨々片極めて厚く、縫合は閉鎖。	
		3	?	成人 (若い)	大臼歯の咬耗少なく、Brocaの1度。	
		4	?	?	若干の歯残存。咬耗は大歯で Brocaの1~2度。小臼歯2~3度。	
		5	♂	成人 (若い)	眉弓著しく高まっており、頭蓋骨々壁厚い。上顎大臼歯咬耗少なく Brocaの0~1度。	
23	3	?	?	?	3体分の骨片残存する。	
24	2	1	?	熟年 (?)	残存する歯の咬耗、上顎大臼歯 Brocaの3~4度。下顎大臼歯2~3度。歯冠による小孔を有するものあり。	
		2	♂	成人 (若い)	頭蓋骨々壁比較的厚い。矢状縫合のうち Pars obelicaの内外板開離。	
26	7	1	♂	熟年	外後頭隆起著明。矢状縫合完全に癒合、人字縫合(左側のみ残存)内外板ともほとんど癒合。	
		2	♂(?)	?	脛骨(右側)中央周径 85.0, 矢状径 31.0, 横径 20.0, 断面指数 64.52, Platycnemic (Khuff)	
		3	♀(?)	?	脛骨(左右不明)、中央周径 72.5, 矢状径 25.0, 横径 17.5, 断面指数 70.0, 厚脛 R enyconemic (Khuff)。	
27	2~3	1	?	?	4体分の骨片残存。	
		成人 (若い)			大臼歯咬耗少なく、Brocaの1度、歯冠による小孔を認む。	
28	8	1	♂	成人	外後頭隆起著明。下頬骨体極めて重厚(高さは低い)、外側隆起著明、オトガイ高 24.01、体高 27.2、体厚 16.0、歯の咬耗 Brocaの1~2度。	
		2	♂	?	下頬骨体重厚、体高 23.5、体厚 15.5。(第1大臼歯の部分では 18.5) 上顎中切歯は大きく、咬耗著しく Brocaの3~4度、大臼歯は 0~1度。	
		3	?	熟年	下顎大小臼歯はいずれも咬耗著しく Brocaの3~4度。	
		4	?	成人	下顎の歯の咬耗は、中切歯 Brocaの2~3度、小臼歯 1度、大臼歯 2度。	
		5	♀(?)	熟年	眉弓および外後頭隆起はともに弱い。頭長約 190.0, 最大頭幅約 155.0, 頭長幅指数 81.6, 短頭 brachy cranic. 3主縫合のうち、矢状縫合は癒合、他の2縫合もほとんど癒合。	
		6	?	小児	頭蓋骨々壁極めて薄く、全体として小さい。	
		7	?	成人 (若い)	下顎大臼歯咬耗少なく Brocaの 0~1度。	

石室番号	個体数	個体番号	推定性	推定年齢	人骨および歯の特徴(性および年令の推定理由)	特記事項(計測単位mm)
	8	♀	熟年		頭蓋骨々壁薄い。矢状縫合癒合。	
	29	2~3	1	♀ (?) 成人	扁平性の著しい、細い頸骨。細い柱状大腿骨。 前歯の咬耗 Brocaの2~3度。	特記事項 石棺南側壁中ほどに、長管骨(上腕骨・橈骨・尺骨・大腿骨・腓骨)が束ねてあった。このほか歯骨(猪と推定される)2体が人骨埋葬の床面より高い位置に埋葬されていた。
		2	?	熟年 (?)	かなり太い上腕骨の遠位部外側縫骨増殖著明。	
	36	6	1	?	冠状縫合開離。 (右側)	特記事項 このほか歯骨(猪と推定される)1体あり。
		2	♀ (?)	" ( " )	頭蓋骨々壁薄い。矢状縫合開離。	
		3	♀	" ( " )	頭蓋骨々壁薄い。矢状縫合のうちPars obliquaの内外板開離。	
		4	♀	" ( " )	乳様突起かなり小さい。上顎大臼歯に咬耗認められない。 Brocaの0度。	
		5	♂	"	頭骨々壁厚い。冠状、矢状両縫合内外板とも開離。	
		6	?	?	骨片のみ残存。	

註：1) 第5, 6, 15, 21, 22, 25, 30, 31, 32, 33, 34, 35号の各石室内の人骨は甚だしく腐蝕しており、個体識別は不能であった。

2) ♂(?)または♀(?)は、男性または女性の可能性の強いことを示す。

## VI 結論

以上のべた通り妻鼻における地下式板石積石室墓は、亀川の海岸に突出した岬の約4.000平方mにわたるせまい地域に、34基以上群集する特殊な墓制であるが、今までの疑問点を数多く解決することができた。

この種墓制の特色については、別項の「地下式板石積石室墓について」にのべた通りであるが、その構造を分類すると四形式にわけられる。すなわち第I類は床にたてめぐらした壁石や積石の平面形が長楕円形を呈するもの。第II類は円形。第III類は長方形。第IV類は方形をなす。その他にも多角形配置や三昧洞形があり細分すると六形式以上になる。

このような中にあって妻鼻の墳墓群の占める位置から検討すると、まず石室構造については次のようなことがいえる。すなわち妻鼻では第21号墓と第28号墓を除くと、他はすべて第III類と第IV類であった。但しそれも厳密にいうと石壁の配置が乱れ、多角形配置に近く、基本的には第III類の垂流に属する。ただ第21号墓だけは円陣を楕円形のサークル状に置きならべたもので、はたして、本来石室上部に鍛錠に積んだ板石があったかどうか疑わしい。サイズも小さく長さ84cm・幅37cmを有し、上部がけずられて深さが明らかでない。おそらく小児用の土塚ではあるまいか。しかしに第28号墓は最大の規模を有し、床面からいきなり塊石を長楕円形に積み上げ、あたかも堅穴式石室のようになっていた。おそらくこれらの石室はたとえ構造上若干のちがいがあっても、時間的隔差がなかつたことは、副葬品の伴出關係からも言えることである。その点では出水市道場園溝下のばあいと最も近い共通性があると認められて興味深い。ちなみに溝下では第1号・第4号・第5号墓は第II類、第2号・第3号墳は第III類に属し、長剣・短剣・大刀・小刀・鎌などを出土した。とくに昭和8年頃出土した石室(第III類)には平板銘留式短甲1・金環2・銀環3・刀2・鎌1・劍1・幣1・刀残欠・鎌1・土師器壺1・鏡1・土師器・須恵器残欠などが出土している。おそらく成立年代は5世紀末~6世紀前半であろう。

次に妻鼻墳墓群出土の遺物についてのべると、まず副葬品の貧弱なことに注目される。そして剣・大刀・鎌・矛など攻撃用武器が圧倒的に多いのは南九州地方の特色である。それらの武器には短剣・長剣・大刀・小刀・鎌・矛など多岐にわたるが、一般に年代決定の手がかりに乏しい。しかし剣はすべて闊が直角に切れ込む角間に統一された感があり、一般に年代の下限するには否定できない。とくに第28号墳に伴なった矛は5世紀末~6世紀前半期に伴なうことが知られ、同例が出水市溝下でも採取されている。

鏡や装身具の少ないものこの種墓制の特色で、鹿児島県下の諸例や人吉盆地・芦北地方では皆無に等しい。その点妻鼻では少ないながらも共存し、すでに高度な高塚古墳文化の影響をうけていたことが明らかである。しかし銅鏡(第1号墳)や鐵劍(第14号墳・第22号墳)のような装身具を有し

彷彿四乳鏡（第3号墳）を廟墓していたとはいえ、他地方では祭器として供獻する滑石製模造品の玉類を、実用の装身具として用いていた点に妻島文化の地方色が考えられる。

また第11号墳と第36号墳に伴なった鎌は全国的にも珍らしい例であるが、南九州の古墳や墳墓には時おり共存する。古師見田氏によると鹿児島県喜入町喜入小学校庭から発見された地下式横穴第10号から長さ10.2cmのと長さ6.7cmの2点が出土している。これらのうち短かい方は鎌とみられるが、長い方はかって筆者が双頭状鉄器と称した槍のような武器と考えられる。その他にも鎌は大分県臼杵山古墳、同県築山古墳、宮崎県延岡市淨土寺山古墳<sup>19</sup>、同県六野原古墳群の一つからも出土し、

般に5世紀代に多いことがわかる。尚、古墳時代の鎌は遠く群馬県群馬郡白山神社古墳（銅製品）や同県春日市小林、同多野郡本郷川土例など、南と北に偏して発見されるのは単なる偶然であろうか。

上器類については彼損落したものばかりで伴出年代の決めてが薄弱であるが、たまたま第2号墳その他から出土した土師器の多くは和泉式系の上器であった。したがってたとえ上器と他の遺物との併存関係があいまいであっても、年代的には一致する。

要するに妻島墳墓群の行なわれた年代は、5世紀後半から6世紀前半の間に位置づけられるであろう。しかるにその墳になると同じ天草でも大矢野町雄和（千束藏・島）古墳群のうち、一部の古式古墳はすでに出現していたらしく、同町長砂連や広瀬などの装飾古墳は一部併行関係にあったと考えられる。すでに有力な高麗古墳文化を受容れた地帯にあっても、なお伝統的な在来の墓制を護持したところに、地下式板石積石室墓文化のいちじるしい特色が考えられる。しかもその分布地域が、たまたま古典にみえる薩摩・隼人の居住地域に一致することは注目すべき現象である。 （乙益重隆）

## 付編

### 地下式板石横石室墓について

乙 益 重 隆 しころ

地下式板石横石室墓という名称は必ずしも適切ではない。かって故坂本經堯氏はこの種の墳墓を鐵  
古墳の名でよばれたこともあったが、学界ではすでに昭和23年ごろから、慣用化された名称であるところから、あえて踏襲するものである。しかし故寺師見國氏によると鹿児島県大口市大庄の第  
23号墓と第24号墓では、石室内部が空洞になり地上に墳丘状の盛土があつたらしく「他と比較して石室の上部が浅く細面より見ると、これとすれすれであった事からも塚の存在が推定され」という。  
また故松瀬清兵衛氏の調べられた同県薩摩郡鶴田町京塚原の一例では、地上に明瞭な小封土があつた  
といふ。故にこの種の埋葬施設には本来小封土があったことが明らかである。もちろんその封土は一  
種の墳墓標識にはちがいないが、むしろ地中を掘込んで埋葬施設を構築したさいに、耕土で埋まらぬ  
を行った程度のもので、高大にそびえる高塚古墳とは本質的に異なる。故に考古学上の概念からい  
うとこの種の埋葬施設は、墳墓ではあっても古墳といえるものではない。

次にこの種の墳墓の特色は地表下約1.20m~1.80mの深さに、高さ約4.0~6.0cmの板状石を横円形または円形、または長方形または方形に立てめぐらして、石橋状の囲みをつくり、その上部に長さ3.0~5.0cmの菱形または長方形に割り欠いた板状石を持送り式に梯状に積み上げ空洞をつく  
る。天井部は特に大石を用いて鐵横と同様一枚石を架し、その構造は崩れやすい。追葬にさいして  
は上部の鐵横を数枚はずすことによって出入は容易である。しかし中には妻鼻第28号墓や人吉市尾  
南のように、床面からいきなり板状石を平積にし、上部だけを持送りに積んだ例もある。石材は板状  
に剥離するものをえらび、北薩摩や人吉盆地では安山岩一色に統一され、天草では砂岩を主とし、八  
代市敷河内丸山のばあいは塊石や河原石で積まれていた。石窓を覆った盛土には、しばしば壺形土器  
や高杯などが供獻した状態で出土し、中には破損して石室内に転落したもののが少くない。

石室の床面はその平面観の構造によって四形式にわけられる。(4) すなわち第一類は長横円形を呈す  
るもの、第二類は円形、第三類は長方形、第四類は方形をなす。その他にも八角形、六角形など不整  
多角形を呈するものがあるが、それらはあくまでも第一類・第二類の亜流に属する。また三昧洞形や  
不整長方形を呈するものは第三類・第四類の変形とみるとべきである。一般に第一類・第二類は北薩摩  
地方と肥後の入吉盆地、芦北海岸地方に多く、出水平野や川内川流域、肥後の天草では第三類・第四  
類が多い。かって私はこれらの時間的前後関係について、第一、第二類が先行し、第三、第四類はそ  
の後続形態と考えたことがある。しかし昭和46年1月、鹿児島県出水郡高尾野町柴引堂前の地下式  
板石横石室第17号墓では、免田式土器の壺形土器を伴出したことから、こうした考え方には必ずしも  
当てはまらないことがわかった。それにしても大口盆地や入吉盆地に分布する第一、第二類には、免

田II式や成川式土器など、弥生終末期の土器を伴なう例が多いことだけは確である。或はそれは地域的な特色であろうか。

次にこの種の墳墓には本来単独に一人だけ埋葬したのか、追加合葬を原則とするのか明らかでなかった。北薩摩や肥後の球磨地方では石室内に酸性の強い火山灰土が流入しているため、人骨の残るもののがきわめて少なく、たとえ残片があっても埋葬された人数を知ることはできなかった。しかるに天草垂鼻では石室内に入骨の残っていないものもあったが、多くのはあい3体～5体以上、中には第8号墓のように12体を合葬した例もあった。おそらくこの種の墓制は最初から追葬を予定して構築した家族墓であったと考えられる。

さらにこの種の墳墓群の分布についてのべると、まず鹿児島県北部の北薩摩地方には最も多く、まさに中心地帯の感がある。すなわち大口盆地では羽月川流域にのぞむ周辺台地に群集し、大口市大住<sup>(7)</sup>では約3アールの範囲に34基も発見されている。その後も開発とともにあって60基以上あることがわかり、保存されることとなった。また同市下殿焼山では11基が発掘され、他にも数多く埋没しているらしい。さらにも同市諏訪野の新納忠元神社のや、同市大田における7基、同市小木原春村、同市育木原ノ上、伊佐郡菱刈町市山塚ノ神の3基などが知られ、発掘するとこの地区だけでも300基以上にのぼるであろう。この地方における地下式板石積石室墓は一般に副葬品が少なく、年代の決めてを欠ぐが、中には大住第11号のように石室近くの地表下約45cmに免田II式產形土器を出土した例があり、また同第1号では石室の外側20～30cmに、口縁部が「く」の字形をなした土師式土器の大形壺と、成川式の產形土器を出土している。これらは墳墓に供獻されたことが明らかである。そしてこれらの土師式土器は古式に属し、弥生終末の免田II式や成川式土器と共にても矛盾のないものであった。一方年代の下限を物語るものとしては同市春村の一例があげられる。寺跡見国氏によるとこの石室では金環・櫛金具・円頭大刀・飛燕形を含む鐵鏡・括が副葬され、石室内には須恵器の破片が落込んでいたという。おそらくそれらの実年代は6世紀～7世紀頃であろう。

これらの一連をなす墳墓群は隣接する姶良郡東野町や吉松町にひろがり、さらに東境をこえて宮崎県えびの市島内や同灰坂・同北諸県郡高城町香椎寺にもおよぶ。<sup>(8)</sup>

同じ北薩摩でも西部地区では、出水市上知識道場闇通称溝下において、昭和8年の発見以来断続的に発掘された10基以上の石室をはじめ、阿久根市協元の1基、川内市横岡の7基、同若宮神社・安里安養寺・船間島などにおける不確実なものを含むとおびただしい数にのぼる。さらに薩摩郡薩摩町では広橋・北方・中津川尾原・柏原京坂などで断片的な発見例があり、とくに永野別府原では6基が発掘調査された。また出水郡高尾野町柴引堂前で出土した18基以上に上る墳墓群では、いろいろと新しい知見がえられた。この地区における最古の石室墓は、すでに述べた高尾野町堂前17号において、免田I式の產形土器を伴った例があり、下限は川内市横岡折卯郡第4号のように表層より須恵器

第Ⅱ様式を出土した例があり、6世紀代までたどることができよう。

北薩摩地方に隣接する熊本県の入吉盆地では球磨川沖積平野にのぞむ扇状地上に弥生時代の遺跡と重複して分布する。まず入吉市原田では尾間に1基、これに隣接した荒毛に1基以上。球磨郡免田町本目に2基、同錦町木上高ノ原の人吉農芸学院で7基以上が確認され、他にも昭和38年の調査時に石材を取りはらった土塙の残骸1基分を検出した。<sup>88</sup>また同多良木町大久保では公民館の東方約200m一帯の畠が地下に下されたときに板状石を集積したものが3箇所以上あり、その周辺から免田Ⅱ式壺形土器や高杯などが採取された。石材の中には石に丹の付着したものがあり、おそらく地下式板石積石室墓の残骸であろう。その他にも昭和48年春、杉村彰一氏の発掘された同郡深田村新深田における9基以上があり、石室の周辺には免田Ⅱ式の壺形土器や高杯を出土したという。入吉盆地の地下式板石積石室墓は、多くのばい床の圓石の平面観が円形または楕円形を呈する第一類・第二類に属するが、新深田における第1号と第5号・第9号墓は長方形を呈した第三類であった。しかもこれらの遺跡では石室の周辺から免田Ⅱ式土器と成川式・古式の土器式土器を出土し、中には石室内部に破片の転落しているものもあったという。おそらく入吉盆地では弥生終末の免田Ⅱ式や成川式の頃だけでのこの種の墓制は終息するものと考えられる。

西健一郎氏によると芦北の海岸地方では芦北町宮ノ浦横手において4基発掘され、他に確認された7基を含めて20基近く埋没しているという。それらの完掘された4基は円形の第二類に属するものであった。行窓周辺から出土した土器はすべて免田Ⅱ式の壺形土器や高杯で、他に古式の土器式土器があったという。また同様な墳墓は田浦町小島と、水俣市初野のオカと、上野の北瀬から出土したことがあり、かって私の踏査時には現地には多量の板状石が積まれていた。とくに北瀬では長剣や鐵鏃が出土し、おそらくそれらの構造は地下式板石積石室にちがいなかろう。中でもオカでは周囲から免田Ⅱ式土器片が採取されている。

天草地方ではここに述べた本渡市妻ノ鼻における35基のほかに、天草郡松島町阿村硫ノ花で出土した石組造構がある。三島格氏によるとその造構はまもなく破壊され、今では調べようもないが、構造からみて地下式板石積石室墓であったことがほぼ確実視される。

また小田富士雄氏によるとこのような墳墓は、長崎県五島列島の北端宇久島（北松浦郡宇久町大字平字松原）第2号墓と、同中通島（同郡有川町浜郷）の第2次調査第1号墓ともう1基ほど発見されている。それらの構造は長方形に板石を組合せて箱形の石棺をつくり、その上部に板石を平積に数段重ね、次第に空間を小さくするように積み、一枚石で最後の蓋を施すもので、「一見、南九州の古墳時代にみられる地下式板石積石室古墳が想起されるほどである。」という。おそらくこれらは地下式板石積石室墓そのものであろう。とくに松原第2号墓では小児入骨を出土し、浜郷第1号墓では成入男女2体以上を合葬し、碧玉製管玉32と壺形土器・イノシシ下顎骨8・アワビ貝2などが副葬され

ていた。しかも松原第2号では、周辺から弥生中期中葉の土器を出土し(須政II式)、浜郷第1号に副葬されていた小形の壺形土器は、弥生中期前半の城ノ越式であった。したがってこれらの遺構が地下式板石積石室墓そのものであれば、南九州や天草に先行しておこったことになり、この種の墓制の発生について一書の手がかりを示すものとして重視される。

かって私はこのような墓制の源流を、免田1式土器に伴う小形支石墓にもとめたことがあった。それは昭和21年1月、熊本県球磨郡免田町吉井(正しくは馬立原。部落は吉井に属する)の通称市房隈において発掘した、合計8基の支石墓の在り方によるものである。<sup>20</sup> すなわち第1号の内部は阿蘇熔岩と安山岩の割石を組合せて長さ68cm・幅34cm・深さ35cmの小さな箱式石棺をこしらえ、その上を蓋石で覆い、さらにその上に全長96cm・幅46cm・厚さ18cmの扁平な大石をのせ支石はなかった。このような支石を欠ぐ支石墓は長崎県南高来郡原山支石墓群や、同郡狸山群の中にもみられ、韓国では南方式第1類とよばれる。また有光敷一氏はこれを変形的支石墓とよばれ、前に述べた五島列島の宇久松原でも2基発見されている。しかるに市房隈の支石墓内部には小供ならともかく、成人ではとうてい収容できそうもない小さなもので、もちろん骨は残っていないかった。しかも第2号から第8号にわたる8石棺はすべて第1号と同様なサイズであった。<sup>21</sup> とくに昭和13年頃高田素次氏の調査された2基の石棺も同様なもので、棺の外側に接して免田1式の壺形土器2個が直立していたといい、その発掘時にも第4号石棺の外側には同様な壺形土器1個が横転破壊した状態で検出された。おそらく墳墓に供獻したものであろう。このような小形の箱式石棺は舗町木上(高ノ原の八吉農芸学院校内から1基と、同町木上字追から1基発見されている。)とくに昭和35年8月、長崎県原山で発掘された縄文終末期の支石墓45基のうち、21基にはこのような小形箱式石棺の内部施設を有していた。また佐賀県原古賀で発見された箱式石棺は「長さ2尺1寸・幅1尺5寸・深さ8寸」の小形で、<sup>22</sup> 同県朝日では同様な石棺に広先の鉄戈を伴出している。おそらくこれらの石棺は支石墓の掌石の部分が失われたものであろう。このような小形箱式石棺を有する支石墓の祖型は、韓国南部にもとめられ、全羅南道方面には數例発見されているといふ。おそらく箱式石棺に遺体を埋葬するにさいしては、被葬者の死後硬直が去った後折りたたむように納めたか、または、たん埋葬し骨骼だけになつた遺体を、再葬したとみなければならぬ。おそらくこれらのばあい再葬した疑が濃厚である。

故に私は地下式板石積石室墓の起源について、こうした免田1式土器に伴う小形箱式石棺を伴う支石墓にもとめたい。それがやがて家族単位に埋葬するようになってこうした墓制がおこつたのではないかと考える。そして石室床面に立てめぐらした構造の開口は箱式石棺の名残りと考えられ、その上層に積んだ籠葬状の空間は、追葬時の硬直を考慮したものであろう。おそらくこのような個人の墓から家族墓への転換が行われたことについては、社会生活の発展史上何らかの変革的事情があったにちがいない。

一方河口貞徳氏<sup>23</sup> はこのような墓制の発生について、同じ免田式を伴う土壙墓の上に籠葬を施した鹿

児島県前第17号のほかにもとめておられる。そしてその初現的な姿を五島列島の宇久島松原や、中通島浜郷の上部に鏡蓋を有する石棺墓にもとめようとしたことは注目される。

以上のべたように地下式板石積石室墓の起源については各種の考え方を行われているが、少くとも熊本県南部を含む南九州では、免田Ⅱ式と成川式が共存する頃出現し、5世紀代になると畿内系高塚古墳文化の影響を受け、下限は7世紀代まで継続した。故にこの種の墓制の起源については、同じ免田式の1式を伴う墓制にもとめなければならない。その墓制は私の言う小形箱式石棺を伴う支石墓であっても、河口氏の言われる長方形の土塚墓であっても、出土状態については否定できない。したがってこの種の墓制の発生は、それ以前にあったとみなければならない。もし小田氏の報告された中通島浜郷や宇久島松原の例が、須歎1式や城の越式の段階までさかのほるとすれば、この種墓制を誘発せしめる条件として、支石墓の在り方を考慮しなければならない。つまり単独の人物を埋葬した支石墓から、複数以上の人物を追葬することによって草石が省略され、支石を鏡蓋に置きかえることによって棺内の容積を拡大し、地下式板石積石室墓を発生せしめたのではなかろうか。

#### 註

1. 寺師見国「鹿児島県大口市大住焼山石室古墳群」鹿児島県文化財調査報告書第6集(昭和34年)
2. 松瀬清兵衛「川内地方を中心とした郷土史料」(昭和7年プリント版)
3. 江上敏勝「八代市敷川内町丸山古墳群第1号墳調査概報」夜豆吉昌第40・41合併号(昭和50年)
4. 乙益重隆「熊襲隼人のクニ」「古代の日本」3九州、角川書店(昭和45年)
5. 乙益重隆「地下式板石積石室墓の研究」国史学第83号(昭和46年1月)
6. 河口貞徳・上村俊雄「鹿児島県別府原・堂前古墳群」考古学雑誌第57巻第1号(昭和46年)
7. 8・9・10寺師見国「鹿児島県下の地下式板石積石室」鹿児島県文化財調査報告書第5集(昭和33年)
8. 9・10註1
11. 上村俊雄「考古学上より見たる熊襲と隼人」隼人 社会思想社(昭和50年)
12. 註7
13. 池水寛治「出水市の歴史時代」「出水郷土史」
14. 15・註5
16. 註6
17. 註13
18. 註5
19. 杉村彰一「地下式板石積石室墓——球磨郡深田村所在——」ふるさとの自然と歴史第79号(昭和52年)

- 20, 21 小田富七雄「五島列島の弥生文化——総説篇」長崎大学人類学考古学研究報告第2号  
(昭和45年)
- 21 註5
- 22 乙益重峰「免田式土器に伴う墳墓と推定される遺構について」日本考古学協会第22回研究発表要旨(昭和33年)
- 23 松尾祐作「中原村古賀弥生式壺棺遺跡」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第5輯(昭和11年)
- 24 註6

地下式板石横石室墓地名表 (乙益重隆作成)

県名	地名	寸法 長辺×短辺 (地表下)	床の 平面形	副葬品	人骨	文献
鹿児島	大口市宮入大住 第1号	1.48m×1.40m (1.30m)	多角形	西平式(龜文)土師片落ち込む		鹿児島県文化財調査報告5集
"	第2号	1.25m×1.25m (1.00)	楕円形			"
"	第3号	1.40m×1.08m	不整多角形	有孔石器落ち込む		"
"	第4号	1.20m×1.04m (1.08)	"			"
"	第5号	1.20m×1.02m (1.00)	"			"
"	第6号	1.35m×1.20m (1.10)	不整円形			"
"	第7号	1.30m×1.15m (0.95)	"	無柄長三角形鐵1		"
"	第8号	1.75m×1.50m (1.05)	"			"
"	第9号	1.40m×1.25m (1.40)	多角形	鐵2		鹿児島県文化財調査報告第6集
"	第10号	1.15m×1.10m (1.55)	"			"
"	第11号	1.20m×1.10m (1.15)	多角方形	石窓外東北土中、地表下40cmに兔田式壺形土器出土		"
"	第12号	1.55m×1.36m (1.05)	椭円形	鐵1		"
"	第13号	1.20m×1.15m (1.15)	円形			"
"	第14号	1.10m×1.03m (1.10)	多角形			"
"	第19号	1.75m×1.25m (1.40)	椭円形			"
"	第20号	1.10m×1.05m (0.50)	円形	鐵2		"
"	第21号	1.00m×0.95m (1.10)	多角形			"
"	第22号	1.35m×0.95m (0.95)	多角方形	打製石鐵1 落ち込む		"
"	第23号	1.30m×1.20m (1.20)	不整円形		人骨片	"
"	第24号	1.50m×1.20m (1.20)	椭円形	鐵1	歯	"
"	第28号	1.25m×1.15m (1.40)	円形	鐵1		"
"	第29号	1.30m×1.10m (1.60)	多角形	鐵1		"
"	大口市下殿燒山 第1号	1.10m×1.05m (1.15)	円形	鐵4		鹿児島県文化財調査報告第5集
"	第2号	1.60m×1.80m (1.00)	"	鐵1 6		"
"	第3号	1.55m×1.40m (1.08)	三昧制形	鐵3		"

県名	地名	寸法 長辺×短辺 (地表下)	床の 平面形	副葬品	人骨	文献
鹿児島	大口市下殿焼山 第4号	1.65m×1.35m (1.40)	楕円形	鐵9		鹿児島県文化財 調査報告第5集
"	第5号	1.53×1.35 (1.20)	"	劍2・鐵6	頭蓋片	鹿児島県文化財 調査報告第6集
"	第6号	1.30×0.82 (1.40)	多角形	鐵9		"
"	第7号	1.54×1.15 (1.15)	楕円形	鐵5		"
"	第8号	1.35×0.65 (1.25)	"	鐵1		"
"	第9号	1.43×1.15 (1.60)	"	鐵5		"
"	第10号	1.20×1.02 (1.03)	円形	鐵3		"
"	第11号	1.55×1.43 (0.95)	"	鐵3		"
"	大口市諫訪野 (忠元)	1.25×1.25 (1.00)	"	鐵3		鹿児島県文化財 調査報告第5集
"	大口市大田 第1号	1.03×0.91 (0.42)	"	遺物なし		"
"	第2号	1.21×0.91 (1.21)	楕円形(天 井家形)	"		"
"	第3号	1.15×0.95 (1.00)	"	鐵7		"
"	第4号	1.40×1.05 (約1.00)	長方形	遺物なし		"
"	第5号	1.21×0.82 (0.32?)	"	"		"
"	第6号	1.50×1.15 (0.64)	方形	"		"
"	第7号	1.21×1.85 (0.40?)	"	"		"
"	大口市小木原春村	2.50×2.00 (0.75)	"	大刀(鍔付)柄頭・金環 2・馬具(タツワ)鐵5		"
"	大口市下青木瀬ノ 上	1.90×1.60 (0.88)	楕円形	大刀2・鐵20		"
"	伊佐郡菱刈町市山 塞ノ神 第1号	1.82×1.60 (1.20)	円形	鐵1		"
"	第2号	2.00×1.76 (0.93)	"	鐵2		"
"	第3号	2.10×1.57 (1.10)	楕円形	大刀?		"
"	灰塚					上村俊雄「考古 学上よりみたる 熊襲と隼人」 「隼人」
"	築地					
"	姶良郡栗野町真中 馬場					"
"	姶良郡吉松町鶴丸					"
"	姶良郡吉松町永山 (35基以上)					"

県名	地名	寸法 長辺×短辺 (地表)	床の 平面形	刷 菲 品	人骨	文 獻
鹿児島	姶良郡吉松町二反田			大刀2 長剣3 短剣4 0		鹿児島県文化財調査報告第5集
#	出水市知識遺場園 (海下) 第1号	1.88m×1.68m (1.63)	円形	大刀1 長剣1 短剣1 鎌約30		"
#	# 第2号	1.43×1.43 (1.65)	多角形	長剣2 鎌約35		"
#	# 第3号		方形に近い	長剣1 短剣1 約21		"
#	# 第4号	L53×1.36 (1.88)	南北円形	大刀3 長剣2 短剣1 鎌94		"
#	# 第5号	1.82×1.53 (1.93)	円形	金環2銀環3短甲1 一括 刀身2刀残欠8石突1矛1		池水寛治「出水市海下横穴群」 出水郷土史
#	昭和8年発見分數基		長方形	劍1 上鉢 須恵残欠		池水寛治他「鹿児島県出水市海下古墳群」「鹿児島考古」5号
#	# 昭和32年第1号	1.75×1.35	不整 滑円形	なし		
#	# 第2号	1.50×97	長方形	なし		
#	阿久根市脇元		方形	大刀1 剣1 鎌約20 和泉式系高杯片		河口貞徳・上村俊雄「日本考古学 協会研究発表要旨(昭和45)」
#	川内市日川内横岡塚 山形原(4776番地) 第1号		台所に近い長方形		頭骨3 体分	
#	# 第2号		"	これらの石室より鐵・刀・ 劍・刀子・須恵器片・土師 器片・銅製品(輪口)・鐵環 など出土。4号の表層より 須恵器第II様式を出土した といふ。		"
#	# 第3号		"			"
#	# 第4号		"			"
#	# 第5号		"			"
#	# 第6号		"			"
#	# 第7号		"			"
#	川内市宮里若宮神社?					考古学雑誌9卷 9号(大正8年)
#	川内市湯島町滑平島					鹿児島県遺跡地 名表
#	# 宮里安養寺					"
#	# 船間島					"
#	薩摩郡薩摩町広橋					"
#	# 北方					"
#	# 中津川尾原					川内地方を中心とした郷土資料
#	# 別府原 水野1号		円形	長剣1 剣片2 鎌21		河口貞徳・上村俊雄「別府原古 墳群前古墳調査」

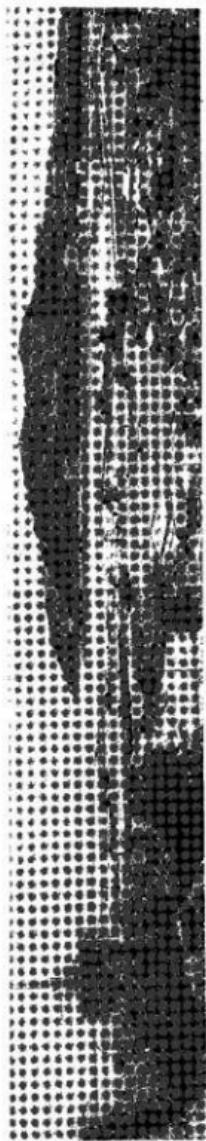
県名	地名	寸法 長辺×短辺 (地表下)	床の 平面形	副 葬 品	人骨	文 獻
鹿児島	薩摩郡薩摩町長野別府原第2号		円形			考古学雑誌57巻6号
"	第3号		"	長剣1 大刀1 錄11		"
"	第4号		"	錄4		"
"	第5号		"	盛土中より土器片2		"
"	第6号		"	長剣2 剣片1 短剣1 錄11		"
"	薩摩郡鶴田町柏原京塚原					鹿児島県遺跡地名表
"	出水郡高尾野町柴引、堂前1号	L54m×76cm (80~85cm)	長方形	短剣1 錄1 土器片 (成川式)		河口貞徳・上村俊雄「別府原古墳・堂前古墳調査」考古学雑誌57巻6号
"	(土盛裏)2号	1.17×79	不整 横円形	壺片(成川式)		
"	3号	2.35×1.50 (9.5cm)	長方形	錄9 刀子1		"
"	4号	1.50×79 (9.0~1m)	"	なし		"
"	5号	2.53×2.40 (L07~L10)	円形	短剣1 錄7		"
"	17号	1.82×78	長方形	壺1(免田式)		"
宮崎県	えびの市島内5基以上	不明	不明	不明	不明	上村俊雄「考古学上よりみる熊襲と隼人」「隼人」
"	灰塚	"	"	"	"	"
"	北諸県郡高城町香檳寺	"	"	"	"	"
熊本県	八代市敷川内町2981丸山第1号	3m×2.7m (1.5m)	横円形	"	"	江上敏勝「八代市敷川内町丸山古墳群第1号調査概報」衣豆志器40.4号
"	第2号	1m×80cm (約5.5cm)	"	"	"	
"	第3号	1.76m×1.75m	"	"	"	"
"	芦北郡田浦町小島			錄3		田浦町公民館より連絡
"	芦北郡芦北町宮ノ浦横手第1号	2.20×2.10 (0.60)	円形	短剣(細身)1 錄12		西健一郎氏による
"	第2号	1.75×1.45 (0.50)		錄片1 石窓外C短剣出土	人骨少 量	"
"	第3号	1.95×1.70 (0.57)	"	錄8	"	"
"	第4号			調査未了。他に7基確認 計約20基あるらしい	"	"
"	水俣市初野オツカ					水俣市史乙益崎査
"	水俣市上野北園			長剣1 錄10 1		"

県名	地名	寸法 長辺×短辺 (地表下)	床の 平面形	調査品	人骨	文献
熊本県	人吉市下原田町尾園	2.13m×1.94m (地表下0.97)	円形	長剣1 短剣1 鐵2		笠置英行氏による
"	球磨郡錦町木上・北(高原)人吉高等学校 院第1号		橢円形			牛島盛光氏による
"	" 第2号		"			"
"	" 第3号		"	鐵6 伴出関係不明。他に周囲より免田式・壺形土器・高环など出土す		"
"	" 第4号		"			"
"	" 第5号		"			"
"	" 第6号		"	短剣1 刀子1 鐵5 伴出関係不明		乙益調査
"	" 第7号		"			"
"	球磨郡允田町下乙本月 第1号		"			球磨上代文化資料集成1
"	" 第2号		"			"
"	球磨郡多良木町大久保			現地に2基以上の残がいへり		乙益調査
"	球磨郡梁田村西 1800の14新潟田1号		長方形		不明	杉村彰一氏調査による
"	" 2号		"	鉄鎌3	"	"
"	" 3号		"		"	"
"	" 4号	1.60×1.40	不整円形		"	"
"	" 5号	1.37×0.70	長方形	鉄鎌8 大刀片1	"	" 跡朱
"	" 6号		不整円形		"	"
"	" 7号		橢円形	鉄鎌2 古式土師器片	"	"
"	" 8号		不整円形	短剣1 鉄鎌3	"	"
"	" 9号		長方形	鉄鎌5	"	"
"	天草郡松島町阿村 カバノハナ		方形			三島格氏による
"	本渡市龜川妻鼻 第1号	1.50×0.90	長方形	銅鑄1 鐵2	4体以上	本渡市妻鼻墳墓群
"	" 第2号	1.60×0.80	"	遺物なし	数体分	"
"	" 第3号	1.86×1.22	"	鐵1劍片1鐵片1ガラス 勾玉1ガラス小玉2滑石 骨玉3滑石勾玉12滑石 小玉8石密升形1	1体以上	"
"	" 第4号	1.10×0.53	"	遺物なし	3体	"
"	" 第5号	1.20×0.90	"	"	1体以上	"

県名	地名	寸法 長辺×短辺 (地表下)	床の 平面形	副葬品	人骨	文 獻
新潟県	本渡市龟川妻鼻 第6号	1.40m×0.84m	長方形	遺物なし		本渡市妻鼻墳墓群
"	第7号	1.138×0.73	"	鐵片2	4体	"
"	第8号	2.00×1.40	"	鐵3・石室丹彩	12体	"
"	第9号	1.18×0.63	"	遺物なし	7体	"
"	第10号	1.50×1.07	"	"	4体	"
"	第11号	1.36×0.93	"	鐵6・銅1・滑石小玉3・土師 壺1・石室内に焚火の跡あり。 石室丹彩	4体	"
"	第12号	1.13×0.73	"	遺物なし	2体	"
"	第13号	1.48×1.00	"	大刀1・短剣1・鐵1	5体	"
"	第14号	1.40×1.12	"	鐵錐1・短剣1・鐵片1 石室丹彩	7体	"
"	第15号	破壊石材のみ	不明	不明	不明	"
"	第16号	0.84×0.77	方形	遺物なし	4体	"
"	第17号	1.20×0.82	長方形	滑石勾玉1・同小5・ガラ ス勾玉1・滑石小玉4・3・ガ ラス小玉4・劍片1	5体	"
"	第18号	1.28×0.64	"	劍片	3体	"
"	第19号	1.72×0.92	"	遺物なし	2体	"
"	第20号	0.90×0.71	方形	"	5体	"
"	第21号	0.84×0.37	石圓	"		"
"	第22号	1.08×0.55	長方形	鐵錐2	昭和35年発見 のため不明	"
"	第23号	1.33×0.59	"	遺物なし	3体 (小児を含)	"
"	第24号	1.41×1.10	方形	"	2体	"
"	第25号	1.02×0.90	"	長劍1	骨片少し	"
"	第26号	1.58×1.10	長方形	遺物なし	7体(同1・石室内第1 層2体第2・同3体第3 層と骨被出)	"
"	第27号	1.28×0.89	"	"	2~3体	"
"	第28号	2.08×1.36 ~1.06 長方形	堅穴式石 室に似た 長方形	長劍1・大刀1・短剣1・矛1 鐵2・鐵片1・土師器片・鐵 錐片	8体 軽骨一括	"
"	第29号	1.22×1.00	方形	劍片2	2~3体 軽骨一括	"
"	第31号	1.50×?	?	遺物なし	人骨残らず	"
"	第32号	1.37×0.90	長方形	"	"	"

県名	地名	寸法 長辺×短辺 (地表 F)	床の 平面形	副葬品	人骨	文献
熊本県	本渡市龜川妻鼻 第33号	1.00m×0.42m	長方形	遺物なし	人骨残 らず	本渡市妻鼻墳墓群
"	" 第34号	1.30×0.60	"	"	"	"
"	" 第35号	0.82×0.62	方形	"	"	"
"	" 第36号	1.70×15.2 ~0.89	長方形	長剣1.短剣2.大刀1.鐵1. 鐵1.土師器破片・剣片	6体	"
長崎県	北松浦郡宇久町 平・松原	約1.20× 約0.80	"		人骨あり	小田宮上達「五島 列島の弥生文化」

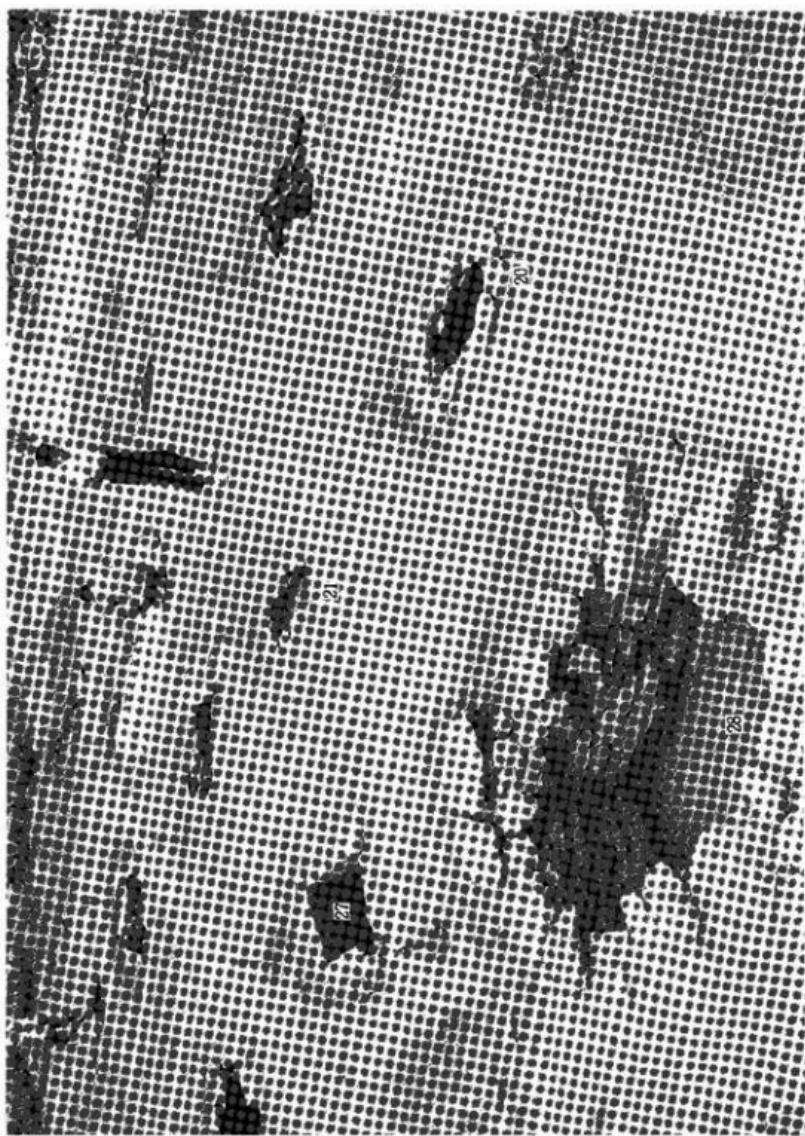
# 図 版



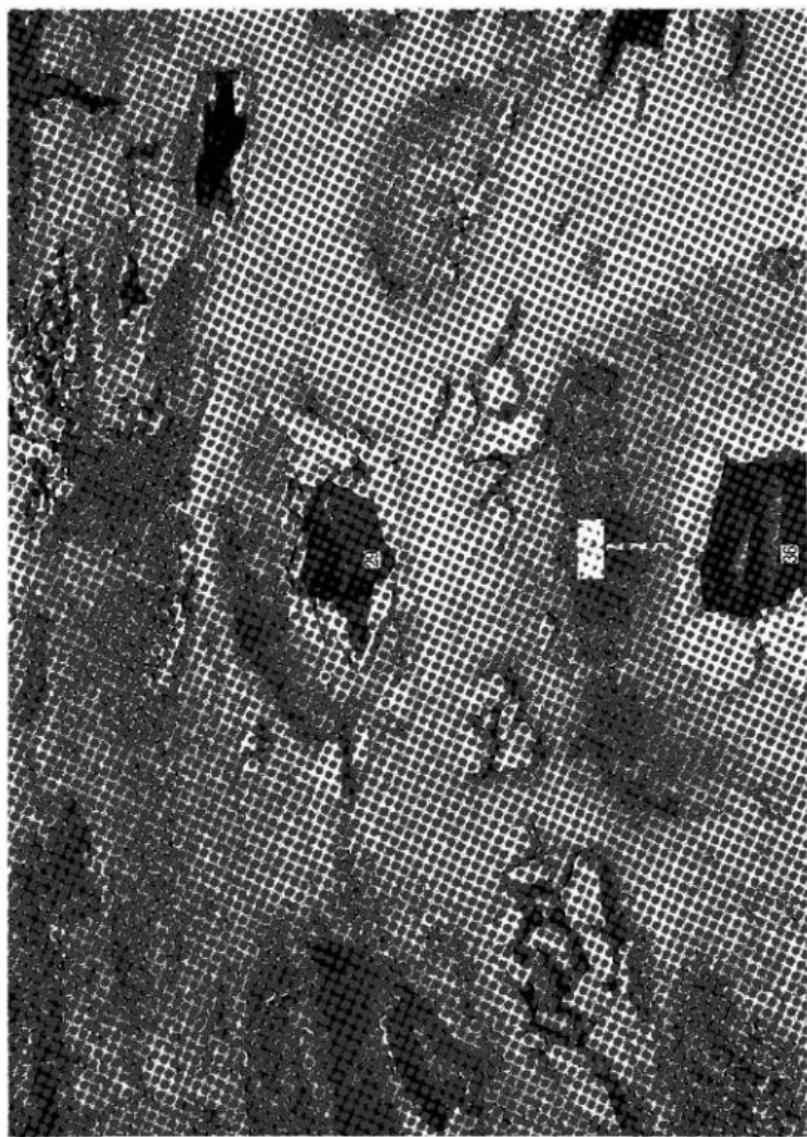
ホタルニュー天草  
(現ニヌー天草病院)  
船戸の向うは天草上島  
妻鼻墳墓群  
天草工業高校  
兔川にかかる新国道  
隅間橋(船戸橋)



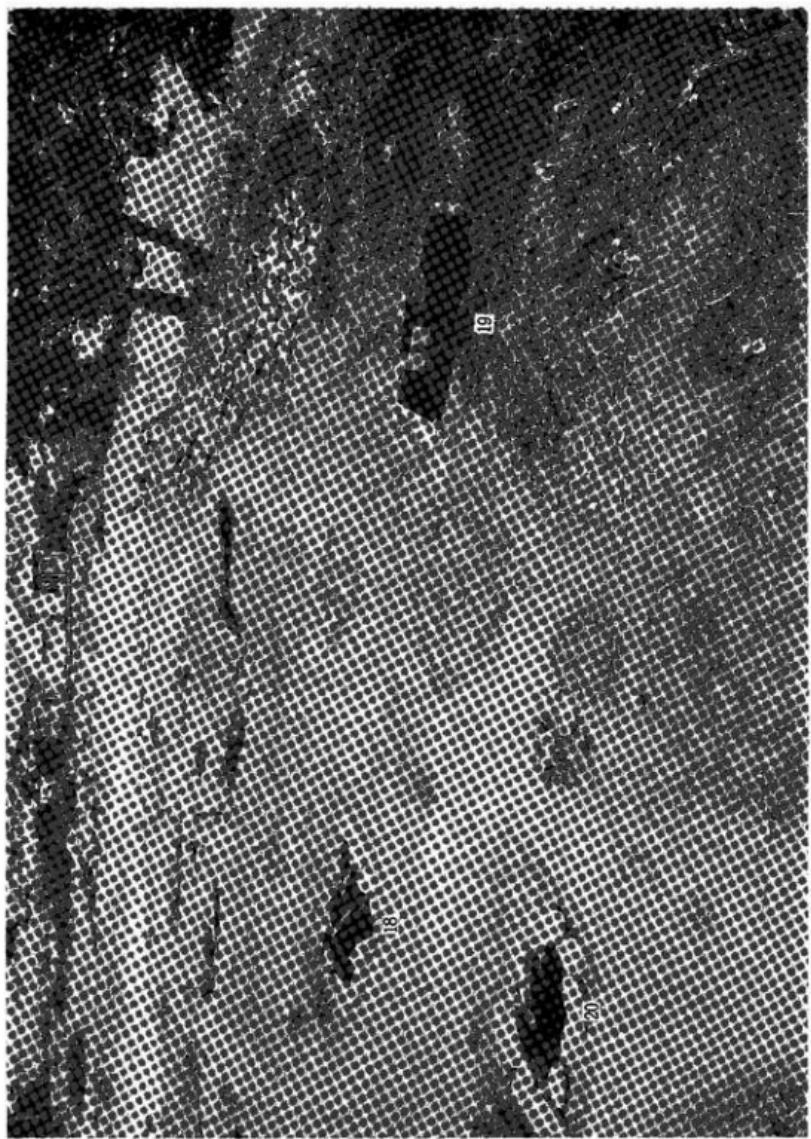
図版2 妻の鼻墳墓群遠景



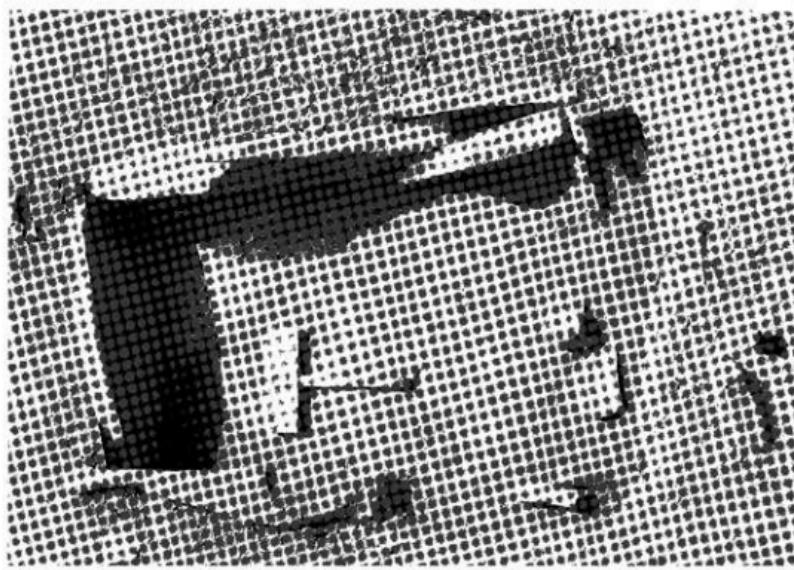
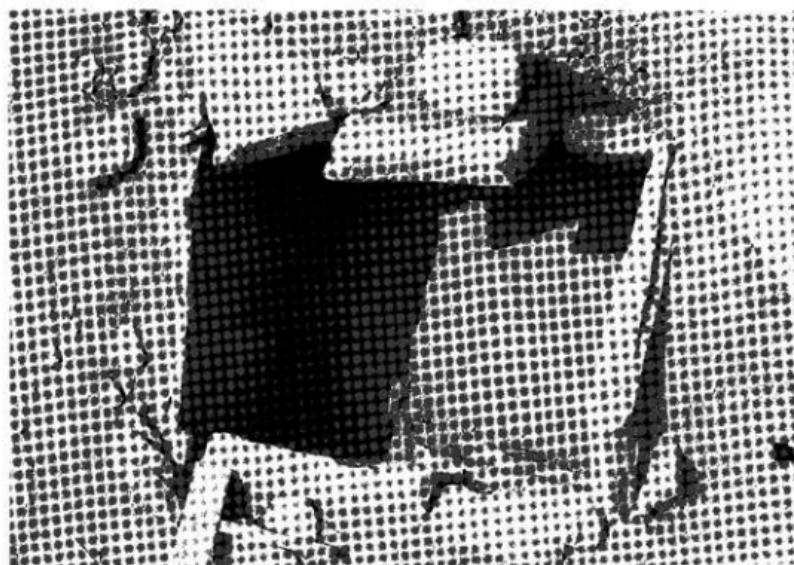
図版3 妻の鼻墳墓近景（1）



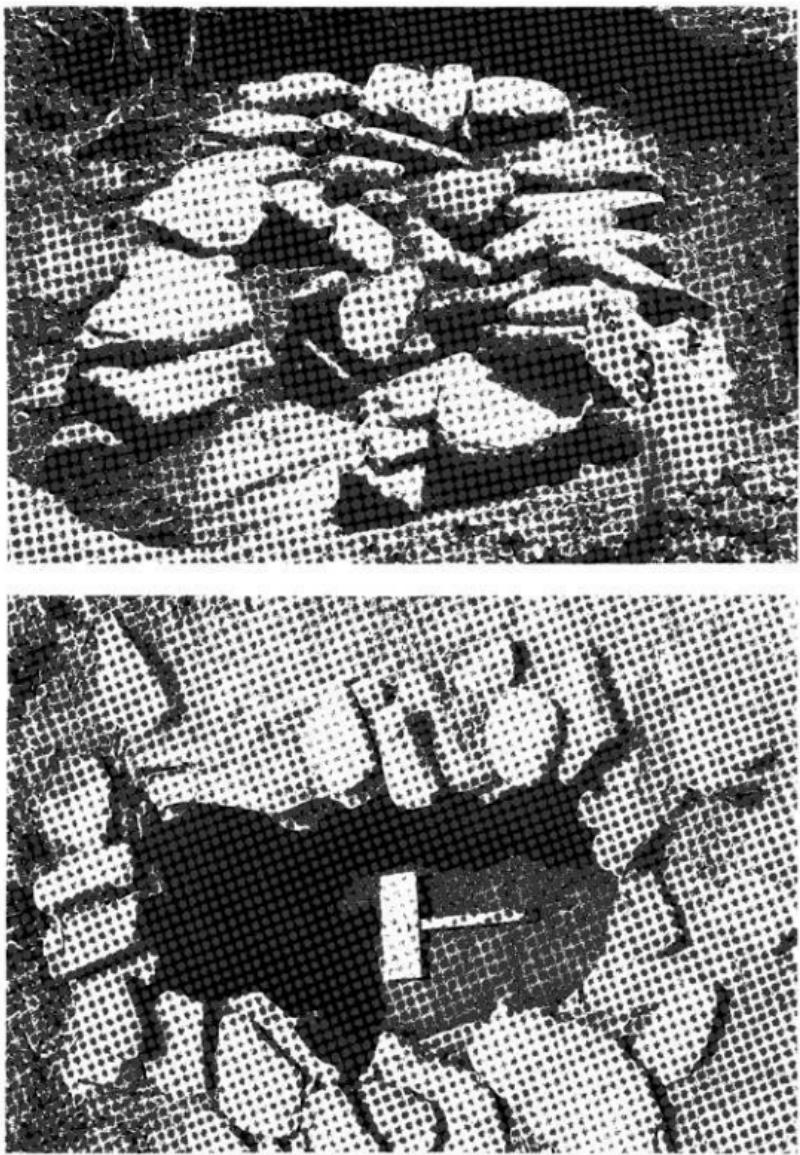
図版 4 妻の鼻墳墓群近景（2）



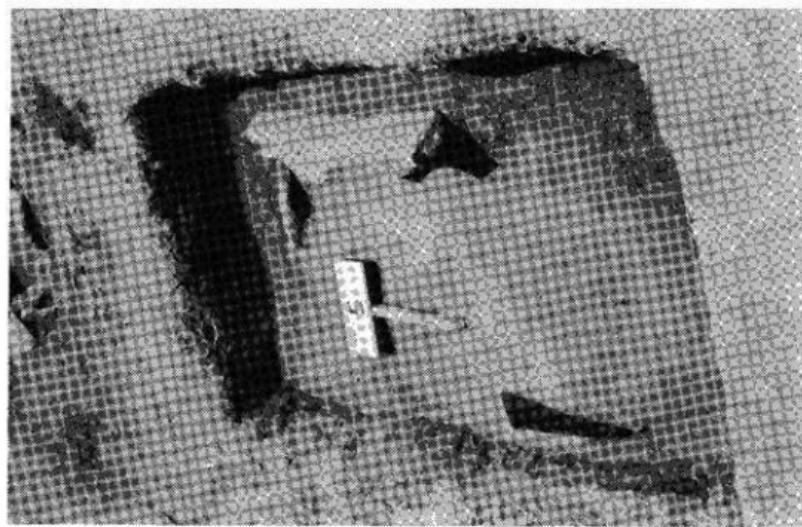
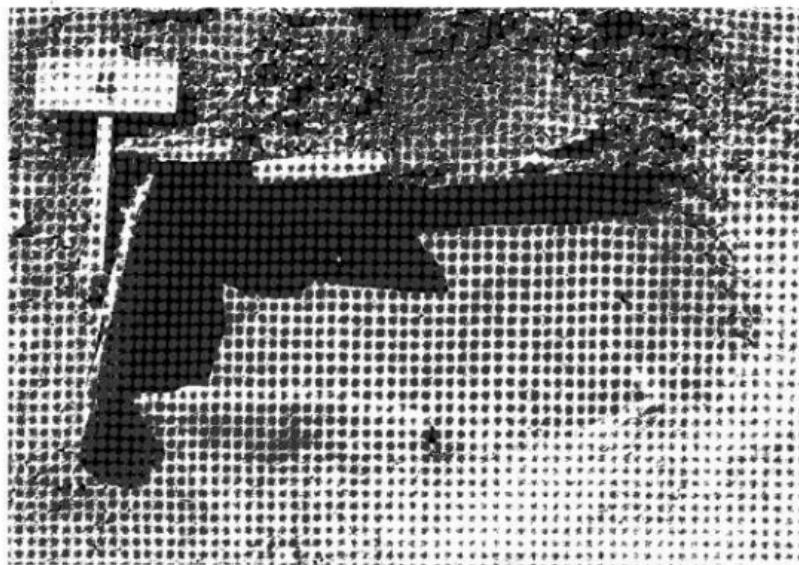
図版5 妻の鼻墳墓群近景（3）



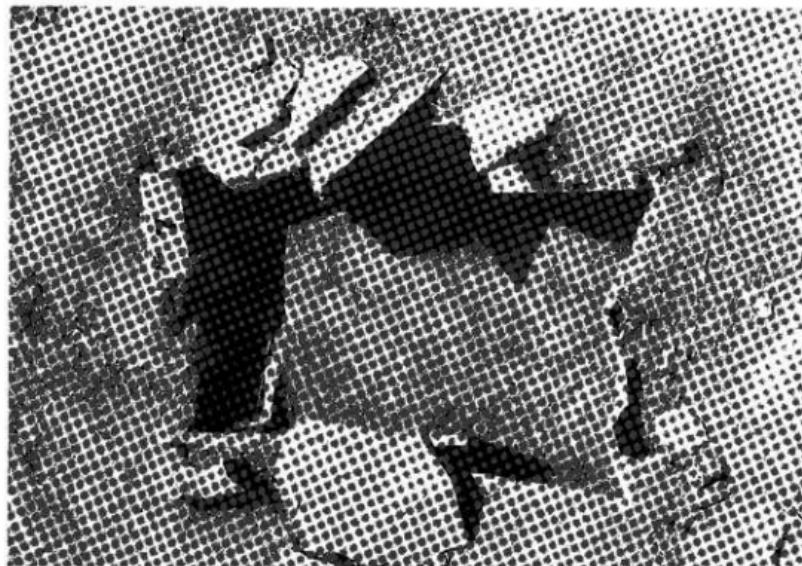
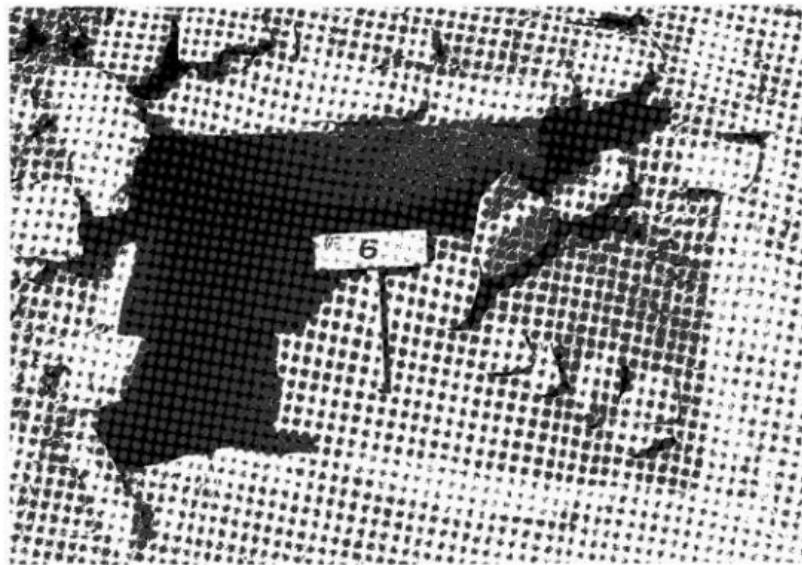
図版 6 妻の鼻塚墓群 1号（上）。2号（下）石室墓



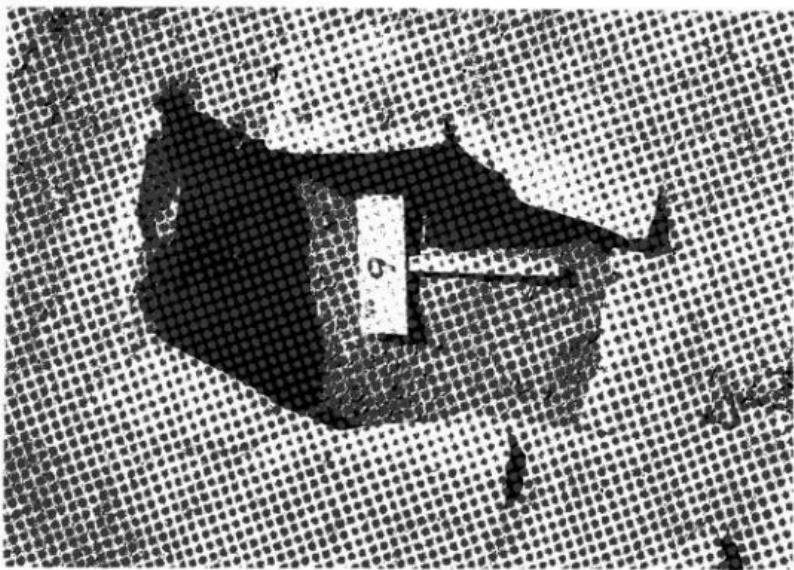
図版 7 妻の鼻墳群 3 号石室墓



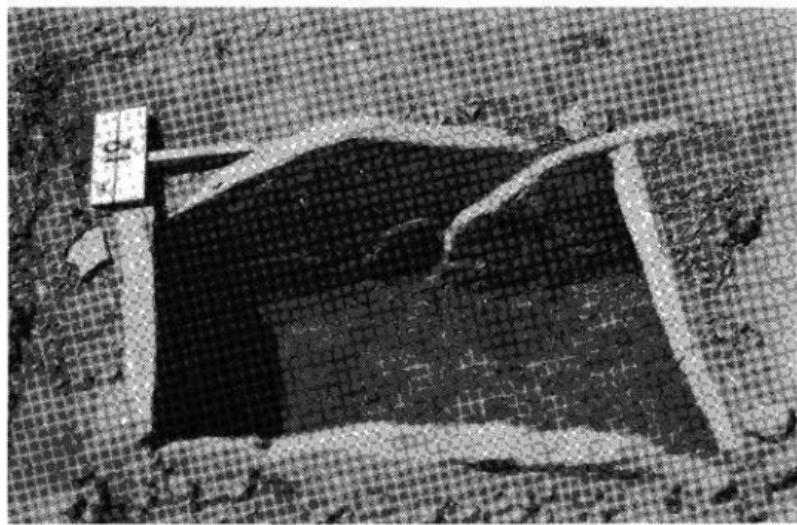
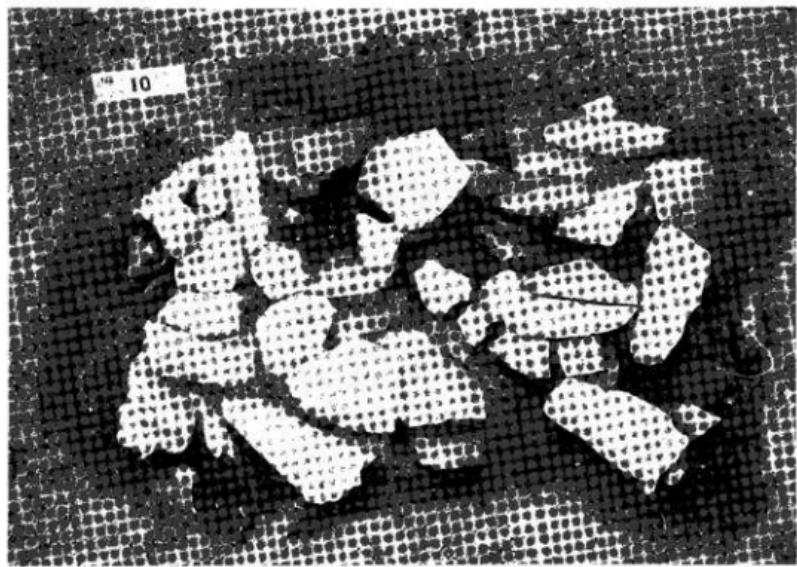
図版 8 妻の鼻塗基群 4 号（上）・5 号（下）石室墓



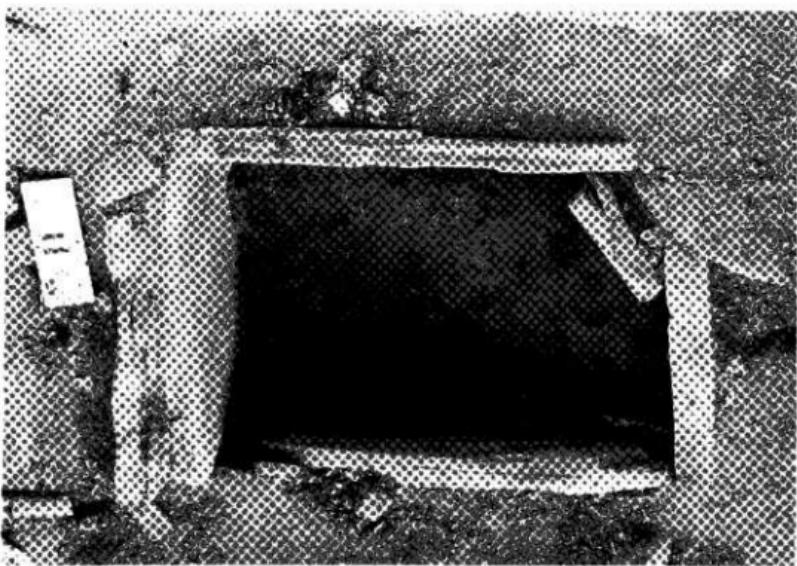
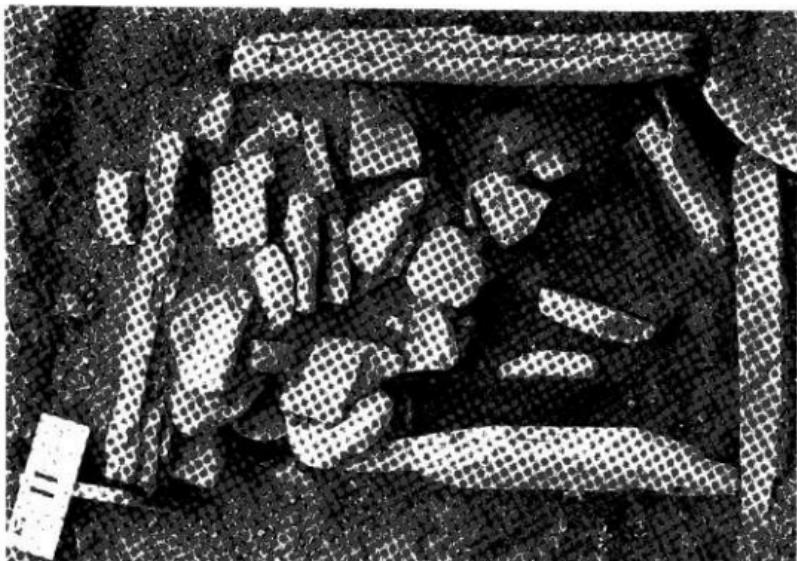
図版9 妻の鼻塙墓群6号（上）・7号（下）右室墓



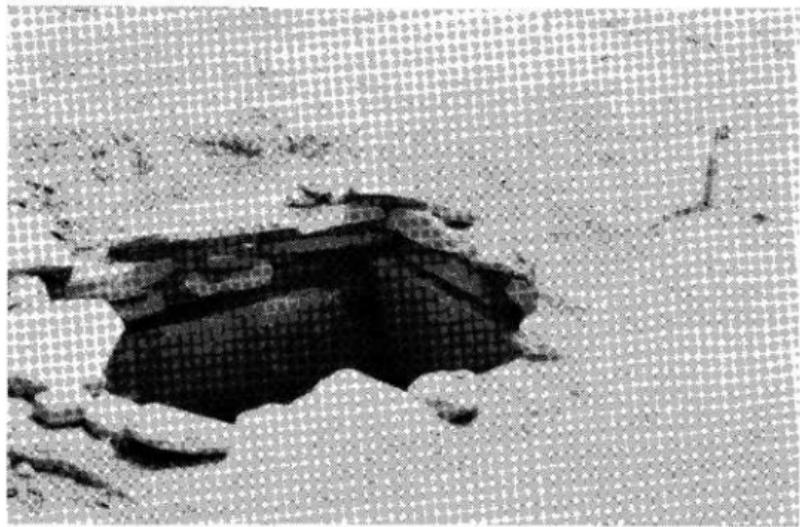
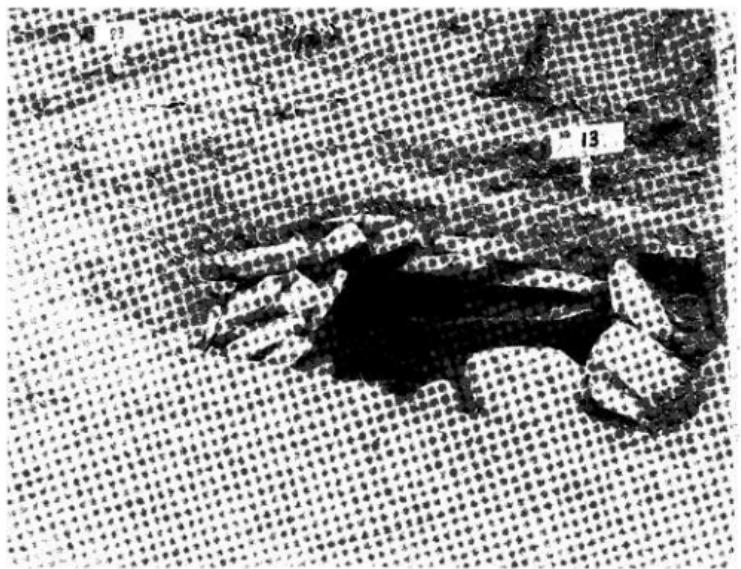
図版10 妻の鼻墳古都 8号（上）・9号（下）石室萬



図版11 妻の鼻墳墓群10号（上）・12号（下）石室墓



図版12 妻の鼻墳墓群11号石室素



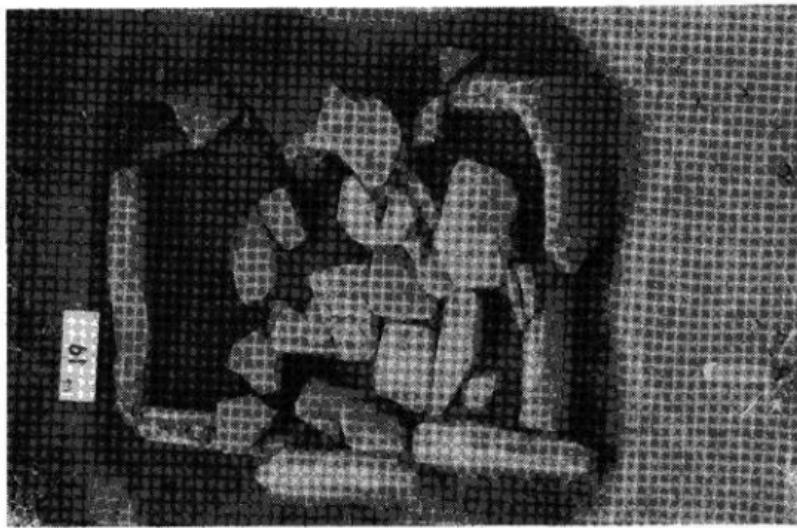
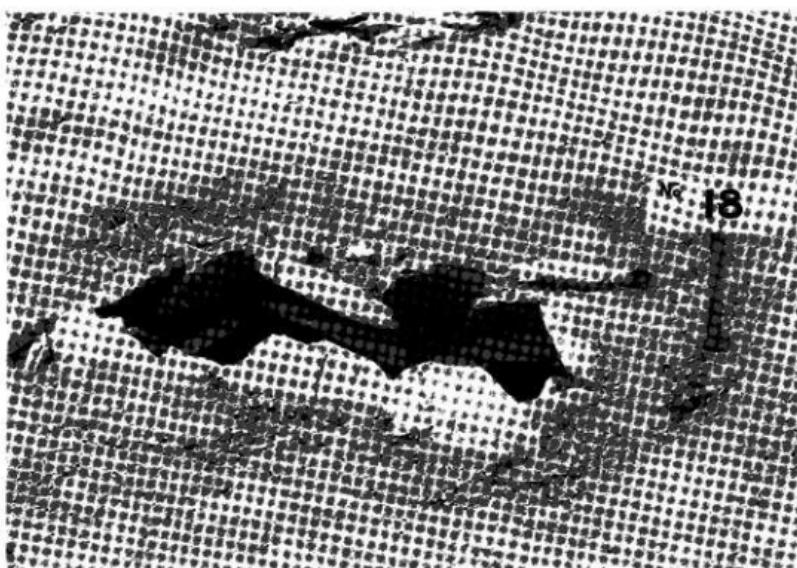
図版13 妻の鼻塙墓群13号（上）・14号（下）石室墓



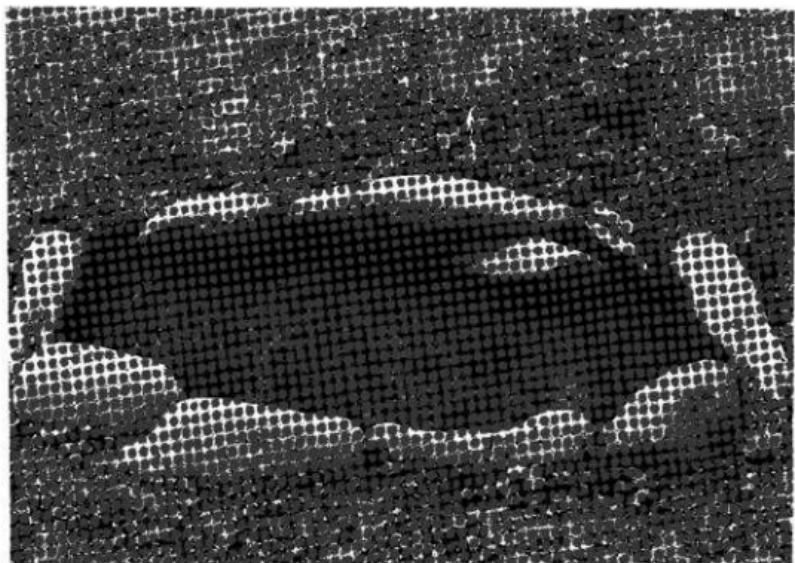
図版14 妻の鼻墳墓群15号（上）・16（下）石室墓



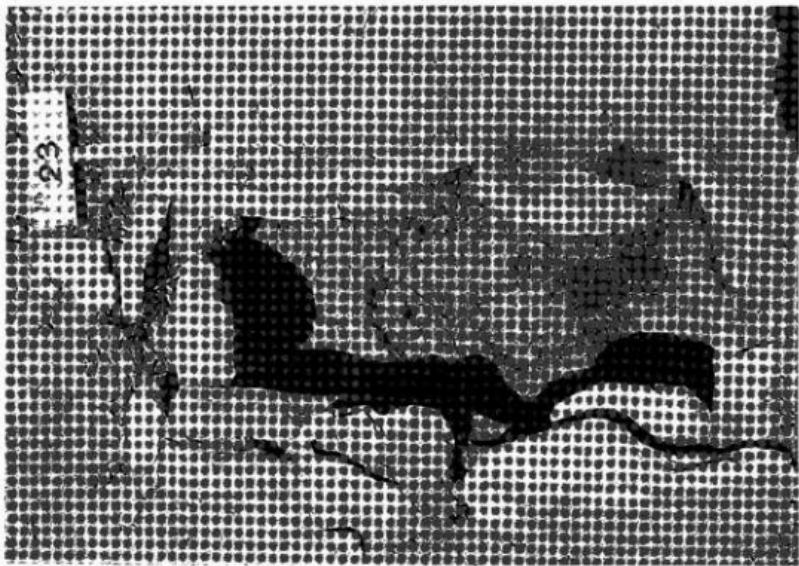
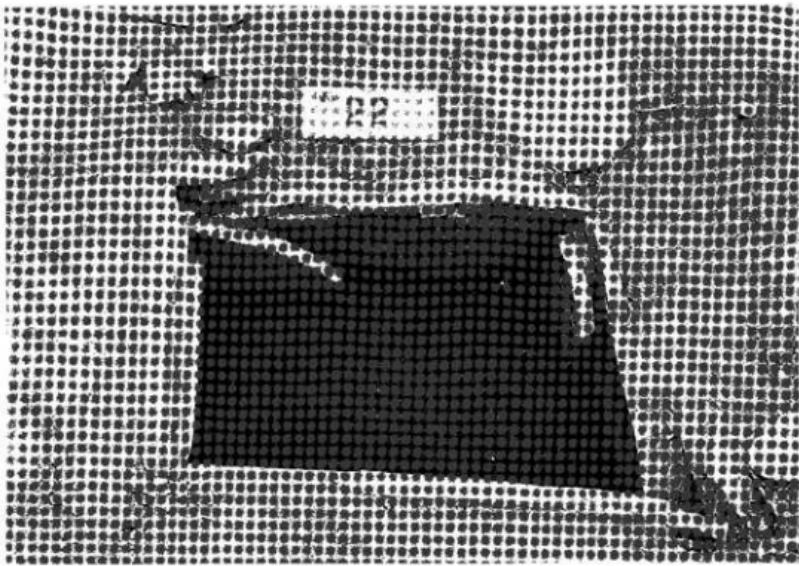
図版15 妻の鼻墳墓群17号石室墓



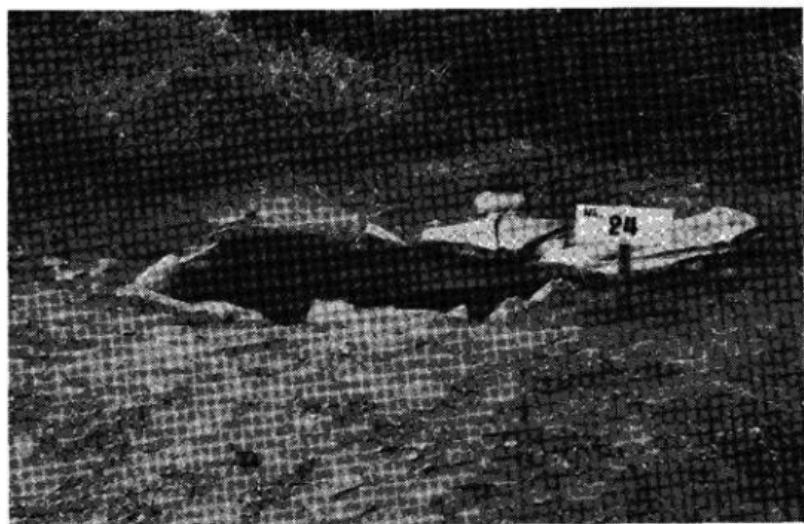
図版16 妻の鼻塗基群18号（上）・19号（下）石室墓



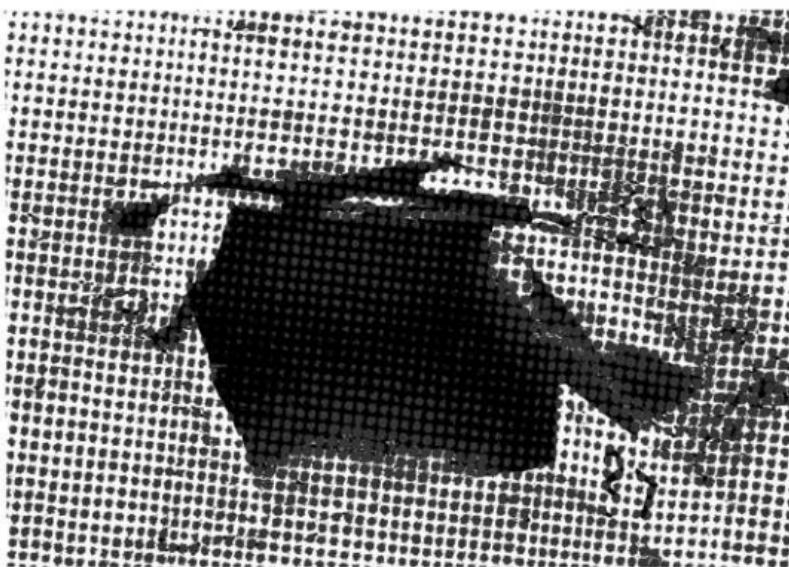
図版17 妻の鼻墳墓群20号（上）・21号（下）石室墳



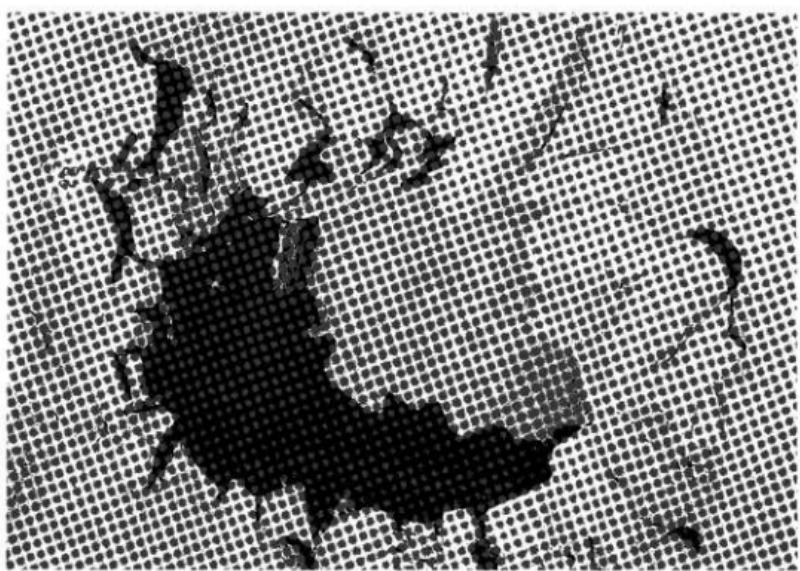
図版18 妻の鼻塚墓群22号(上)・23号(下)石室塚



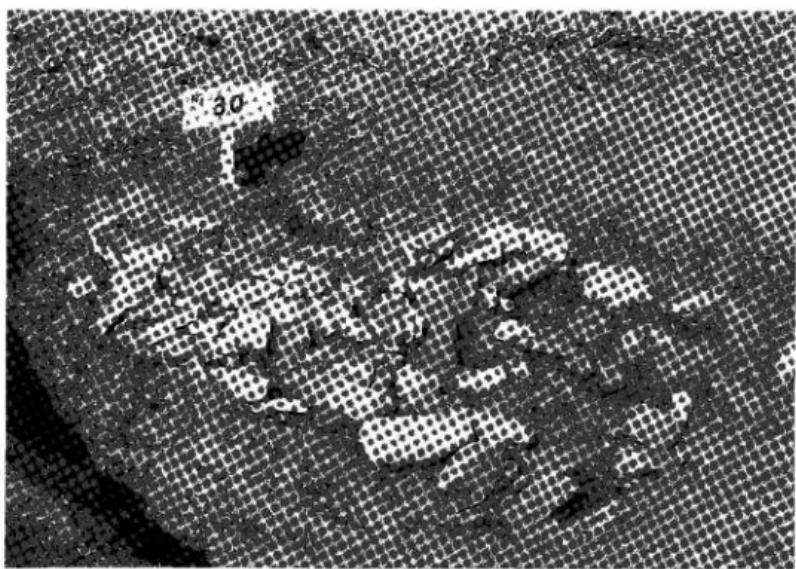
図版19 妻の鼻塚墓群24号（上）・25号（下）石室墓



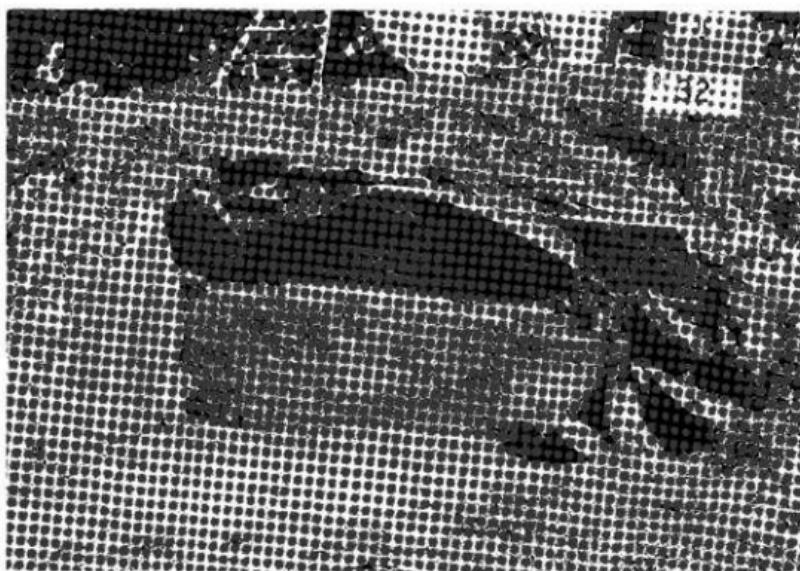
図版20 妻の鼻塗基群26号（上）・27号（下）石室墓



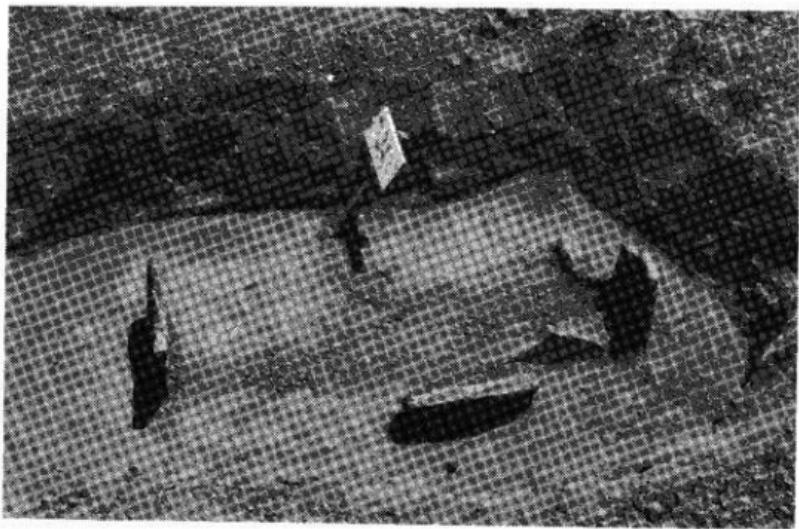
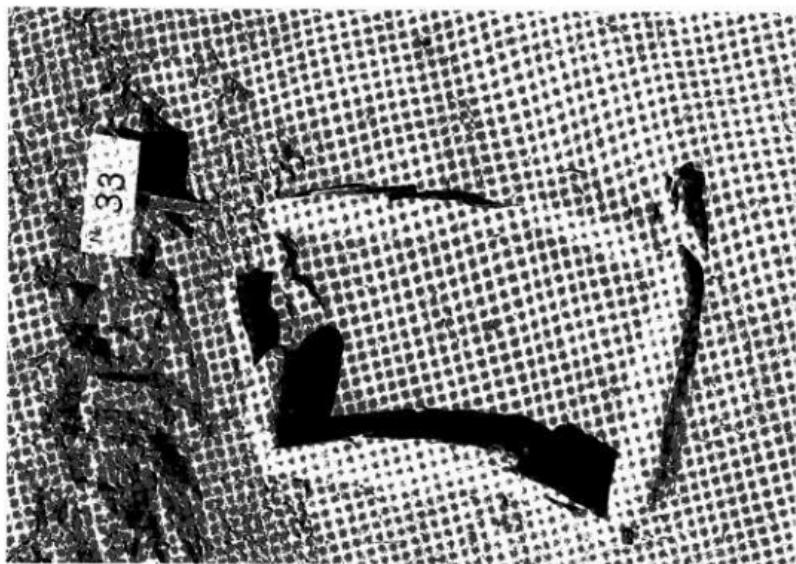
図版21 妻の鼻塙墓群28号石室墓



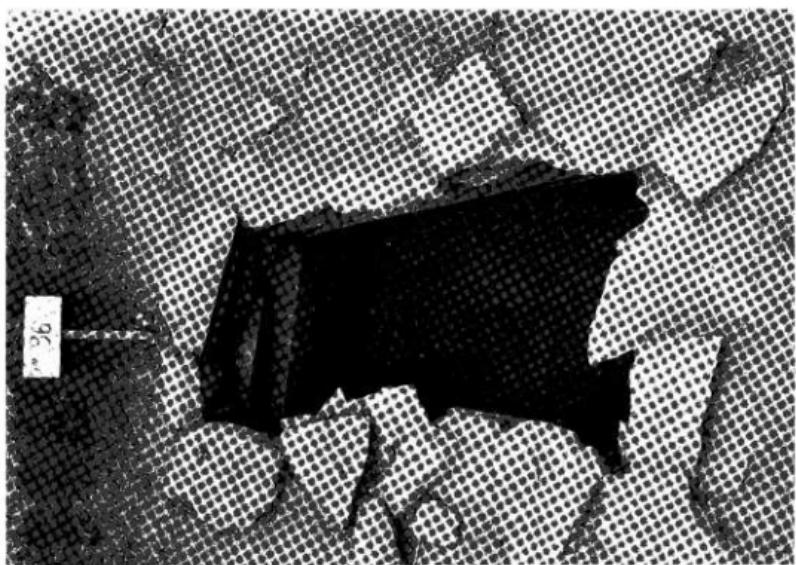
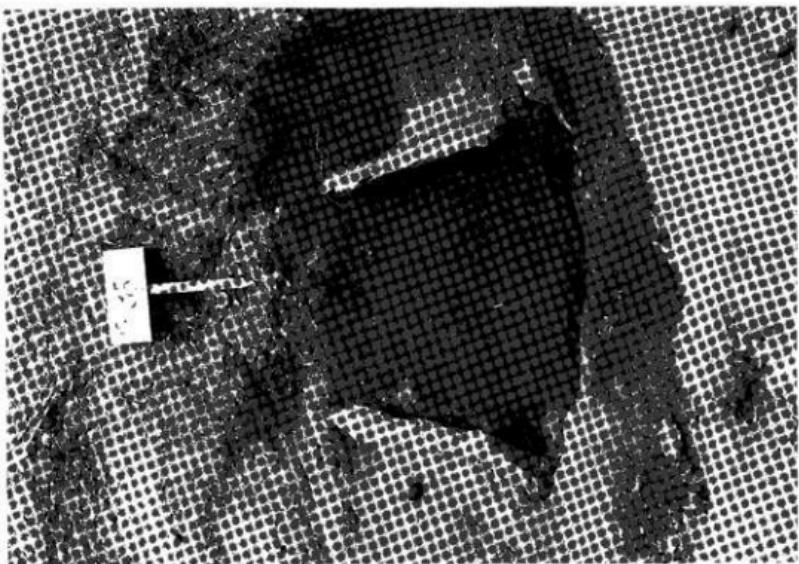
図版22 妻の鼻墳墓群29号（上）・30号（下）石室墓



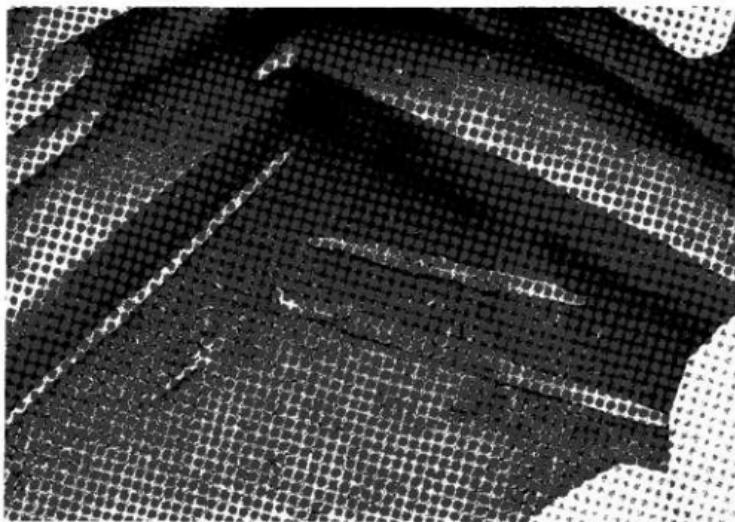
図版23 妻の鼻塚墓群31号（上）・32号（下）石室素



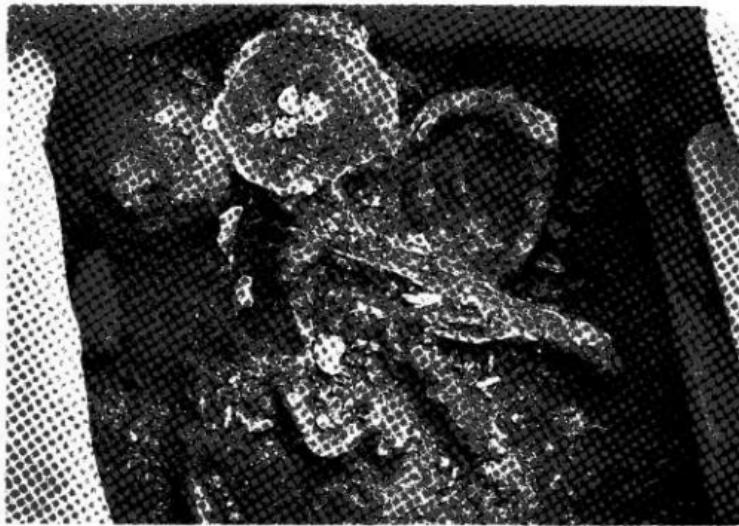
図版24 妻の鼻基群33号（上）・34号（下）石室墓



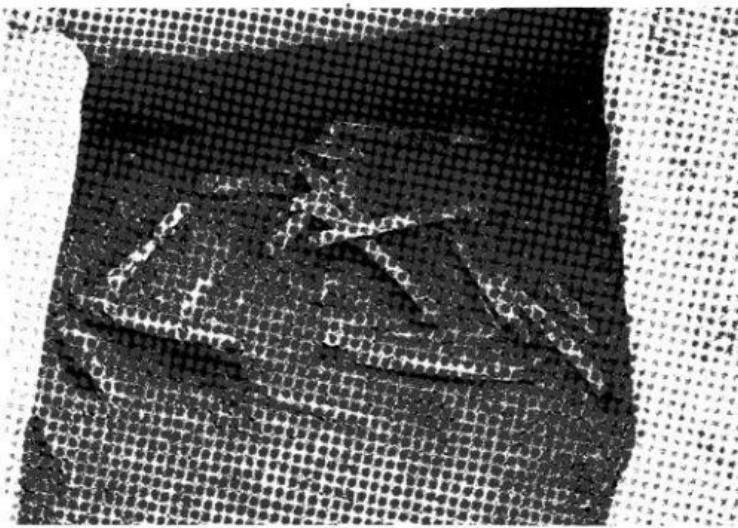
図版25 妻の鼻塚墓群35号（上）・36号（下）石室墓



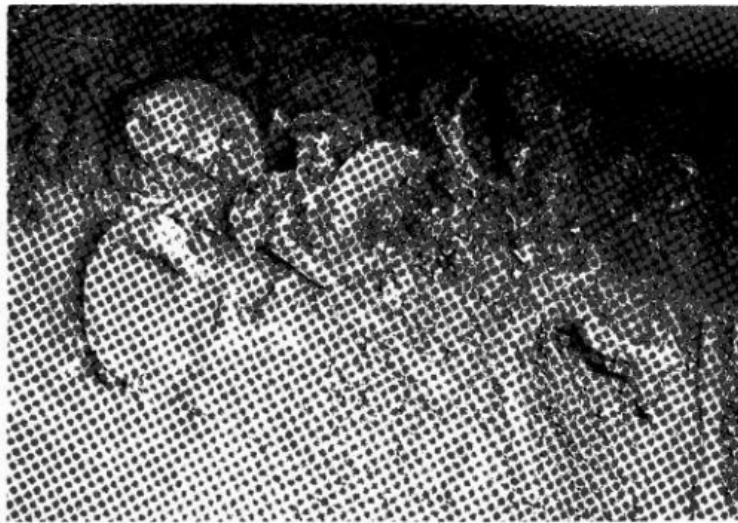
図版26 妻の鼻墳墓群36号石室墓鉄器出土状況



図版27 妻の鼻墳墓群 4号石室墓人骨出土状況



図版28 妻の鼻塙墓群7号石室墓人骨出土状況



図版29 妻の鼻塙墓群14号石室墓人骨出土状況

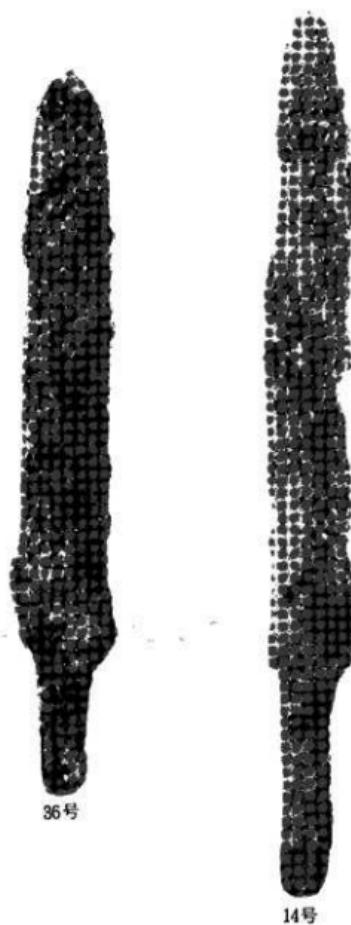
—



図版30 妻の鼻墳墓群出土遺物



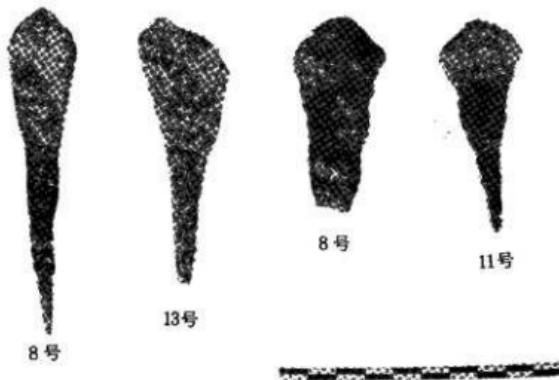
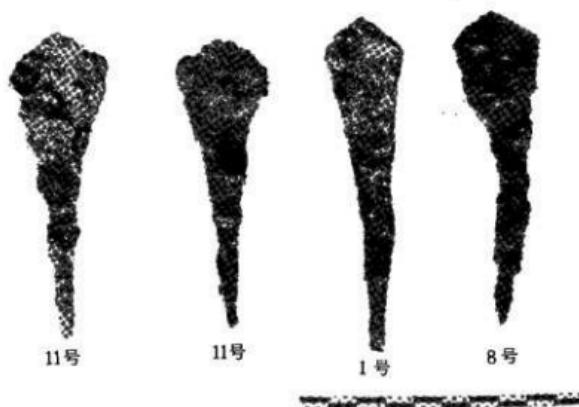
図版31 妻の鼻墳墓群出土遺物



図版32 妻の鼻墳墓群出土遺物



図版33 妻の鼻塚墓群出土遺物



図版34 妻の鼻墳墓群出土遺物



28号



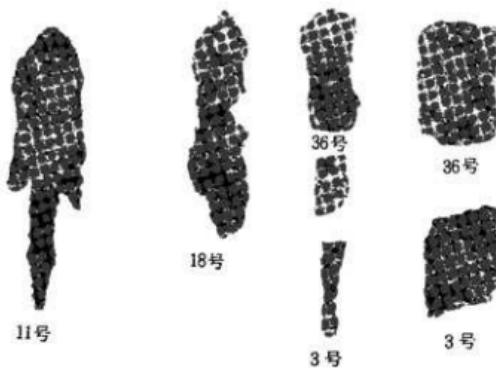
36号



11号



図版35 妻の鼻塙墓群出土遺物



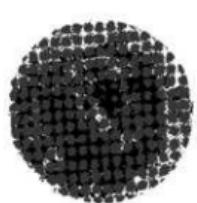
図版36 妻の鼻墳墓群出土遺物



36号



図版37 妻の鼻墳墓群出土遺物



3号



1号



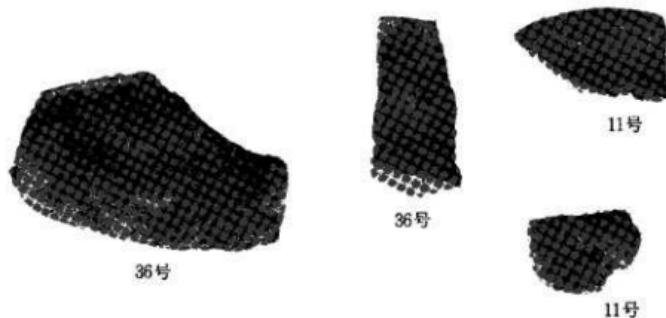
28号



図版38 妻の鼻墳墓群出土遺物



28号



図版39 妻の鼻塙墓群出土遺物

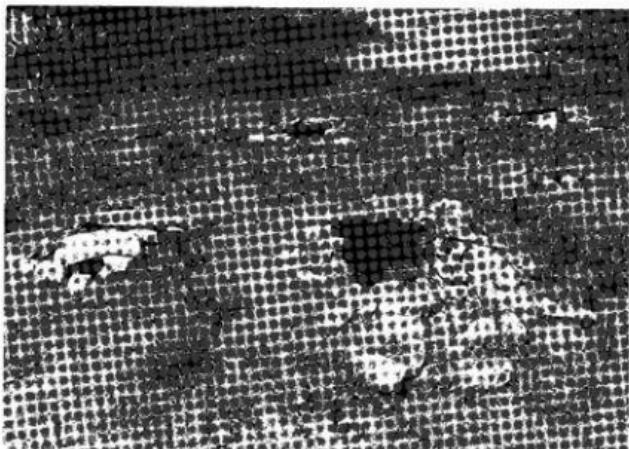
## あとがき

昭和 42 年の発掘から、早いもので 15 年の歳月が過ぎました。発掘は各方面の温かいご支援により予想をはるかにこえる成果をあげることができました。今回、報告書を発刊するにあたりご多忙のなか執筆いただきました各先生には心よりお礼申し上げます。

なお、妻の鼻鏡蓋群は昭和 48 年 8 月 27 日付県重要文化財に指定されました。宅地造成のため移転を余儀なくされ同地と地形上類似した佐伊津町明瀬海岸の工藤を天和国際ホテルより無償借り受け、県文化財専門委員原口長之氏の指導のもと石川山本人丈夫氏により昭和 49 年 4 月移転復元いたしました。

この報告書をご参照いただき、古代史の研究の一助として、更にいっそう文化財に対する愛護を深められますようお願いいたします。

本渡市教育委員会



---

本渡市文化財調査報告  
妻の鼻墳墓群

---

発行日 昭和 57 年 3 月 31 日  
発行者 本渡市教育委員会教育長 補上恒雄  
発行所 本渡市教育委員会  
熊本県本渡市東浜町 8 番 1 号  
☎ 863

電話 本渡 (09692) 3-1111番

---

印刷 イナガキ 印刷  
本渡市港町 13-20

---